

目 次

序章 時代背景と先行研究	1
i 「超高齢多死社会」の到来	1
ii ポックリ信仰に関する先行研究	10
I 高齢者の盛り場——巣鴨とげぬき地蔵通り	16
1 巣鴨とげぬき地蔵	16
2 高岩寺における信仰空間	18
3 高岩寺（とげぬき地蔵）に集う参詣者	22
4 とげぬき生活館相談所	27
5 巣鴨地蔵通り商店街	34
II 死と向き合う高齢者——ポックリ信仰	41
第二章 ポックリ信仰の諸相	42
1 呼称	42
2 信仰対象	45
3 地域分布	49
4 利益内容	50
5 ポックリ信仰との結びつき方	51
6 祈願方法	54
第三章 ポックリ信仰の流行——『恍惚の人』を一例に	88
1 老人介護文学（小説）	88
2 『恍惚の人』	90
3 『恍惚の人』とポックリ信仰の流行	90
3-1 作品内容から	90
3-2 刊行時代から	94
第四章 ポックリ信仰のメッカ——吉田寺	109
1 清水山吉田寺について	109
1-1 周辺環境	109
1-2 概況	110
2 吉田寺におけるポックリ信仰	113
2-1 ポックリ往生のいわれ	113
2-2 祈祷方法	113
3 吉田寺におけるポックリ信仰の展開	114
4 吉田寺におけるポックリ信仰の現状及びその参詣者	120
4-1 参詣人数の推移と男女比	120
4-2 参詣者の地域分布	123

4-3 団体参詣.....	124
第五章 東北地方におけるポックリ信仰の展開——風立寺を一例に	130
1 東北地方におけるポックリ信仰の展開	130
1-1 会津ころり三観音.....	130
1-2 普門院の「ころり観音」	131
1-3 関泉寺の「関のピンピンころり地蔵尊」	133
2 最上山浄国院風立寺	134
3 風立寺におけるポックリ信仰の受容.....	139
3-1 「安樂如来」と「ころり観音」	139
3-2 受容過程.....	142
4 信者の内実.....	144
終章	150
1 老いを生きる	150
2 時代の産物.....	151
3 消費される「シニア商品」	153
引用・参考文献（五十音順）	155

序章 時代背景と先行研究

筆者がかつて寺巡りをした際に、一枚の絵馬に目を引かれたことがある。そこに「どうかぼっくりと死んでいきますように」と書いてある。まるで「死を願う」というような口調で、初めて見た一外国人の私にとっては、衝撃的な一言であった。そこから、これは一体何なのであるか、なぜ人はそのように願うかなどと疑問や興味をもつようになり、本研究を始めたわけである。

本研究は、現代社会において高齢者がいかに死と向き合うかを考察するもので、そのために、日本特有で日本的な「安楽死」願望とされる「ポックリ信仰」を対象として取り扱い、分析を行った。

i 「超高齢多死社会」の到来

誰でも少なくとも一度は見たことがあるほど、大人用紙おむつの CM がテレビでよく放送されている。例えば、1993 年から発売されている大人用紙おむつブランド「エルモアいちばん」のテレビ CM では、ギャグ漫画家の和田ラヂヲ氏に紙パンツをイメージしたキャラクターが使用され、踊りながら「あなたのヒミツもらしません」とラテン風に歌う姿が流れている。そのように、大人用紙おむつの CM は、現在何の違和感もなく、幅広い世代に受け入れられている。

紙おむつ業界の大手であるユニ・チャームは、ベビー用紙おむつのテレビ CM は、1982 年 10 月に全国発売されたタイミングから放送し始めたが、大人用紙おむつの TVCM は 1995 年から開始しているとのことであるが、他の生産会社も恐らく同時期から実施しているのではないかと推測できる。つまり、わずか 20 年頃前から始まったことにもかかわらず、大人用紙おむつが私達の日常生活に浸透し、「紙おむつは赤ちゃん用」と当たり前のように思っていたわれわれの常識が変わりつつあることがわかる。さらに同社の調べによると、2012 年日本国内紙おむつ市場規模は大人用が 1590 億円に達し、ついに乳幼児用の 1390 億円を逆転している。では、いつ頃から日本で大人用紙おむつが一般家庭に浸透し、広く使われるようになったかという点、実はそれほど古いことではない。日本衛生材料工業連合会によると、1960 年代に紙綿を重ねた初期の「フラット型紙おむつ」が登場したが、一般には馴染みが薄く、もっぱら病院を中心に使用されていた。それが普及し始めた

のは1980年代で、1983年にテープ型大人用紙おむつが初発売された。その後、ユニ・チャームは1987年に大人用紙おむつ「ライフリー」、花王は1990年に「リリーフ」、王子ネピアは1993年に「ネピアテンダー」と各社が続々と大人用紙おむつの発売を始めた。また、同会の統計によると、大人用紙おむつの年間生産量は2007年の4542百万枚から2016年の7444百万枚までに上り、需要がさらに拡大していく傾向が見られる（図 i-1）。

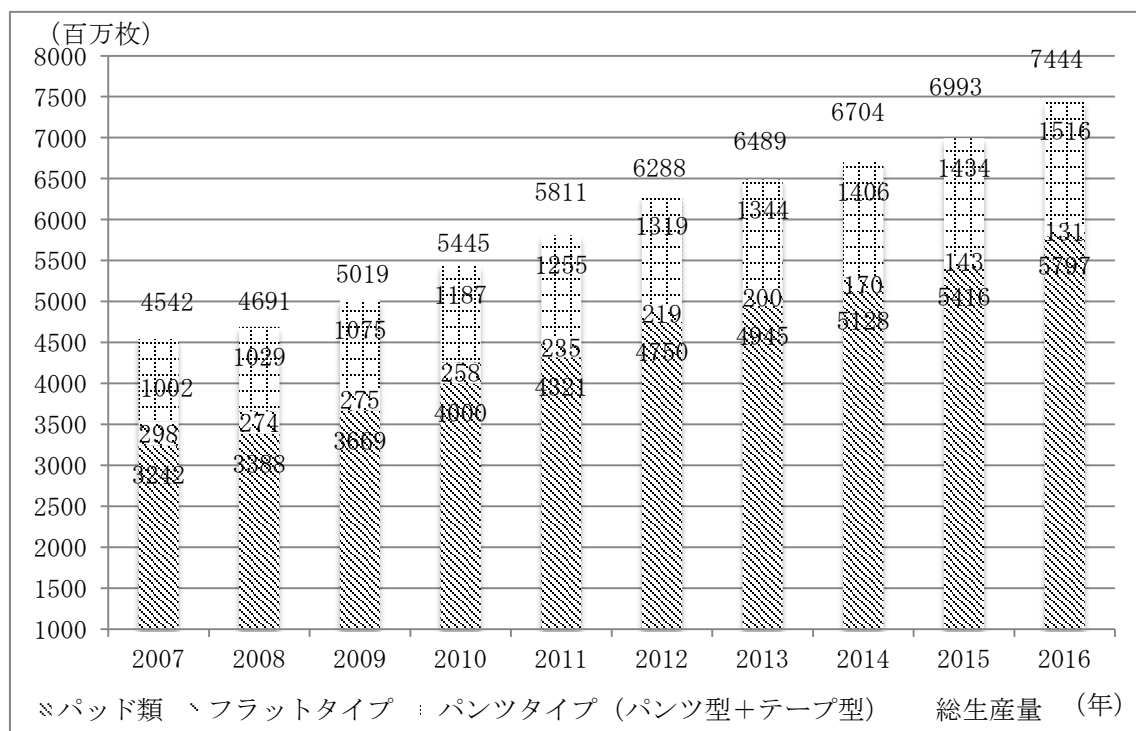


図 i-1 大人用紙おむつのタイプ別生産数量推移

紙おむつだけでなく、「シニアビジネス」研究分野の第一人者である村田裕之によると、「リカちゃん人形に『おばあちゃん』の登場」、「ゲームセンターはシニアの遊び場に」、「平日昼間のカラオケ客の6割がシニア」、「スマートフォンの主戦場はシニア向け」など、あらゆる産業にそのような子供・若者向けからシニア向けにターゲットを変えさせることが起きている。さらに、それらの劇的な変化は、すべて人口の年齢構成が若者中心から高齢者中心へシフトする「シニアシフト」に起因すると指摘している²。

¹ 日本衛生材料工業連合会ホームページ<http://www.jhpia.or.jp/data/data6.html> より筆者作成。

² 村田裕之『シニアシフトの衝撃』（ダイヤモンド社、2012）2-12頁を参照。

近年、「2025 年問題」という言葉がしばしば登場し、メディアを賑わせている。それは、一言でいうと、2025 年頃に日本が本格的に直面する超高齢社会の問題である。平成 18（2006）年 9 月の第 1 回介護施設等の在り方委員会で「今後の高齢化の進展～2025 年の超高齢社会像～」というテーマではじめて 2025 年の超高齢社会の問題について言及し、「これまでの高齢化の問題は、高齢化の進展の『速さ』の問題であったが、平成 27（2015）年以降は、高齢化率の『高さ』（＝高齢者数の多さ）が問題となる」と指摘されている。

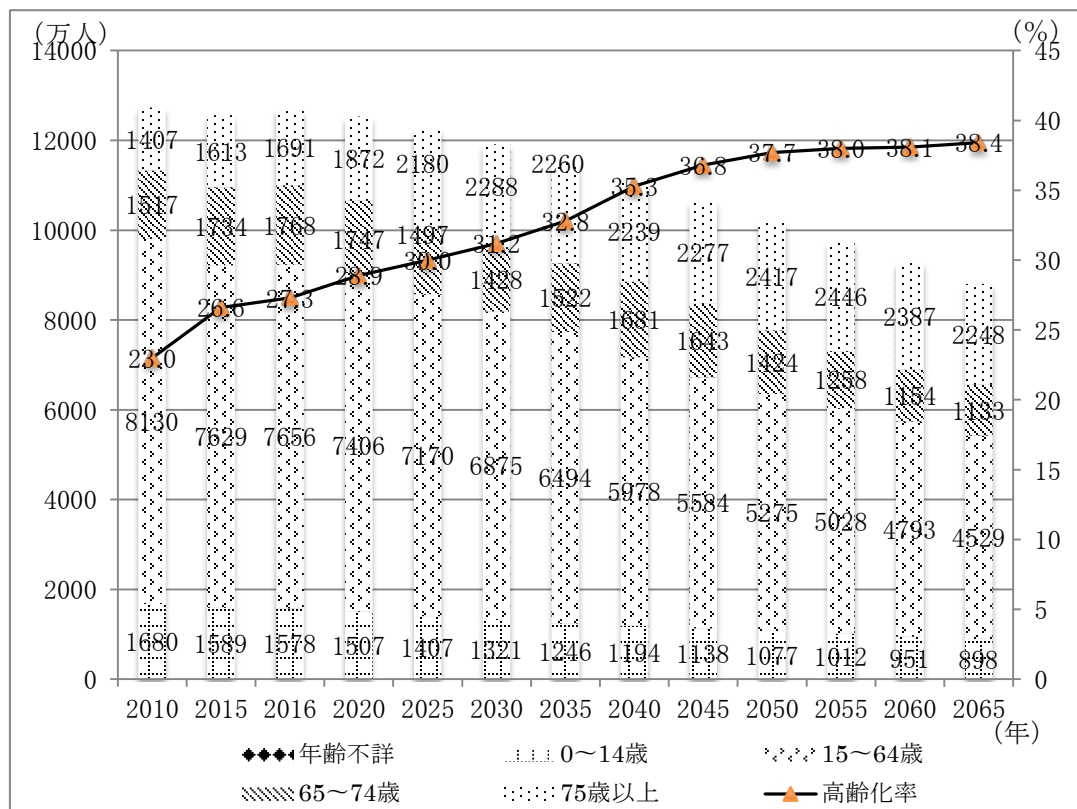


図 i-2 高齢化の推移及び将来人口推計³

日本は、1970 年に高齢化率が 7%を超え、国連の定めた「高齢化社会」に突入し、1994 年に 14%を超え、「高齢社会」となり、その後も上昇を続け、2016 年 10 月 1 日現在、65 歳以上の人口は 3459 万人で、総人口の 27.3%を占め、そのうち後期高齢、75 歳以上の人口は 1691 万人となっている。

³ 内閣府『平成 29 年版高齢社会白書』より筆者作成。

また、図 i-2 で示されているように、戦後のいわゆるベビーブームに生まれた「団塊世代」が 75 歳以上の後期高齢者の年齢に達する年である 2025 年になると、高齢者人口は 3677 万人に達し、そのうち 75 歳以上人口は 2180 万人、総人口の 17.8% を占めると見込まれている。その後も高齢者人口は増加傾向が続き、2042 年に 3935 万人でピークを迎え、その後は減少に転じると推計されている。高齢者人口が減少に転じても高齢化率は上昇傾向にあり、2065 年には 38.4% に達して、国民の約 2.6 人に 1 人が 65 歳以上の高齢者で、そのうち 75 歳以上人口は 25.5% に達し、約 4 人に 1 人が 75 歳以上の高齢者となると推計されている。

社会の超高齢化に伴い、高齢者世帯および一人暮らし高齢者も当然増えてくる。表 i からみればわかるように、2005 年から 2035 年の間に、世帯主が 65 歳以上である高齢者世帯は 1355 万世帯から 2021 万世帯に、全世帯の 27.6% から 40.8% に増加すると推計されている。そのうち、一人暮らしの高齢者世帯数は 465 万世帯から 762 万世帯に達すると見込まれ、これらの統計数値は日本において今いかに高齢化が進んでいるかを如実に物語っているのである。

表 i 高齢者世帯形態の推移及び将来推計⁴

年	世帯主が 65 歳以上の世帯（万世帯）				
	単独世帯（%） ⁵	夫婦のみ世帯（%） ⁶	その他	総数	一般世帯に占める割合
2005	387 (28.5)	465 (34.3)	503	1355	27.6%
2010	498 (30.7)	540 (33.3)	582	1620	31.2%
2015	601 (31.8)	621 (32.9)	667	1889	35.7%
2020	668 (33.3)	651 (32.5)	687	2006	37.8%
2025	701 (34.8)	645 (32.0)	669	2015	38.4%
2030	730 (36.3)	633 (31.5)	648	2011	39.2%
2035	762 (37.7)	625 (30.9)	634	2021	40.8%

⁴ 国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計（2013 年 1 月推計）」により筆者作成。

⁵ 単独世帯に付記してある比率は、「世帯主が 65 歳以上の世帯」に占める割合。

⁶ 同上。

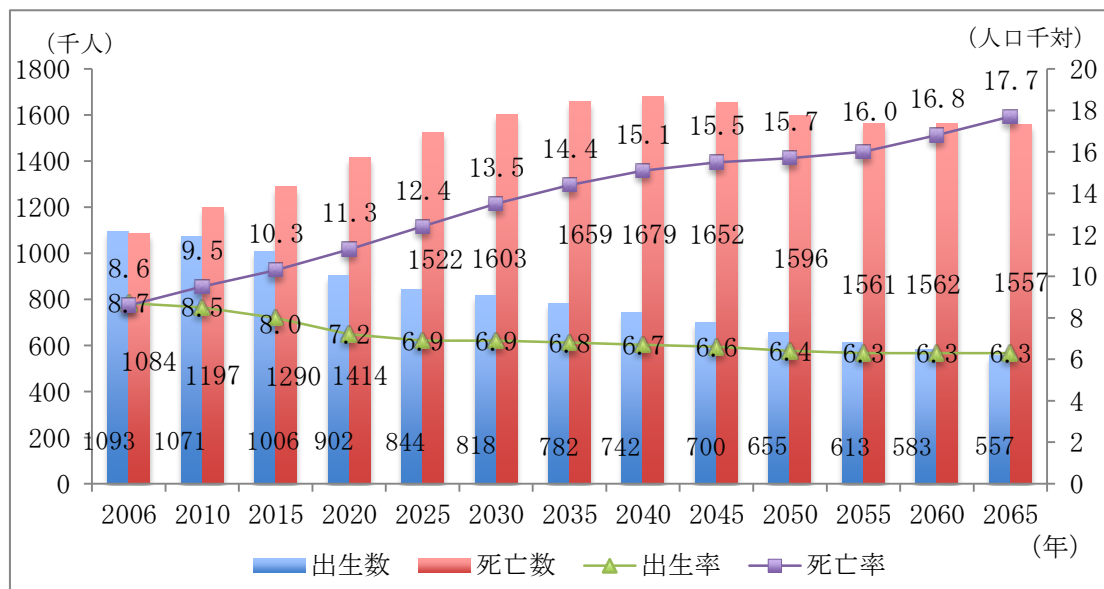


図 i-3 出生数と死亡数の推移及び将来推計⁷

また、高齢者人口の増大により死亡数は増加し、さらに出生率の低下で死亡率は上昇を続けると見込まれている（図 i-3）。2025 年に死亡率は 12.4% に達し、2065 年に 17.7% になると推計される。しかも、2016 年厚生労働省の「人口動態統計・死亡数年次推移」の結果によると、65 歳以上の死亡者が全死亡者数の 9 割近く、そのうち、80 歳以上の死亡者数が 6 割を占めるということで、高齢期を経たからの死がほとんどである時代になっているわけである。以上の一連の数字や事例は、まさしくわれわれに「超高齢多死社会」の到来を宣告している。

さらに、日本は平均寿命が世界一長い国として知られているが、元気で長生きできるかどうかはまた別の話である。世界保健機関（WHO）の 2016 年統計によると、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間を示す「健康寿命」は、日本人は 74.9 歳と世界一位だった。とはいえ、厚生労働省の「簡易生命表」では、2016 年 75 歳時点の平均余命は男が 12 年、女が 15 年もある。この期間は、ずっと寝たきりではなくても、多少なりとも人の手を借りるか、医療や介護の

⁷ 内閣府『平成 29 年版高齢社会白書』より筆者作成。

サービスを受けないと生活できないことになる。要するに、心身ともに弱くなっていく高齢者の増加により介護を必要とする高齢者が必然的に増えてくる。『平成 29 年版高齢社会白書』によると、介護保険制度における要介護又は要支援の認定を受けた人は、2014 年度末で 591.8 万人となり、2003 年度末の 370.4 万人から 221.4 万人も増加し、第 1 号被保険者の 17.9%を占めていることがわかった。そのうち、65～74 歳で要支援の認定を受けた人は 1.4%、要介護の認定を受けた人は 3.0%で、75 歳以上で要支援の認定を受けた人は 9.0%、要介護の認定を受けた人は 23.5%に達し、「大介護時代」の現実を鮮明に物語っている。

一方、これまでのさまざまな宗教調査の結果からみると、日本人の宗教行動の特徴の一つとして、加齢とともに、信仰熱心になる、あるいは宗教と関わりを持ちやすくなるという傾向が多く見られる。図 i-4 の統計数理研究所による 5 年ごとに行われる日本人の国民性調査の「宗教」項目の結果をみても、全体的には日本人は加齢するにつれて、次第に「信仰あり」の割合が高くなっていくことがわかる。

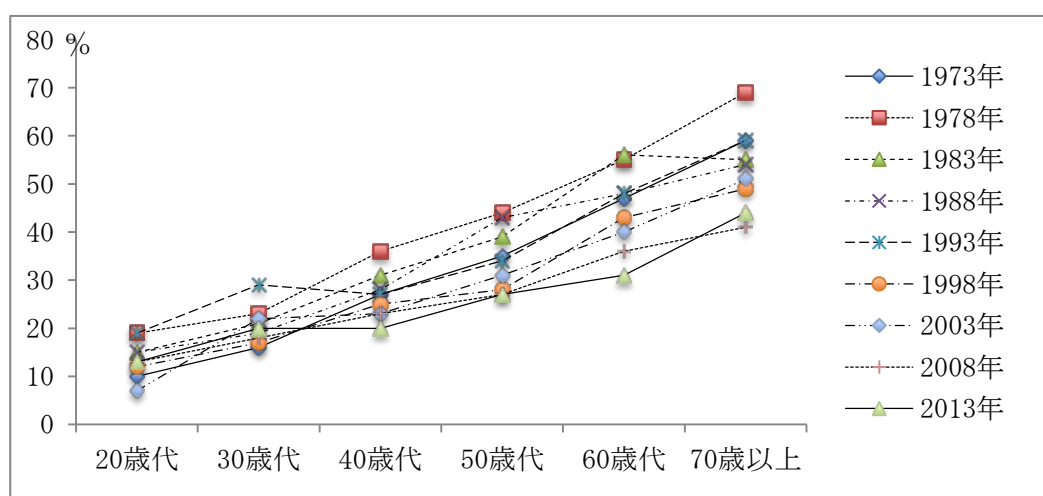


図 i-4 年齢別の「信仰あり」⁸

⁸ 統計数理研究所ホームページ: http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_all.htm より筆者作成。

また、NHK 放送世論調査所の調査結果にも同じような指摘がされている。

どこの国でも、若者は宗教に無関心だ、という。基本的な傾向としていうなら、それは、日本の場合にも当てはまる。日本人も、年をとるにつれて、しだいに宗教的になってゆく。〔NHK 放送世論調査所 1984 : 41-42 頁〕

さらに、このような傾向が生ずる原因については、以下のように述べられている。

おそらく、人生の中でいろいろの体験を積み重ねてゆくうちに、だんだんと宗教に近づいてゆくのであろう。(中略)人間を宗教に近づかせる体験の中で重要なものの一つは、身近な人の死、という体験であるように思われる。〔同上 44 頁〕

つまり、年を加えるに従って親しい人との死別を体験することが増え、それに退職後仕事や社会的地位を失ったり、病気になって健康を損ねたりすることによって、自分はこれから何によっていかに生きていくかという自らの死生観への問い直しも迫られる。そこで、宗教に心を据え、安らぎを求め、宗教とかわり合う契機になるわけである。

前述のような「超高齢」「多死」「大介護」時代の到来は、さまざまな社会問題を引き起こす一方、自らそれぞれの老後や死について考えさせる契機ともなる。2016 年 1 月に、宝島社の企業広告（新聞の全面広告）で、「死ぬときぐらい好きにさせてよ」というキャッチコピーで登場した女優の樹木希林の終活宣言が話題となったように、医療や社会福祉の現場では「尊厳死」「自然死」「平穏死」「安楽死」や「緩和ケア」など介護や死の迎え方など、人生の締めくくり方をあらかじめ考え、準備しておこうという風潮が広まっている。『週刊朝日』がこれを「終活」と命名し、「死」を連想させないキャッチな単語が一気に世間へ広がりを見せ、2010 年の流行語大賞にノミネートされ、2012 年の流行語大賞でトップテンにも選出されたほど「終活ブーム」となった。

一方、日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団によって行われた「2012 年度ホスピス・緩和ケア

に関する意識調査」の結果をみると、以下の図 i-5 のようになっている。

「もし自分で死に方を決められるとしたら、あなたはどちらが理想だと思いますか」と二者択一で尋ねたところ、7割くらいの人が「ある日、心臓病などで突然死ぬ」、いわゆる「ポックリ派」を選んだことがわかった。さらに年齢層別でみると、年齢層が高い人で「ある日、心臓病などで突然死ぬ」と回答する人が多い傾向が見られる。つまり、多くの高齢者たちが「ポックリ死願望」を持つということができよう。

また、図 i-6 で示されている第一生命経済研究所の小谷みどりの調査結果からも同じ傾向が見られる。「どんな最期が理想だと思うか」という質問に、「心筋梗塞などで、ある日突然死ぬ」と回答した人が 64.6%、「病気などで多少寝込んでもいいから、少しずつ死に向かっていく」と回答した人は 31.7%となったことがわかった。ポックリ死願望が根深いことが窺える。

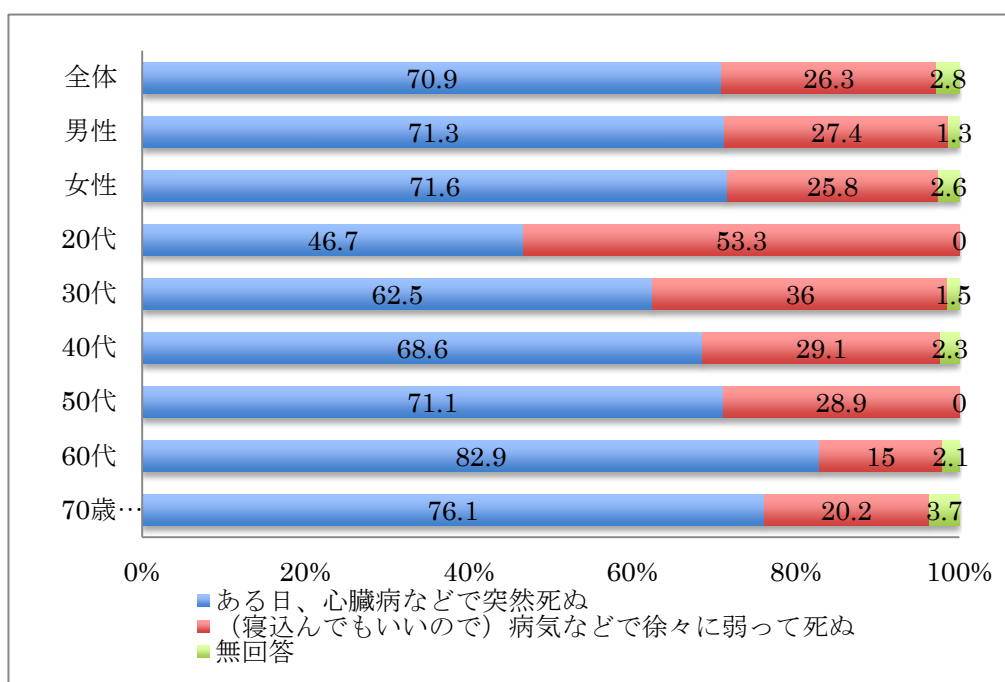


図 i-5 理想の死に方に関する意識調査⁹

⁹ 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団ホームページ <http://www.hospat.org/research-309.html> を参照, 2013 年 12 月 10 日閲覧。

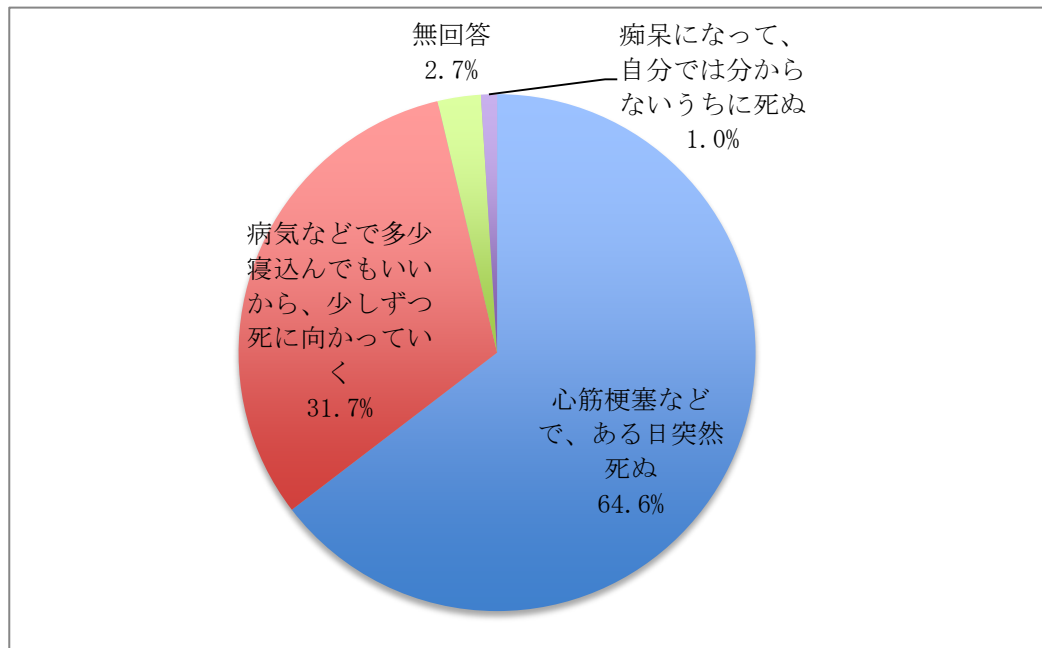


図 i-6 理想の最期¹⁰

つまり、今日は自殺や事故を除いて、青年期に死と向き合うチャンスは極めて少ない。むしろ長生きをしすぎて、寝たきりや認知症になることを恐れる。昔は多くの人にとって老後の最大の不安は、いかにして生計を維持するかということであったが、このところは健康の不安が常に上位を占める。その中身を探ってみると、歳を取って身体が自由が失われた時、どこで誰が面倒を見てくれるのだろうかという不安につき当たる。

このような時代にあって、いやでも自己の死を見つめながら死へのプロセスとしての高齢期生活を長く続けなければならなくなる現代日本人は、自分の死あるいは死の方についていかなる考えを持つか、いかに死と向き合うかを理解することは、今後の高齢者対策を考える上で、何らかの示唆を与えるきわめて重要かつ必要の一環と考えられる。それを明らかにするために、筆者は現代日本人の盛んな信仰を集めている「生」と「死」にまつわる「ポックリ信仰」を一例として考察することにした。

¹⁰ 小谷みどり「死に対する意識と死の恐れ」（第一生命経済研究所, 2004）を参照。

ii ポックリ信仰に関する先行研究

「ポックリ信仰」（「ころり」や「ぴんぴんころり」などの呼称もあるが、本研究では「ポックリ信仰」に統一）に触れる前に、まず「ぽっくり」という用語について見てみたい。『日本国語大辞典』の「ぽっくり」項目では、以下のように記されている。

物が折れるさま、転じて、元気だった人が突然死ぬさまを表わす語。＊河豚（1913）〈里見淳〉
「これでポックリ逝って了はないものでもない、とも思はれた」＊花冷え（1938）〈久保田万太郎〉3「さアこれからといふところで、ポックリ」〔小学館国語辞典編集部 2001：134 頁〕

その次に、「ぽっくりおうじょう」の項目があり、以下のような解説と用例が書かれている。

ぽっくりと死んでしまうこと。突然、苦しみも知らずに死ぬこと。頓死すること。また、その死にかた。＊浮世草子・傾城色三味線（1701）大坂・3「寺参しては、今でもぽっくり往生（ワウジャウ）とねがい」＊浮世草子・元禄大平記（1702）4・花の都におせやれおの子「ぽっくり往生（ワウジャウ）ねがふおやぢも」〔同上：135 頁〕

「ポックリ信仰」に関して、『日本民俗宗教辞典』では、「臨終まで排便を他人の世話にならない（シモの世話にならない）で健やかに過ごし、病まず寝つかず極楽往生したいという信仰である」〔武田 1998：517〕と定義されている。『日本民俗大辞典』では、「苦しむことなく、突然しかも安楽に死ぬるように願う神仏祈願。長患いをして嫁や子供たちに下の世話などで迷惑をかけることを厭うことからおこったものである」〔関沢 2000：543〕と記されている。

これまで、数多くの現場ルポはなされてきたが、専門的な研究はそれほど多くなかった。その中で、社会福祉分野では早くも一冊の学術的研究書にまとめたのが社会福祉学者の塚本哲（1976）である。塚本は『ぽっくりさん信仰』と題して、全国にポックリ信仰のゆかりの 19 ヶ所を巡拝した上で、「死後のための永遠の生命というような抽象的な諦念に先がけて、ぽっくりさんへの現世祈り

的な信仰」[塚本 1976 : 2 頁] であり、「ぽっくり信心というのは、大きくは、共通の願いで、どの神仏でも同じく、何と言っても老後に『しも』の世話にならないように、また安楽往生に、という祈りから出発したわけです」[同上 : 28 頁] と指摘し、このような信仰は、「確実な形の整った信仰の論理があるというよりも、民衆の側にある切なる願望が、ひとりひとりの心の中に固まって、その生活を通しての共感が大きな信仰の輪をつくるのだろう」[同上 : 103 頁] と述べている。

ぽっくり死ぬるとはいっても、病気などまったくしないで、床にもつかないということではないと思います。日頃は元気な体でいても、老人が死にむかった時は、いくらかの前哨戦とでもいう症状があったり、病気もすれば、煩うこともまったくないとはいえません。ただそれが、長い病床生活で、とりわけ、ひとりで排便の始末もできないような姿になりますと、日頃から好意はもたれていても、周囲で看護する人の疲労も重なって、何となく疎んぜられるようになります。(中略) そんなわけで、老人ともなれば、あまり周囲に迷惑をかけないように、生きている間はできるだけ達者でいて、いざ死に直面するとなれば、ぽっくり死にたいと思うのが、人情というものです。こうした願いは、すこし齢を感じはじめると、誰の上にも起こる共通した願いです。[同上 : 13-14 頁]

さらに、塚本はポックリ信仰が現代のように医療技術がかなり進歩した社会に流行のようになったことの裏には、老後病気になっても世話してくれる人がいなく、孤独の淋しさをかこちながら生きていることの苦しみが、われわれの社会から取り去られていないということがあると、どうにもならない宿命的な生死の前に、施すべき術もなく、もはや人間を超越したある力、すなわち神とか仏とかいう、抽象の世界にひたすら救いを求める場合が人間にはあると示している。

その他にも、いくつかの論考があるが、塚本と同じ研究チームのメンバーである社会福祉学者の芝崎真悟(1975)と山口信治(1978)が挙げられる。芝崎真悟は、いわゆるポックリ寺は、現代社会にあって、老人は自らの老後に著しく不安や絶望を感じ、なんとかこのような重態にならないように、もしこのような事態になるのなら、ポックリ死にたいという願いに答えてくれる対象である

述べている。

端的に言うならば、ポックリ信仰は、老人の現代社会からの静かな離脱現象であり、反面、老人の現体制に対する悲しい、弱々しい抵抗の現われであり、現代社会において、人間老人としての尊厳を保つた一つ残された手段なのです。それは、社会的弱者としての老人の佛に救いを求める言葉なき哀願の叫びなのです。[芝崎 1975 : 47 頁]

山口信治はポックリ寺へ参拝する年寄りの行動特徴を分析し、「大衆化した『ポックリ信仰』は一方しも（失禁）にまつわるきわめて個人的な祈願指向に基づく現象といえるが他方この『ポックリ信仰』は、大衆社会のマス・レジャーとしての要素をも有含している」とポックリ信仰と「老人の孤独」の関わりについて考察を行い、下の世話にならず長生きすることがポックリ信仰の「第一義的利益」で、孤独の解消は「第二義的利益」であると指摘している。さらに、「死」という往生指向と言いながらも強く「生」へ執着して、むしろ逆に生を求めてポックリ信仰に集中しているのではないかと述べている。

「ポックリ信仰」というのは、確実に近づきつつある死への備えということよりも、むしろ不確実な垂れ流しへのそれであり、したがってまた、こうした健康こそは、彼らの自己許容と、他者からうけ入れられる最大かつ必要十分な条件と言わなければならないとするならば、当然彼の思いやところがその痛みに集中していると言っても少しも過言ではない。[山口 1978 : 187 頁]

その他、東京都健康長寿医療センターの前身である東京都老人総合研究所心理研究室長であった井上勝也（1978）はポックリ寺を訪れた老人を対象にその参詣動機に焦点を当て、ポックリ願望は形の上では死の願望であるにも拘らず、内実は、死によって、より良き生を保とうとする、人間としてのプライドに満ちた生を指向した願望である。その意味でポックリ願望は、本質的に、健康で

幸福な生を願う「長寿願望」と同根であり、むしろ長寿願望そのものであるとさえ言えると示している。

佐々木陽子（2011,2015a,2015b）はポックリ信仰を土俗的民間信仰の一つとして捉え、さらに、「ポックリ信仰の下位概念」として「嫁いらず信仰」と称して取り扱い、「介護者として嫁を自明視して成り立つ信仰」であり、「無限抱擁的な母性に象徴される女性へのベクトルを暗示していると考えられる」とポックリ信仰とジェンダーとの関わり及びそれに潜む介護問題について考察を行った。

宗教学や民俗学分野では、木村博（1979,1989,1993）がいち早く「安楽死」をめぐる民俗の一つの対象としてポックリ信仰を取り上げ、いわゆる「安楽死」は法律上許されないかもしれないが、人が果たす代わりに、神仏にやっていただくという一見「異常」ともいうべき信仰であるが、その底に「早くポックリ死にたい」というよりも、年をとっても長患いやそれに伴う「尻の世話をうける精神的・肉体的苦痛」から逃れたい、最後（死）まで丈夫でいたいという人間誰しもの切実な願いという「常民性」があると主張している。

また、渡辺喜勝（1981）が日本人の死生観の一端を考察するにあたって、「コロリ信仰」を取り上げた。渡辺氏は、事例調査を通して、それを「現世ご利益信仰」と定義づけ、その祈りの第一のモチーフは「安楽死」を求めることに、第二のモチーフは、健康祈願・長生祈願に示されるところにあるが、この両者の祈りはおのずと不可分なもので、祈り求められているものは、その動機が何であれいわゆる死ではなく、むしろその反対にきわめて具体的・現実的な生の営みであることを明らかにした。さらに、この信仰の基底には何よりも生者が自己の死を〈自覚〉することがなければならないので、「無自覚的な生存」から「自覚的な生存」へ移りゆくところ、「死に対する即自的存在」から「死に対する対自的存在」への移行の接点に、「コロリ信仰」の現象的意義が位置づけられるとこれまでの研究に新しい分析を加えた。一方渡辺は、古典における「コロリ」「ポックリ」などの用語の引証例から、かなり早い時期からいわゆる安楽死の観念があったことがわかるが、ただそれらはいずれも〈ことば〉として、つまり〈意識・観念〉としてのみ認められ、〈信仰〉という明確な文化的様式（行動様式）を帯びていなかったとして、「コロリ信仰」をきわめて現代的な信仰現象と位置づけている。

それに加えて鈴木岩弓（2004）は、『角川古語大辞典』にある「ぽっくりわうじやう：ぽっくり往生」の項目で「なんの苦痛もなく、突然死ぬこと。安楽な死に方であり、特に老人がこれを願ひ、願をかける寺もある」という解説から、ぽっくり往生というのは死を希求する安楽死信仰であり、近世期において既にその願掛け対象として知られる寺院があったということになると述べている。

また、元禄 14（1701）年刊行の『けいせい色三味線』では、著者の江島其磧は批判の目で、当時の老人たちは次々に目先の目標を立ててしまつて、なかなか往生しようとしていないと揶揄するような感じで「ぽっくり往生」を使い、現代のポックリ信仰と多少ずれはあるが、その存在が確認できることから、鈴木は老人たちが安楽死を希求する信仰が、少なくとも近世において既に見られたと指摘している。

年寄ほど偽りいふものはなし。寺参しては、「今でもぽっくり往生」とねがい、「此苦界にうかうかとの長生一日もはやく往生したし」といわるる片手に（中略）息子成人して、元服いたせば、「あれに嫁を取て」と、其願ひもずらりとすめば、「孫を見てから」との念願孫が出ければ彦が見たし。とかく死にとむないに極つたる事を、いわれぬ口さきで、往生をいそがるる虚がにくし。なぜに天道次第にしてはおかれぬぞ。持仏堂の仏も、毎日の看経毎に、「往生したき」との虚言は、さぞおかしうおぼしめさん。〔江島 1701（1989）：148-149 頁〕

さらに、その基本的な構造は、単なる安楽往生信仰ではなく、その前提に長寿祈願がなされている中で構成されていると鈴木が表明している。

一方、管見の及ぶ限り、1882 年 5 月 31 日付きの『読売新聞』に記されている記事がおそらくポックリ信仰に関連する最初のものである。その内容は以下のようである。

芝金杉川口町の阿部初（62 年）は親類も縁者も何にもなく身体が達者なのみと頼みにして日傭取として其日と送りながら常々隣り近所の人（私しは誰にも掛る者がいから死ぬまで稼いでポックリ往生が遂げたいと云つて居たが一昨日汐止の電信技術学校へ草取りに雇はれ一日働

らいて帰る途中汐留橋の上で、ウンと倒れて其まま往生の素懐と遂げました。

要するに、いわゆるポックリ寺院へ参拝に行ったり、もしくはポックリ神仏に向かって祈ったりするといった行為があるかどうかは不明であるが、「死ぬまで稼いでポックリ往生遂げたい」という素朴な願いが当時あったことは窺える。

宮田登（1993）はポックリ信仰を「安楽死を願う呪い」とし、「実際に寝たきり老人やボケ老人の下病が祈願の対象となっていることは明らかである」と指摘している。

以上の先行研究をまとめてみると、ポックリ信仰は第一に死に方を示すものであるとまず言えよう。すなわち、苦しみなく安らかな死を遂げることである。次いでポックリ信仰は、生と死と両方にまつわるものであるが、根本的には生への願いである。その中に特にシモの世話になりたくないという願いが込められているという共通認識が認められる。

筆者も上記のような先行研究を踏まえた上で、ポックリ信仰とは、シモの世話になるくらい大きな病気を患うことなく過ごし、自然に老いてから安らかで楽に死ぬことをカミに願う信仰で、自らの生と死に向き合う態度でもあるとしておきたい。

そのように、ポックリ信仰の基本構造に重きを置き、数多くの研究がなされてきたが、その内実についての分析はあまりないのが実状である。それに、前述のように、古くから存在しているポックリ信仰はなぜ 1970 年代以降盛んになって、一種の流行現象となったかも未解決の課題である。その上、渡辺喜勝以外は、主に西日本において調査が行われ、まだ未調査の地域が残されている。そこで、筆者はそういった問題を踏まえ、今日の「超高齢」「多死」「大介護」を迎える時代に置かれる高齢者が、今なお地域社会に根付いているポックリ信仰と、いかに関わりを持つか、またそれが現代日本人、とりわけ高齢者にとっていかなる意味を持つかについて明らかにすることを目的とする。ただ、その前に、主体である高齢者が現にいかに生きているか、またはいかに宗教と関わりながら生きているかを考察することが必要と考え、「おばあちゃんの原宿」と呼ばれる巣鴨とげぬき地蔵通りを取り扱い、分析を行う。したがって、本文においては 2 部に分けて考察を進めていく。

I 高齢者の盛り場——巣鴨とげぬき地蔵通り

信心——都会生活の中で忘れられたようなこの言葉が、東京のまん中に生きている。毎月四の日、とげぬき地蔵の縁日に、JR 山手線巣鴨駅はたいへんな混雑ぶりをみせる。さらにとげぬき地蔵の大祭の日、すなわち1月24日、5月24日、9月24日になると、より一層賑わいをみせ、その大半はお年寄りたちである。彼らの行先は「とげぬき地蔵尊」で有名である高岩寺及びその地蔵通り商店街で、東京という最先端のものが集まる現代大都市では、少し珍しい風景と感じられる一方、いかに超高齢社会であるかという今日の社会状況も窺わせる。では、いったい巣鴨のいかなるものが人々を引きつけるのか、人々がいかなる目的をもってそこへ行くのか、そこでいかなる行為を行うのか。これらの問題を明らかにすることは、超高齢社会に置かれる高齢者たちが死を見つめながらもいかに生きていくかという問いに答えるための一つのヒントになるのではないかと考えられる。

1 巣鴨とげぬき地蔵

巣鴨は「おばあちゃんの前宿」という名でも広く知られ、今ではすっかり高齢者の集う街として定着している。その地蔵通りは、大きく分けると、巣鴨地蔵通り商店街に加盟している商店と、縁日に出される露店、高岩寺（とげぬき地蔵）という三つの主体からなるものである。昔は菊人形発祥の地として知られ、菊見の季節には多数の来観者を集め、「植木の里」¹¹として栄えていたが、今日はやはりとげぬき地蔵さまを目当てに来る参詣者が多い。

本来巣鴨地蔵通りの「お地蔵さん」というのは、とげぬき地蔵尊ではなく、現在の地蔵通りに入るところの左側に位置している江戸六地蔵尊の一つである「眞性寺」のことであったといわれる。とげぬき地蔵を指しているようになったのは明治24（1891）年に高岩寺が現在地、巣鴨に移転した後のことである。その縁起については、大正7（1918）年に発行された『北豊島郡誌』に、以下のように記されている。

大字巣鴨二丁目に在り、元下谷区屏風坂下に在りしを明治24年今の地に移せり。此寺は曹洞

¹¹ 川添登『植木の里』（ドメス出版、1986）；同上編『おばあちゃんの前宿 巣鴨とげぬき地蔵の考現学』（平凡社、1989）を参照。

宗永平寺末にして創立は慶長三年開祖は扶岳大助和尚なり、延命地藏尊を本尊とす、世俗とげ
拔地藏と稱し其の名都下に高し、毎月四の日を縁日とす、江戸砂子に載するところを左に。印
藏地藏、萬頂山高岩寺、禪宗、下谷屏風坂下。正徳三巳年田付氏何某の妻病苦萬死一生たる時
云、わが長谷川の家に霊ありて女子 25 歳を越えず、われ今死を待つのみなり、田付氏之を聞
き此上は、神明佛陀の力ならではと常に信ずる所の地藏尊を祈る、少睡る枕に一人の僧来りて
曰く、此像一萬體を紙に寫し江河に流しなば平癒ならしめんと屑木の如きものを與へ給ふと見
てさむる、枕の上に自然木一寸三分の地藏を刻める印像あり、告の如く一萬体寫し淺草川に浮
めり、其夜病人の床に衰へたるおのこ立てるを高僧杖を以て追給ふ、と夢ならず現ならず覺え
て明の日より全快におもむき死をのがれたりしなり、此像因縁ありて當寺に納まる、重症難病
の者此印像をいただくにそのしるしあらずと云ふことなし、くはしきは當寺の靈驗記に見えた
り云々。[北豊島郡農会 1918 : 189 頁]

また、「とげぬき地藏」の名の由来については、権田保之助による著された『娯樂業者の群』の「民
間信仰」項目にある「とげ抜き地藏尊」の中、以下の靈驗話が書かれている。

正徳 5 年乙未の年、江戸毛利邸につかうる女、折れたる針を口にくわえ、過り吞みて咽に刺ち
抜けず、後には腹中に入りて甚だ痛み苦しむ。諸医手を拱き諸薬其効なし、即ち此靈驗あらた
かなる地藏尊の御影一枚を水にて吞ましむ。暫くありて吐逆す。其中に御影あり、水にて流し
見るに、四分ばかりの針の折片、御影を貫き出でたり、座中奇異の思いをなせしより、此の時
より「とげぬき地藏尊」と申し奉る。何病にても御影を頂きて、治せざる事なく、如何なる願
望も祈念して成就せざる事なし信ずべし頼むべし。[権田 1974 : 167 頁]

つまり、咽に刺さった「針」が抜けたことから、「とげ抜き」になったのではないかと考えられる。
この縁起話と名前の由来話は、現在高岩寺に保存されている田付又四郎が享保 13 (1728) 年 7 月
17 日の日付で、自らしたためた『下谷高岩寺地藏尊縁起靈驗記』の中に記され、同寺発行の『高岩

寺誌』(1986)の巻頭に、現代語訳でも載せられている。その『霊験記』にはとげぬき地蔵に関するご利益談が数多く記され¹²、身体の「とげ」も心の「とげ」も取り除いてくれるという霊験あらたかなるご利益が信じられてきたからこそ、多くの参詣客に求められ、繁盛した門前市が形成されたのであろう。

2 高岩寺における信仰空間

図 I-2-1 の高岩寺境内略図を見ればわかるように、本尊のとげぬき地蔵のほかにも、境内左手に洗い観音、子育て地蔵、小僧稲荷の三体が並んでおり、多くの参詣者を引きつけている。特に本堂に向かって左手前に立つ洗い観音は、参詣者からとげぬき地蔵に劣らない人気を集めている。そこで、筆者は山門を通過して「香炉」、「洗い観音」、「小僧稲荷」、「子育て地蔵」、「本堂」という5ヶ所に立ち寄る参詣者の数を確認し、図 I-2-2 のようにまとめた。

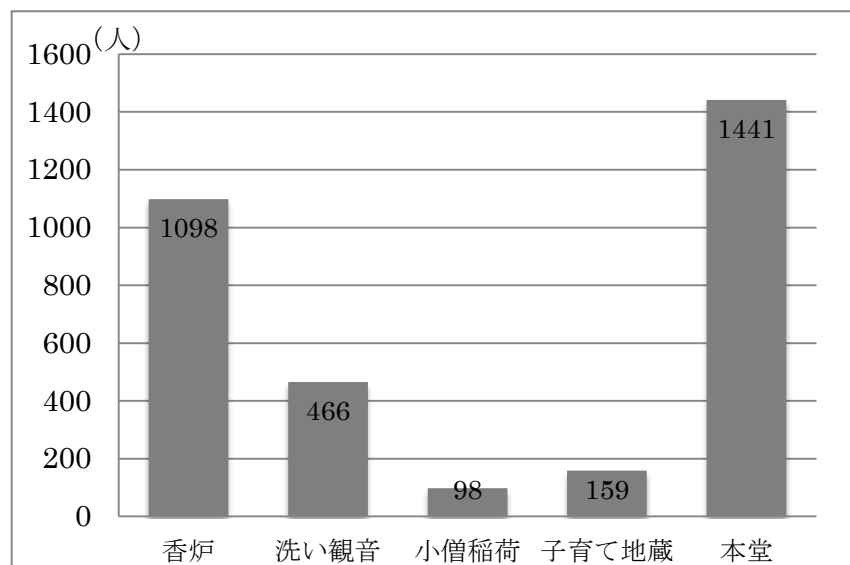


図 I-2-2 境内各所における参詣人数¹³(2016年11月23日(水・祝)午前10時から12時まで)

¹² 権田保之助「民間信仰『娯楽業者の群』(文和書房、1974) 167-168 頁; 圭室文雄「延命地蔵印行利益記」について『明治大学教養論集 243 号』(明治大学教養論集刊行会、1992) 141-163 頁; 同上「とげぬき地蔵と治病」日本風俗史学会編『風俗史学 9 号』(日本風俗史学会、1999) 14-18 頁を参照。

¹³ 同一人が複数の所に行くことがあるため、重複してカウントされたことが考えられる。

その結果、やはり本尊のとげぬき地蔵が最も多くの参詣者を集め、高岩寺の信仰空間において中心的な決め手となっているのがわかる。次は香炉であるが、香炉というよりも、香炉に上る煙の方が参詣者にとって大きな役目を果たすのである。山門を通過して、すぐ正面に大きな香炉がある。そこに立ち寄る人はみんな煙を煽り、自分の身体に当てる。慣れたやり方でやっている参詣者もいれば、他の人を真似してやっている参詣者もいる。素朴なやり方であるが、その煙は何らかの力を持つことを信じて、身体が健康であるようという願いを込めて行っているに違いない。3 番目は洗い観音で、江戸時代最大の火事であった「明暦の大火」で、当寺の檀信徒の一人「屋根屋喜平次」が妻を亡くし、その供養のため、「聖観世音菩薩」を高岩寺に寄進したものとされる¹⁴。病気など治したい部分を洗うと効き目があると言われ、さらに、とげぬき地蔵は秘仏であるため、かわりに、洗い観音がその役割を果たすという説もあるほど人気の高い信仰対象である。縁日になると、長い行列ができ、列の先頭では数人の老女が柄杓で黒々とした観音に水をかけ、持参したタオルで拭いている賑やかな風景が見られる。ただ、あまりにも混む時は並ぶ時間が長いため、特に地元の人には逆に縁日を避けてお参りするケースもある。また、子育て地蔵には、隣の露店で買った団子が供えられていることもよく見られる。人によって多少違いはあるが、主な参詣パターンは以下の3つの流れに順じたものである。

①山門→香炉→本堂→山門

②山門→香炉→本堂→洗い観音→山門

③山門→香炉→洗い観音→本堂→山門

つまり、高岩寺においては、昔から霊言あらたかなことでよく知られている本尊のとげぬき地蔵を中心に、いくつかの信仰対象が共存し、とげぬき地蔵のご利益だけのために来る参詣者もいれば、とげぬき地蔵だけではなく、洗い観音、あるいは小僧稻荷や子育て地蔵も一緒に拝んでいく参詣者もいるという信仰空間が形成されているのである。

¹⁴ 来馬規雄編『高岩寺誌』（高岩寺、1986）32頁を参照。

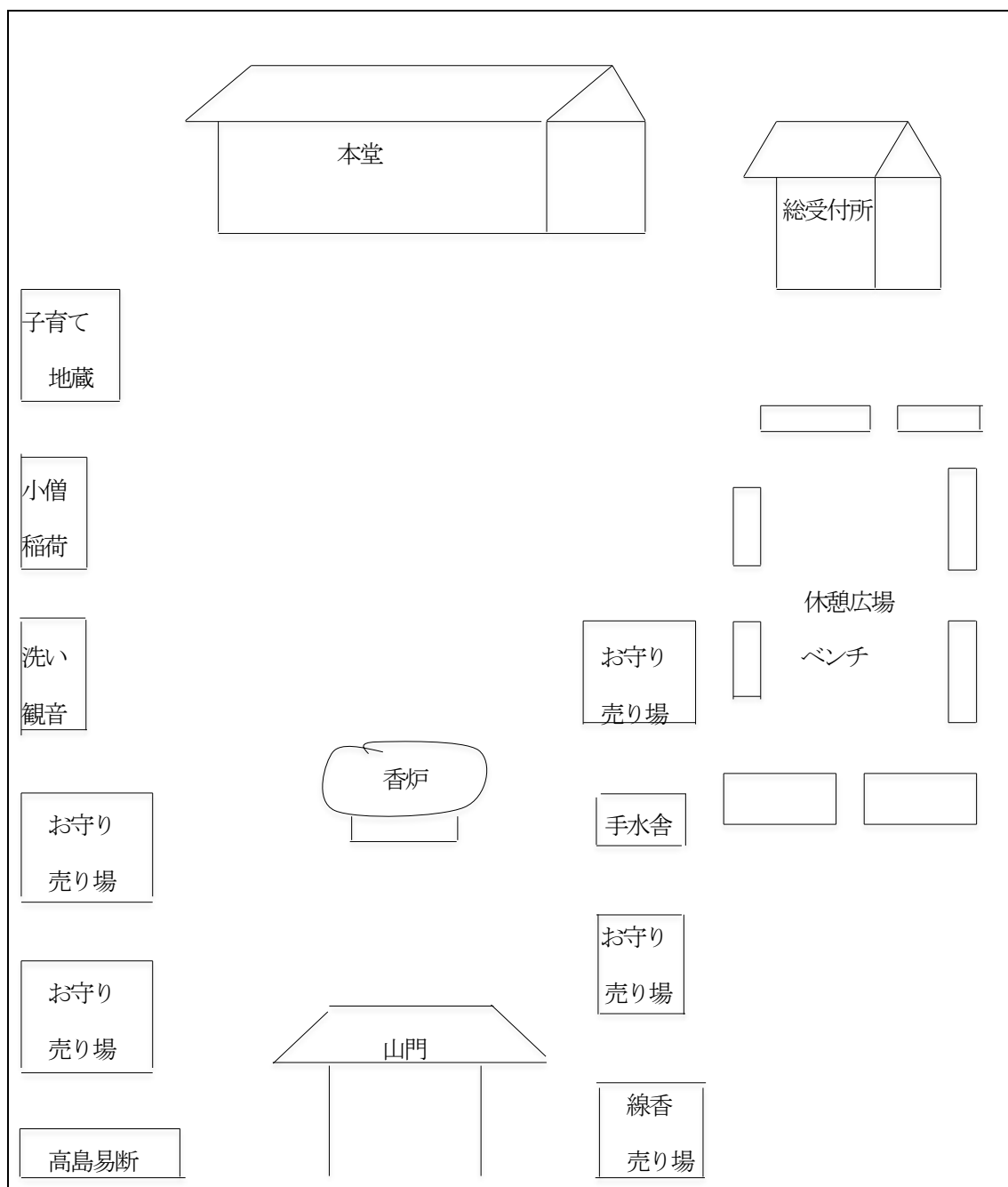


図 I-2-1 高岩寺境内略図 (2016 年現在、筆者作成)



写真 I-2-1 「高岩寺」山門前

(2016年5月24日筆者撮影)



写真 I-2-2 香炉の前で煙を煽る参詣者

(2016年8月24日筆者撮影)



写真 I-2-3 洗い観音の前に並ぶ参詣者たち

(2016年5月24日筆者撮影)



写真 I-2-4 洗い観音

(2016年8月24日筆者撮影)



写真 I-2-5 子育て地蔵の前に供えられている
焼き団子 (2016年11月24日筆者撮影)

3 高岩寺（とげぬき地藏）に集う参詣者

前述で述べたように、高岩寺では1月、5月、9月の24日に、年に3回、一日2回約2時間に亘る大祭が行われる。筆者もその大祭に参加し、20人の参詣者に対して半構造的インタビューを実施し、その身上情報、参詣動機や行動様式などについて分析し、考察を行なった。

以下、2016年5月24日に行われた大祭の様子を略述する。午前10時半ごろ、各地からの参詣者で埋まる本堂で、「天徳院」の住職である大藪正哉による法話で法要が始まる。始まる前に、一人ひとりに大藪氏執筆の小冊子が配られ、そこに法話の内容が載せられている。筆者が参加した2回の法話は、「あわてなければ心さわやか」と「いつでも どこでも ありがとう」というテーマで、各回約30分展開されていた。法話の最後には、「みんな心の中に居る」¹⁵という歌を参列者全員で合唱するのである。筆者のような初めての参列者はそれについて歌うのが難しいが、多くの参列者は慣れている様子で住職と一緒に歌い、荘厳でありながらも明るく和やかな雰囲気となっている。法話が終る頃、菊の花びらが参列者に配られる。身体健康や息災などご利益があると言われ、その場で食べてもいいし、持ち帰ってもいいとされている。法話の次は「大般若転読会」が行われ、30余人の僧侶による大般若経六百巻の転読¹⁶が始まり、経巻を右または左に傾けながら本文の紙をばらばらと落とすようにして大声で読み上げる非常に圧倒される風景である。その際、持参した経典を取り出して一緒に読誦する参詣者の姿も見られる。それに、転読の勢いで起こる風を受けようと前に坐っていた参詣者たちはもとより、後ろの参詣者までが中腰になって両手を差し出す。それだけではなく、住職らが読経しながらの本堂巡りの時も、持参した手ぬぐいや財布など自分の身の回り品をその法衣や数珠に女性たちが懸命に触れようとする姿が非常に印象深かった。誰かに教えられたわけではないが、転読で起こった風であれ、住職の法衣や数珠であれ、あたると「無病息災」

¹⁵ 「心静かに 心を見れば（お空の星も ご先祖様も/この世の人も あの世の人も/見えているものも 見えないものも/どんな思いも 思うすべては）/みんな 心の中に 居る/ みんな 居る居る 心の中に/いつでも 居ます 心の中に/どこでも 居ます 心の中に/ みんな 心の中に 居る/お陰さまで 心さわやか/みんな楽しく生きようよ」（当日配られた冊子により）という内容である。

¹⁶ 「転読」については、『仏教辞典』によれば、「最初から最後まで読む」〈真読〉に対して、経題と経の一部分だけを讀んで全巻の讀誦に代えること。国家安泰・五穀豊穰・病氣平癒などを祈って大般若経600巻などを讀誦することは、日本ではすでに奈良時代から行われていたが、次第に儀礼化した略読が主となり、折本を空中で翻轉する華やかな形式となった」[中村ほか編, 1989: 597]と記されている。また、「この儀式を転経会または転読会と称し」[中村, 1975: 989]と述べられている。

のご利益があると考えているから、自然にそのような行動を起こしたのであろう。最後に、参列者が線香をご本尊のとげぬき地藏に上げる儀式をもって午前の大祭が終わりとなる。



写真 I-3-1 天徳院住職による法話
(2016年5月24日筆者撮影)



写真 I-3-2 高岩寺僧侶による読経
(同左)



写真 I-3-3 「大般若転読会」①
(同上)



写真 I-3-4 「大般若転読会」②
(同上)



写真 I-3-5 住職らが読経しながらの本堂めぐり
・その一 (同上)



写真 I-3-6 その二
(同上)

では、どのような人が、なぜここを訪れるか、ここで何をするかといった問いを明らかにするため、インタビューから得られた具体的な事例を通して、分析を加えてみた。

事例1

年金生活をしている一人暮らしの女性で、3,40年間仕事でアメリカに滞在し、今年の6月に日本に帰ってきたところである。岐阜出身である彼女は、現在、東京の西巢鴨、地藏通りまで自転車で5分ぐらいのところに居住している。それまではとげぬき地藏のことを知らなかったという彼女は、帰国してまだ東京で住まいが見つからなかった時、とげぬき地藏通りの近くのホテルにしばらく泊まっていた。そこで、ホテルの従業員にとげぬき地藏を紹介され、知ったという。以来、ほぼ毎日一人でここに通うようになって、地藏通りをぶらぶら歩いて、とげぬき地藏にお参りして家に帰るということである。「洗い観音」に関しては、混雑する時が多いから、「月に2、3回ぐらい」持参したタオルで観音様の身体を拭いてお参りするという。(2016年9月11日のインタビューによる)

事例2

板橋に娘と孫と三世代同居をしている75歳の女性。彼女はほぼ毎月4の日は来ているということで、子どもの頃からずっと通っていて、もう70年もの歳月が経ったということである。「物産店とかいろいろあるから、そういうの、買い物だったり、お地藏様にお参りして、それだけですけど。たまにあっちやるけど」、「お祈りは特に（しなくて）、気持ち的にね、」と自分の参詣コースを話している。「あっち」というのは、「洗い観音」のことであるが、「洗い観音様」は混雑する時が多いから、「たまにやる」ことになっているのであろう。(同上)

事例3

北区に住む64歳の女性。弟と猫一匹と一緒に暮らしている彼女は、いつも一人で参りにくるということで、この日も一人で来た。初めて参りに来た時から、もう30年以上の年月が経った

という彼女は、実にここと縁が深い一人である。「母が、子どもがなかなかできなくて、ここにお参りしたら、わたしが授かったの。それで生まれたのが24日なの、わたし。そう、7月の24日のこの地蔵盆って、やっぱりこうあるよね。その日にわたしが生まれたの。それで母が亡くなったのは12月の24日で、やっぱり24日。だから、そういう人って、前ここでね、会った人とそういうお話をしたら、そういう人はやっぱりここに、あの、縁が深いんだから、ちゃんと毎月お参りに来たほうがいいわよって言われたの」と「とげぬき地蔵尊」から授かった御利益話をしている。「それで、会社にお勤めしてる時は、毎月24日は来てたんですけど、忙しくなって、仕事が忙しくなって、来なかったのね」。でも、10年前に会社をやめてからまた通い始め、一人でお参りして商店街をずっと歩いて都電に乗って帰るという彼女の参詣コースであるが、「ここでお友達に会ってね、4の日になると、待ち合わせをして、ここに来てお昼を食べて、でまた4の日に会いましょうねって別れていくおばあちゃんもいるみたい。ああ、そういうお参りの仕方もあるんだ。前、こう後ろからこっそりお話を聞いてたのね」と話す。(同上)

事例4

埼玉県所沢市から訪ねてきた70歳の女性。1月、5月、9月の24日、大祭の日は欠かさず必ずお参りするという彼女は、もう10年以上前からずっと通っている。前は友達と一緒に来るのが多かったが、今回は一人でお参りに来た。下の病気になって、来月に手術を受けるということで、それで一人でこっそりお参りに来たのである。その日、朝8時半ごろ家を出て、9時半頃に巣鴨に到着。まず、「洗い観音様」に水をかけて、持参してきたタオルで拭いて、本堂にて大祭に参加して、お地蔵様に手術が無事に終り、下の病気の快復を祈り、お札を頂いた。大祭が終わった後、商店街をぶらぶらして、「猿田彦大神の庚申塚」¹⁷にもお参りして帰るというコースである。(同上)

事例5

埼玉県浦和市に住む80歳の女性。今から4、5年前、主人が亡くなった後、初めてお参りに来た。

¹⁷ 巣鴨とげぬき地蔵通り商店街の一方の端、都電荒川線「庚申塚駅」前に鎮座する小さなお社があり、そこに猿田彦大神が祀られている。

いつもは友人と一緒に来るが、今回は一人でお参りに来た。というのは、先日、体調が気になって、お医者さんのところに行ったら、最初は「できもの」といわれ、あまり気にしていなかったが、その後、また市立病院に行ったら、実はガンだと宣告された。「とてもこわくて、あと10年は大丈夫だとお医者さんは言っているが」、「息子はいるけど、別々の生活があつてさ、ね、だから、息子にも言えないし、兄弟にも言えないのよ」。「家に一人でいても、こわくて、それで、お参りに来た」ともう少しで泣きそうな感じで話している。それでも、一応、息子さんには「生命保険はどこのを買っている」とか、「自分の印鑑はどこにある」とかを教えているようである。そんな話をしているところ、隣に座っているお婆ちゃんが「実は自分もこの前、心臓の手術を受けたの、一人で家にいてもしょうがないから、こんなところに来てね、お話をして、、、」と慰めの言葉をかけてきて、二人でまたいろいろ会話を交わす。(同上)

事例6

埼玉県所沢市から初めてお参りに来た53歳の女性である。還暦を迎える友達のために、「ここの赤いパンツを求めに来た」ということであつた。「還暦の人に赤いパンツを送ると、御利益がある」ということで、無病息災とかね」と話して、「還暦のお祝いでお札をいただき、わたしはついでに御朱印をいただく」と満面の笑みを浮かべ、非常に明るい人であつた。(同上)

事例7

栃木から訪ねてきた87歳の男性。前にも何回来たことがあるという彼は、この日は、地元の人と一緒に、貸し切りバス2台で60人の団体でいわゆる「日帰り旅行」でやってきた。朝10時頃東京に着き、浅草寺から、お台場とかを回って、最後がここ巣鴨というルートであつた。大祭に参加して、御本尊をお参りして帰途につくということである。(同上)

事例8

埼玉の西武から来た84歳の一人暮らしの女性。2、30年前から、毎月4の日は欠かさず、ずっ

と通っている彼女は、いつも一人でお参りに来るという。友達と一緒に来るのもいいけど、ただ一人の場合は、それぞれの日程を調整し合わせなくてもいい、随時に来られるし、楽だから、一人で来るのが好きというわけだと言う。特に信仰しているわけではないが、「年を取ると、だんだん身体も弱くなっていくので、元気ね、元気をいただくためにお参りに来ている」と強調している。今は体調があまりよくないため、「洗い観音様」にお許しをいただいて、年に何回しかお参りしていないが、昔は、ここに来るたびに観音様に手を合わせ、水をかけてタオルで拭いたという。(同上)

以上の事例からみると、地元の巣鴨周辺をはじめ、東京都内および関東一円各地から参詣者が訪れ、しかも常連の参詣者がほとんどである。ほぼ毎日通う人もいれば、毎月4の日、すなわち縁日に、あるいは大祭の日である1月24日、5月24日、9月24日に来る人もいる。一人で参詣するパターンもあれば、知り合いや家族と一緒に参詣するパターンも見られる。

さらに、病気治しなど具体的なご利益を求めて参詣するケースもあれば、特に何かの具体的なご利益のためではなく、一人で買い物をしたり、商店街をぶらぶらしたり、あるいは友達に会い一緒に食事をしたりおしゃべりをしたりして、家では求められない満足感や元気、あるいは安らぎを得て余暇を過ごすため参詣に訪れるケースもある。また、このとげぬき地蔵尊と縁が深く、特別なつながりをもつと篤く信じて参詣する信心深い参詣者もいる。その他、旅行・観光など様々な動機をもって高岩寺に参詣しているわけである。

4 とげぬき生活館相談所

「とげぬき生活館」は1959年4月4日に境内に開設され、「それぞれの時代、その時代に相応する宗教活動があつて、人間の苦悩を救済する役割をうけもってきたものである...『とげ』とは肉眼で見える『とげ』だけではない。むしろ近代人は心のなかにささった『とげ』に苦しんでいるのである。宗教というものが時代とともにあるものとすれば、近代的な手段でこの『心のとげ』が抜けるように配慮しなければならない。これが『カウンセリング』(counseling)とか、『ケース・ワー

ク』(case work)といわれているものであろう」¹⁸という先々代住職である来馬道断師(当時東洋大学理事)の発想に基づいたものである。また実際に、当時お寺に参詣者から相談の問い合わせが少なからずあったということで、いっそ専門家を招き、気軽に相談できる場を設ければという考えから、当時東洋大学の塚本哲教授らの協力で実現させたものである。

当相談所の一つ大きな特徴は、電話やメールを通しての間接的相談は行われず、必ず直接対面してはじめて相談が成り立つということである。「直接的な話し合いによってなされる人間理解」を重視し、直接に来談者と面談して丹念に傾聴することを心掛け、気軽に相談所に立ち寄って相談員と直接話し合うという形が理想であると当相談所の趣旨が掲げられている¹⁹。現在毎週の月、水、金曜日と毎月の縁日(4の日)の午前10時から午後4時まで、宗教相談、法律相談、人生相談の3つの分野に分け、僧侶、弁護士、臨床心理、教育や社会福祉の各専門家によって無料で相談が行われる。さらに具体的に言うと、人生相談の内容は家庭内の人間関係、子育て、教育、心の問題などの諸問題が主であり、法律相談は相続、土地、金銭、婚姻などの法律一般で、宗教相談はお墓、宗派、悩みなどの宗教上の諸問題となっている。一回の面談は約40分から1時間で、相談内容によって、相談員の相互連携を図る総合的相談活動が展開されている。

1972年から現在の洋風の専用の相談所において相談活動が行われるようになったが、発足当初は、境内にある畳敷きの広間を区切った相談活動であった。時代とともに、当相談所も様々な変化を経て今日まで歩んできたのである。そこで、以下に当生活館による十周年ごとに発行された記念誌に基づいて、相談件数や相談内容、来談者の年齢や男女比などの状況を明らかにしたい。

図I-4-1で示したように、開館から2008年までの50年間、相談件数は合計43000件に達していることがわかる。開設当初は平均年間約700件であったが、1970年代から相談件数が急増し、1983年ごろピークに達し、年間相談件数は2000件を超えている。高度経済成長期が終わり、オイルショックを経て、新宗教や新々宗教の猛勢などで経済的にも精神的にも不安となる動揺の激しい時代とともに、人々の生活と悩みもより一層複雑になっていくのである。それに、1972年地下鉄三田線が開通し、巣鴨までの交通が便利になった、といった様々な要因で、1970年代から相談件数が

¹⁸ 塚本哲『心の相談室—カウンセリングと人間性—』(1964、誠信書房)はしがきii頁を参照。

¹⁹ とげぬき生活館相談所「とげぬき生活館相談所の活動報告 平成26年」1頁を参照。

急増した。平成に入ると、減少に転じ、最近では平均年間約 500 件に留まっているという状況である。

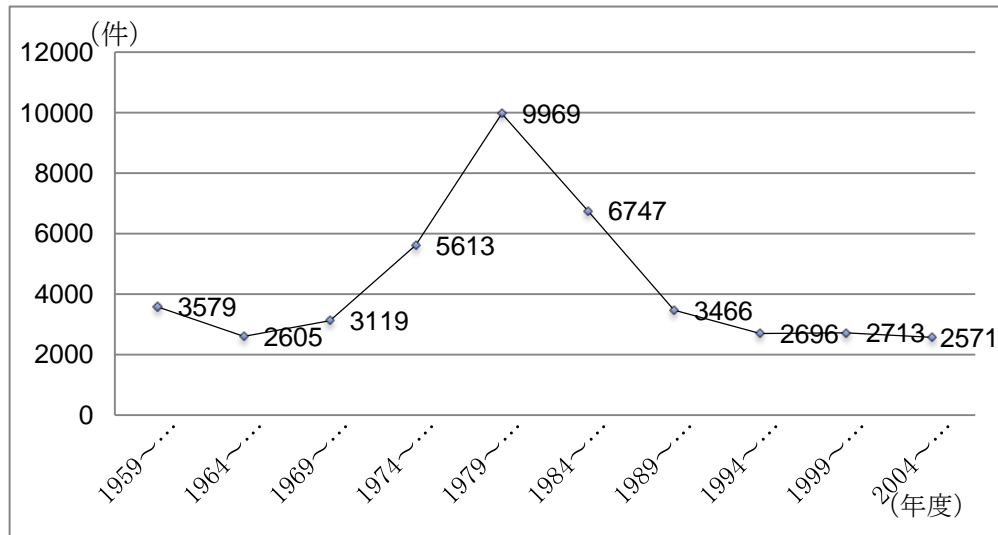


図 I-4-1 1959 年度から 2008 年度までの相談件数²⁰

また、表 I-4-1 で示されているように、全体的に女性の来談者が圧倒的に多いことが、近年になって男性の来談者も増加し、最新の活動報告によると、2013 年度女性来談者の 447 人に対して、男性来談者は 249 人に達し、男女の差が縮まっているのである²¹。また、遠方からの来談者はほとんどなく、半分以上は地元の豊島区を中心に都内から来所し、その他、埼玉、千葉、神奈川からの来談者も少なくない。総じて相談所の利用者は広範な首都圏から来所していることがわかる。また、来談者の平均年齢は 60 代であるが、若年層の来談者も増える傾向が見られる。就職活動や仕事場のストレスなど現代社会においては、若者もいろいろな悩みを持って、“心の出口”を求めているのであろう。

²⁰ 「とげぬき生活館相談所五十年史 統計について」『とげぬき相談創立五十周年記念誌』(とげぬき生活館、2009)より筆者作成。

²¹ 「とげぬき生活館相談所の活動報告」(とげぬき生活館相談所、2014) 3 頁を参照。

表 I-4-1 相談状況の変化 (『とげぬき相談創立 50 周年記念誌』より筆者作成)

年次	相談件数 (件)	平均年齢 (歳)	男女比	相談内容 (件)					
				人生	法律	宗教	人法 ²²	人宗 ²³	法宗 ²⁴
1993	614	56.1	1 : 5	334	220	24	28	7	1
1994	595	59.0	1 : 4	332	195	34	27	5	2
1995	560	58.2	1 : 6	302	213	21	22	1	1
1996	495	60.6	1 : 6	272	182	15	19	6	1
1997	516	60.4	1 : 7	254	213	20	24	3	2
1998	530	60.0	1 : 5	241	226	24	36	1	2
1999	536	62.2	1 : 4.5	240	215	22	51	6	2
2000	600	62.3	1 : 4.3	290	252	14	35	5	4
2001	533	61.6	1:4.4	225	256	16	30	3	3
2002	583	60.9	1:3.2	230	281	23	38	9	2
2003	461	60.5	1:3.1	193	214	17	27	8	2
2004	488	60.9	1:3.5	247	192	19	25	2	3
2005	435	61.2	1:4.1	238	163	18	15	1	0
2006	446	62.7	1:4.3	206	196	8	32	2	2
2007	557	63.1	1:4.3	306	192	31	21	3	4
2008	645	61.1	1:4.3	363	237	19	21	4	1
2009	756	61.0	1:2.6	359	331	21	37	3	5

²² 当相談所の解釈によると、「人生相談」と「法律相談」両方を兼ねた相談。

²³ 当相談所の解釈によると、「人生相談」と「宗教相談」両方を兼ねた相談。

²⁴ 当相談所の解釈によると、「法律相談」と「宗教相談」両方を兼ねた相談。

相談内容を見てみると、人生相談と法律相談の件数が圧倒的に多いことが特徴である。寺の境内に設置されているこの相談所にもかかわらず、量的には宗教相談が少ないが、「とげぬき相談には全ての基本に宗教的課題を内包しており、また、札所の受付で僧侶が直接対応することもあるから、少なく見える」と指摘されている²⁵。

さらに人生相談に限ってみると、2003 年度から相談項目に変更が加えられたので、比較するのには正確さが欠けるが、いずれにしても、表 I-4-2 が示したように、1993 年度から 2009 年度まで、個人問題、とりわけ精神的な不安や生き方など個人の心の問題の相談件数がずっと多いことがわかる。また、家庭問題に関しては、2002 年度までは、「家族関係」と「男女関係」の二点を含む一つの大きなカテゴリーに定められ、2003 年度からは「親子関係」「夫婦問題」「家庭問題」と別々で三つのカテゴリーが作られたが、総合的にみると、個人問題に劣らない相談件数があったことがわかる。さらに、2003 年度から「高齢者問題」や「障害者（児）問題」「福祉・保健問題」など新しい項目が加えられ、特に「高齢者問題」の相談件数は年々と増加しているのが注目される。今後、高齢化の進みとともに、老後への不安や自分自身の死についての悩みなど高齢者に関わる問題の相談は増加していくことが予測される。

社会福祉専門家で現在当相談所において人生相談を担当する大森邦子の話によると、一回だけではなく、何回も同じ問題を抱えてくるリピーターが多く、十年以上も通っている来談者もいるという。現に抱えている問題を真剣に悩んで、解決策を求めるための来談者がいるほか、日頃、近隣にこぼせない愚痴や悩みを何の気兼ねもなく、自由に喋れて、慰めをもらえるという話し合う相手を求める来談者も少なくない。つまり、高岩寺においては、とげぬき地蔵さまという「カミ的」力にすがれる一方、実際悩みを聞いてくれる相手から自分へ慰めや助言がもらえる「人間的」力も借りられるという「総合的心の拠り所」が求められている。

²⁵ 「とげぬき生活館相談所五十年史 統計について」『とげぬき相談創立五十周年記念誌』（とげぬき生活館、2009）75 頁を参照。

表 I-4-2 相談内容の詳細の変化——人生相談（『とげぬき相談創立 50 周年記念誌』より筆者作成）²⁶

年度	家庭		教育			個人			生活				
	家族関係(件)	男女関係(件)	躰の問題(件)	教育問題(件)	非行・暴力関係(件)	精神性問題(件)	身体性問題(件)	生き方(件)	金銭関係(件)	職場関係(件)	求・情報(件)	家族生活問題(件)	地域生活問題(件)
1993	139	43	8	24	5	74	18	108	13	14	4	30	18
1994	148	44	9	29	9	61	11	109	10	23	3	39	15
1995	149	49	15	27	4	64	8	94	10	22	8	29	11
1996	137	38	4	8	2	44	5	118	16	20	8	24	12
1997	122	26	6	14	7	45	11	126	7	18	4	22	8
1998	137	51	8	13	9	37	11	85	11	19	4	25	7
1999	162	53	9	14	5	59	12	91	6	20	6	26	19
2000	164	55	13	11	8	68	18	132	24	22	11	39	17
2001	138	48	10	14	3	51	13	111	15	13	9	19	19

²⁶ 1 件の相談が内容によって、複数のカテゴリーに入ることがあるため、カウントに重複があると見られる。

2002	151	66	18	10	8	57	14	100	15	9	6	15	22
	個人（こころ の問題）	親子関係	子育て	夫婦問題	家庭問題	高齢者問題	障害者（児） 問題	福祉・保 健	近隣関係	友人関係	職場関係		
2003	164	37	12	20	56	20	12	14	10	4	18		
2004	199	33	16	29	49	27	8	18	9	4	20		
2005	201	45	9	33	70	31	6	10	11	7	29		
2006	196	29	7	36	63	52	17	42	10	4	20		
2007	301	37	6	37	96	43	9	19	11	5	39		
2008	351	37	12	37	115	71	4	25	18	11	31		
2009	351	22	10	47	137	92	10	24	20	13	35		

5 巣鴨地藏通り商店街

お参りを終えた人たち、とりわけ高齢の女性たちは、仲間たちと食事をしたり、買い物をしたり
のんびりと地藏通商店街を楽しんでから帰宅するパターンが多い。ここには、健康食品や漢方薬、
都心の高級デパートでは絶対売っていないような千円均一の洋服やだぶだぶの肌着、団子やせんべ
いなどを売る店が軒を連ねている。それに縁日になると、ぎっしりと並ぶ古風な露店、さらに、店
員もおばあさんたちとゆっくり楽しく会話をしながら対応しているなど、何もかも高齢者思いで、
お年寄りにとっては心があたたまるといえる懐かしい情景であろう。

JR山手線巣鴨駅を出て白山通りを渡り、西側の商店街を北へ約 150 メートル進み、白山通りから
分かれ、巣鴨地藏通商店街の大きな立て看板が目に入る。巣鴨地藏通り商店街は長さおよそ 800 メ
ートルにわたる商店街で、加盟している店舗数は約 180 店舗である。さらに、「とげぬき地藏尊」
の縁日である毎月 4 の日になると、道路の片側に百何軒の露店が立ち並び、結構な賑わいを見せる。
その全盛期といわれる昭和 62（1987）年前後から平成 10（1998）年にかけて、縁日には少なくと
も一日 4 万人以上の人出があり、さらに正月、5 月、9 月 24 日、すなわち「とげぬき地藏尊」の大
祭となると、一日 6 万から 8 万もの人が訪れ、年間参詣客の数は 800 万人とされていると巣鴨地藏
通り商店街振興組合理事長である木崎茂雄が述べている²⁷。今でも、縁日には一日数万人もの善男
善女で賑わい、一年を通して参詣者が絶えずに訪れる。中には、杖をついたり、車椅子で来たりす
るお年寄りの姿も目にする。では、その商店街のいったい何が人々、とりわけ高齢者たちを引きつ
けるかを探るために、加盟店と露店と両方を観察しながら、分析を行なっていきたい。

筆者が調査を行った当日（2016 年 12 月 24 日）の時点で、商店街に加盟している店舗は 183 店、
出店していた露店は 105 店で、実に多種多様な商品が売られている（図 I-5-1）。その商品の中身
をみると（表 I-5-1 と表 I-5-2）、食料品と衣料品と雑貨・生活小物の 3 種類が上位を占めており、
やはり高齢者向けのものが多いのが特徴である。和菓子、佃煮、漢方薬をはじめ和風構えの店がや
や多く、商品の名前も高齢者の目を引くものである。例えば、「長寿堂」せんべい屋、靴屋は「健康
靴」を履いて「歩いて健康」と客を引き寄せている。他にも、「健康こだわり食品」、「長寿のり」、

²⁷ 木崎茂雄『ぶらり、ゆったり、今こそ癒しの街・巣鴨』（展望社、2014）42 頁を参照。

「甘露七福神」、「地藏せんべい」など名前にもいろいろな工夫が凝らされていることがわかる。さらに、シルバーカーや杖、車椅子とか、介護、老人ホームや保険の相談とか、終活までまさに老後生活全般を考え展開されている。

表 I-5-1 露店の品物（2016 年
12 月 24 日調査により筆者作成）

売り物	軒数	%
食料品・食材	33	31
衣料品等	19	18
雑貨・生活小物	19	18
化粧品・アクセサリー・カバン・帽子等	12	11
和菓子・甘味処	7	7
甘酒	3	3
占い	2	2
健康食品	2	2
靴	2	2
その他	6	6
合計	105	100

表 I-5-2 商店街加盟店の品物（巣鴨地藏
通り商店街マップ」）より筆者作成

品物	店舗数	%
衣料品・生地・古着等	33	18.0
(内訳)	婦人服	18
	紳士服	2
	肌着類	5
	その他	8
レストラン・喫茶店等食事処	31	16.9
食料品・食材	19	10.0
雑貨・生活小物（鞆、アクセサリー、傘、帽子、時計等）	18	9.8
和菓子・甘味処	14	7.7
薬局	9	4.9
(内訳)	漢方薬	3
	一般薬局	6
美容、化粧品、ネイルサロン	8	4.4
スーパー・コンビニ・青果	7	3.8
靴	6	3.3
インテリア（家具、寝具等）	5	2.7
医療や健康用品（杖、シルバーカー、車	4	2.2

その中、特に目立つのがいわゆる「赤パンツ」の下着類である。実はここ巣鴨は赤パンツでも有名であり、毎月の2日が「マルジの日」と定められるほど、赤パンツの元祖と言われる「マルジ」という人気の赤パンツの専門店がある。その他にも、赤パンツを売っている店があり、「赤の魔法 開運赤パン 赤色のエネルギーを身につけ、身体も運氣

椅子、家庭用医療器、補聴器、磁気治療器等)		
酵素風呂・足湯等	3	1.6
仏具	2	1.1
介護・保険・老人ホーム相談	2	1.1
病院・診療所	2	1.1
終活協議会	1	0.5
その他	17	9.3

もパワーアップ 赤のパワー」という看板を出して客を引き寄せている（写真Ⅰ-5-3）。事例の中にもあったように、わざわざここに赤パンツを求めに訪ねる参詣者もいるほど実に人気の高い品物である。

ちなみに、なぜ赤がパワーをもたらす強い色だとされるかという点、「赤」の文字構成は「大」と「火」の組み合わせになり、大火は大日、すなわち太陽を象った文字で、光明と熱をもたらすカラーイメージが付けられている。それに、古代から赤は生命の源である血と、光・熱の源である日や火に見るところの神聖にして不可思議な力をもつ色であると信じられ、このような神聖な赤で悪魔を祓い、その襲撃から身を守るとされる²⁸。一方で、赤い着衣は体温保持や眼病予防に効果があるとして実利面から用いられる例も少なくなく見られる²⁹。このように、赤は病気や災厄の難から逃れられるといった「招福除災」のシンボルカラーとなったのではないかと考えられる。

²⁸ 長崎盛輝『色・彩飾の日本史』（1990、淡交社）40,58-59頁を参照。

²⁹ 藤井尚子『赤の力学―色をめぐる人間と自然と社会の構造―』（風間書房、2015）73頁を参照。



写真 I-5-1 「健康こだわり食品」



写真 I-5-2 「長寿のり」

(2016年5月24日筆者撮影)

(同左)



写真 I-5-3 赤パンツ店



写真 I-5-4 「すがもんのおしり」

(同上)

(同上)

さらにいうと、下着類の商品が加盟店でも露店でも並んでいるのは、高齢者の老後の心配事の一つでもある「シモの世話」と関連があるのではないかと考えられる。実際、JR 巣鴨駅の方面から巣鴨とげぬき地蔵商店街に入るところに、「すがもんのおしり」(写真 I-5-4) という商店街のキャラクターである「すがもん」のお尻とされる大きなオブジェがある。その隣に「おしりさわれば、結ばれる。やさしくさわれば、世話いらす」という文字が書かれている。つまり、高齢化率が進む中、一人暮らしの高齢者、あるいは高齢夫婦も大幅増加し、家族にシモの世話を受けたくないし、世話をしてくれる人もいないから、シモの世話にならないように、赤パンツを購入するという素朴な考え方も推測できよう。

加盟店

雷神堂菓鴨本店(煎餅)
奈田利亭地蔵店(菓膳にんにく)
山和証券
DEARS(ダーツバー)／プロフェッショナルメディック(運営・派遣)
ブルメリア(喫茶)／サン・まつみや東店(婦人服)
岡栲榮泉支店(和菓子)
司生堂(漢方薬)
元祖塩大福みずの
海鮮三崎港(回転寿司)
マルヨシ(ダンス洋品)
参拝茶山年園(お茶)
ファミリーマート
杉養蜂園(蜂蜜)
八ツ目やにしむら(蒲焼)
地蔵煎餅むさしや
地蔵そば大橋屋
甘露七福神(甘味処)
鶴すし／越後屋洋装部
モモコーポレーション(杖・シルバーカー・車いす)
ことぶきインテリア
ことぶきインテリア2号店
たけやま(食事、喫茶)
セブイレブン
おいもやさん興伸菓鴨店(いも菓子専門店)
すずむら(フティック)
矢崎海苔店
有機庵(すっぽん・高麗人参)／まる天(練り物)
三浦屋(ふぐ・すっぽん)
メリー(カバン)
オシヤレさがしMakoto(婦人服)
オーエスドラッグ
円満屋(雑貨)
近江の館(健康・自然食品)
Wショップブチエーン(靴)
かねたや菓鴨店(家具)
澤海商店(作業服)
マルジ3号店(紳士服)
マルジ4号店(赤パンツ館)

J R 菓鴨駅方面→

露店

商店街

味噌漬け
落花生
玉こんにやく
乾物
キューピおもちゃ
財布
大判焼き
わらび餅
ぶつかきチョコ
ベビーカステラ
カツラ
赤パンツ・肌着
アクセサリー
手相占い
靴下
カレンダー
乾物
タワシ
アクセサリー&化粧品
チキンステーキ
佃煮
わらび餅
果物&野菜
じゃがバター
スキんケア
ぶつかきチョコ
服のボタン・雑貨
お好み焼き
たくわん
黒糖
化粧品
帽子
えびせん
乾物
易断
大判焼き
甘酒
カバン
玉こんにやく
生活小物・雑貨
お好み焼き
漬物
七味唐辛子
落花生
ベビーカステラ
漬物
焼きそば
萬盛堂薬局六地蔵店
塩大福伊勢屋菓子店
スカイ(喫茶)
そのの近江(呉服)
河村屋(漬物)
大坂屋プラザ(婦人服)
三好屋(衣料品)／クリップジョイント美容室
東京すがも園(開運塩大福)
島屋メリヤス(肌着)
長寿堂(煎餅)
月岡商店(催事)
タカセ(パン・ケーキ・喫茶)
サン・まつみや本店(婦人服)
創作ちりめん・布遊舎(小物・雑貨)
萬盛堂薬局分店／山下理髪店
ジャパンライフ(寝具・磁気治療器)
木屋(袋物・カバン)
松美屋(婦人服)
コバヤシ洋傘店(傘・帽子・雑貨)
笹屋(漢方薬)
桜膳(焼肉・韓国料理)
ワンダーネスト(広告企画制作)
関根商店(燃料・石油)
佃煮(佃煮)／三石工業所
アルプスシューズ
地蔵もなか松月堂(和菓子)
磯田園(お茶)
サンワ靴店
金太郎(飴)／想いコーポレーション(終活協議会)
永楽堂(仏具)
喜福堂(パン)
タムラ(帽子)
伊藤佛具店
F.O.B. K O B E(1000円ショップ)
京佃煮野村
魚卵(鮮魚・弁当)
アルプスカフェ
ふれんど(婦人服)
萬盛堂薬局本店
ひさご屋金物店
石崎工務店
マーキユリー(婦人服)
菓鴨で北海道(北海道物産)
モード牡丹(婦人服)
築地ヤマノ(小魚専門店)
ときわ食堂
石栄堂印房

加盟店

図 I-5-1 菓鴨地蔵通り商店街加盟店舗配置(菓鴨地蔵通り商店街振興組合による発行される「菓鴨地蔵通り商店街マップ 2016 年 4 月」により筆者作成) および露店配置(2016 年 12 月 24 日当日調査)

また、興味深いことに、筆者が調査を行なった当日（2016年12月24日）に、「手相」と「易断」という占い関係の露店も2軒があり、実際、高岩寺の境内にも「高島易断」という露店がある。要するに、高岩寺（とげぬき地蔵）は曹洞宗のお寺ではあるが、ここ巣鴨地蔵通り全体としては特定の宗教、宗派の色はなく、参詣者個々のニーズに応じて求められる規制力が緩やかな信仰空間となっているのではないかと考えられる。

以上で見てきたように、高岩寺においては、気軽に本堂の中に入って休憩を取ったり、友達とおしゃべりしたりするお年寄りたちが見られる一方、本尊のとげぬき地蔵さまに向かって、手を合わせて読経する真剣な姿も見られる。参詣者に対する規制力が緩やかなわりに、霊験あらたかなる御利益のあるとげぬき地蔵が信仰心を後押ししている。その上、あらゆる悩み事を気軽に相談できるとげぬき生活館相談所が設けられることによって、高齢者および「準高齢者」にとっては「総合的心の拠り所」と言えよう。

また、高級デパートのような売り場にはない、しかも安く求められる塩大福、漬物、健康食品、漢方薬など年配者が好みそうな専門店や食堂が立ち並び、高齢者たちの天国とも言えるこの商店街は余暇を過ごすためのレジャーの場ともなり、信仰の面においても日常生活の面においても何でも求められる「老後生活の百貨店」ではないかと考えられる。

Ⅱ 死と向き合う高齢者——ポックリ信仰

前章で述べてきたように、高齢期が長くなった今日の高齢者は、いくら死が間近に控えているといっても、お地蔵さまに「元気をいただきたい」とか「病気を治してください」とすがりながら、生き生きと老後を楽しんで生きている姿が非常に印象に残るものである。一方、その長い高齢の生の末に、死が待っていることは誰でも避けられないものである。そのため、自分自身の死を見つめ、いかにそれと向き合うかを考えざるをえない。さらにいうと、それは人間のぎりぎり生の悩みから生まれたもので、生の延長線上に立つものであると思われる。ゆえに、良く生きるためにもつながるのではないかと考えられる。そこで筆者は、まさに生と死と向き合う態度であるとされる「ポックリ信仰」を考察対象として取り扱い、それが現代日本人、とりわけ高齢者にとっての意味を明らかにしていきたい。

第二章 ポックリ信仰の諸相

2014年11月21日付の『河北新報』に「元気で長生き、大往生を／宮城・七ヶ宿『ピンころ地蔵尊』お堂建立」という見出しの記事があった。その内容は2014年11月に、宮城県七ヶ宿町関地区に新しくポックリ信仰ゆかりの場が作られたということである。それは関泉寺の「関のピンピンころり地蔵尊」で、今静かな人気を呼んでいるようである。建立の経緯については、七ヶ宿町は高齢化率が44.6%（2014年3月現在）と宮城県内の市町村で最も高いということで、「元気で長生きし、できるだけ介護のお世話にならずに大往生を遂げたい」という人々の願いを込めて住職が建立を決意したと記事の中に記されている。

そのように、ポックリ信仰は流行現象までになった時代と比べると、それほど盛んではないかもしれないが、安定して人気を見せ、今なお、地域社会に根付いていることは確かである。付表で示されているように、現在、ポックリ信仰を取り上げる宗教施設は日本全国各地に点在し、昔からの所もあれば、最近新しく作られた所もある。それらにおいてポックリ信仰はいかなる形態を呈しているかについて、本章で具体的な事例を提示しながら、分析を行っていく。

1 呼称

冒頭でも述べたが、便宜上「ポックリ信仰」に統一しているが、実に多様な呼称があるのは事実である。用語上の観点から、それらを「ポックリ系」と「コロリ系」との二種類に大別することができる。

①ポックリ系：付表にあるように、「ぽっくり観音」「ぽっくり不動尊」「ぽっくり大師」「ぽっくり地蔵」など数多くの信仰対象が「ぽっくり」を冠していることがわかる。「ぽっくり」の語は、「物が折れるさま、転じて、元気だった人が突然死ぬさまを表わす語」と『日本国語大辞典』で解説されているように、樹木や芯のある物が突然ぽっきりと折れることを指し、そこに恐らく「死」のイメージが含まれ、「ぽっくり死ぬ」という表現で使用されることが多いのであろう。そのほか、漢字で「保久利」とか「輔苦離」など当て字で「保久利大権現」「輔苦離往生仏」と表記する場合も見られる。関東や近畿地方を中心に、日本全国に受け入れられ、最も広く定着している呼び方であると

言っても過言ではない。また「GNP」というやや現代風的な名称もしばしば耳にする。これは元気（G）、長生き（N）、ポックリ（P）の頭文字でなされ、元気で長生きし、最後にポックリ死ぬという意味が込められているとされる。

②コロリ系：付表に示されているように、主に東北地方において多く見られる。例えば、よく知られているのは例 15 の「中田観音」、16 の「立木観音」、17 の「鳥迫観音」という三ヶ所からなる「会津ころり三観音」である。そのほか、例 14 の米沢・普門院の「ころり薬師」、例 13 の山形・風立寺の「ころり観音」などがある。「ころり」という語については、『日本国語大辞典』では、以下のように解説されている。

急に死ぬさま、たやすく死ぬさまを表わす語。『俳諧・西鶴五百韻（1679）』葛何「小六ころりと死んだあとまで〈西花〉町衆も不詳についた竹の杖〈西六〉」『浮世草子・武道伝来記（1687）』六・三「食類に雑（まじへ）て一貼（ぶく）、さすれば骨折ずしてころりとやるがといへば」『浮世草子・世間妾形気（1767）』四・二「梶右衛門が心痛にて、ころりとし京の土」『読本・本朝酔菩提全伝（1809）』四・六後談「赤き頭巾をきた儘で、遂にころりとなりました。起上るべき達磨さへ倒れたままの死姿」〔小学館国語辞典編集部 2001：1157 頁〕

つまり、「ぽっくり」と同じく、「ころり」にも「死」のイメージが裏に付いているわけである。それに、山形県米沢市の方言とされる「ころりと」と宮城県仙台市の方言とされる「ごろり」とともに「そのまま」という意味を指すと指摘されている³⁰。それに則るなら、つまり、何（病気）もなく、ころりと（そのまま）死ぬことを表わす語に転じて使われるようになって、特に東北地方に広がっていったのではないかと推測できる。

さらに、「ピンピンコロリ（PPK）」や「ぴんころ」といった呼称がある。これは昭和 55（1980）年に日本一長寿で知られる長野県で、「健康で長生きし、死ぬ時はあっさり大往生したい」という県

³⁰ 小学館国語辞典編集部編「ころり」『日本国語大辞典』（小学館、2001）1157 頁を参照。

民の切実な願いから始まった「ぴんぴんころり（PPK）運動」から世に出始めたとされる³¹。そのため、付表の例 32 の佐久市薬師寺の「ぴんころ地蔵」や例 33 の高森町瑠璃寺の「光明功德佛（ピンピンコロリ地蔵）」など長野県を中心に、「ピンピンコロリ」の表現が全国に知れ渡るようになった。

その他、「嫁いらず」「嫁楽」「嫁助け」などの呼称もよく目にする。「嫁いらず」を一見して、嫁が要らないという誤解が生じることもあるが、まったくそのような意味ではない。時代や社会構造の変化によって現状は大きく変わっているが、いまだに家庭に周囲の人の世話をする役目は嫁とされるのが多く見られる。そのため、嫁に迷惑をかけたくない、特にシモの世話で嫁の手を煩わすことなく過ごして死んでいくようにその信仰対象に祈願するのである。その中で、最も世に知られているのが例 59 の岡山県井原市大江町梶草にある「樋之尻山 嫁いらず観音」であろう。鈴木岩弓の論考によると、ここに参詣に来て「下着祈願」を行なうと、シモの世話で嫁の手を煩わすことなく安楽往生ができると考えられている。ただし、祈願成就のためには三回参詣しなければならないと言われ、一回目は長寿無病息災で、二回目は厄除で、三回目は安楽往生ということである³²。その背後に今でもよく世間話のネタになる「嫁姑問題」が関連していることは容易に想像できる。つまり、もし老後自分が倒れて寝たきりになった場合、例えば今まで自分がいじめてきた嫁に、シモの世話にならざるをえない始末になると、姑にとっては尊厳が保たれず極めて屈辱だと思われる。「嫁いらず」という滑稽な表現ができるほど、いかに老後生活への不安を感じているかが窺えるし、あまりにも生々しい年寄りの叫び声であり、笑うに笑えない現実である。

さらに、本研究においては「シモの病封じ」「ボケ封じ」「中風封じ」といった利益もポックリ信仰の範疇に入れている。なぜかという、ポックリ信仰の祈願志向の要となるのは「人（シモ）の世話にならず」ということで、ぼけてしまうと、自分のシモの始末ができなくなるし、中風で寝たきりになると、やはり自分でシモの始末ができなくなるというわけで、ボケからの救いとしても、中風からの救いとしても、結果的にはポックリ信仰と通じると判断しているからである。

³¹ ピンピンコロリ地蔵事務所ホームページ：www.takamori.ne.jp/~pinkoro/gaiyou.htm より参照、閲覧日：2015 年 7 月 13 日。

³² 鈴木岩弓「老いと宗教」池上良正ほか編『岩波講座 宗教7』（岩波書店、2004）234-235 頁を参照。

2 信仰対象

ポックリ信仰の祈願対象となるものは、実に多種多様である。文末にまとめられている付表の以外に、小さな祠や道端に佇む知る人ぞ知るものもあるのであろうが、本章においては検証ができた付表の71ヶ所をもとに分析し、それらを三種類に大別した。

①神仏像。

表 2-2-1 信仰対象となる神仏（筆者作成）

ポックリ信仰の祈願対象となるものはほとんどこの類のもので、全体の9割以上を占めていることがわかる。その中で、表 2-2-1 に示されているように、最も多いのが地蔵菩薩と観音菩薩である。やはり、その親近感に溢れる庶民的な性格が大いに影響しているであろう。すなわち、生活に身近で、気やすく、理屈のわからないままですでけるとい

神仏像	件数
地蔵	22
観音	20
阿弥陀	4
釈迦	4
権現	3
弘法大師	3
烏枢沙摩明王	1
不動	1
薬師	1

う魅力を感じさせるところがある。さらに、地蔵菩薩は現当二世の利益者として信仰され、中世以降万能利益者ともいうべき信仰対象になって、利益内容、祈願方法、霊験内容などに応じて様々な名称をもって親しみを込めて呼ばれることが多いとされる³³。また、観音菩薩に関しても、種々の現世利益が中心であるが、来世利益もあり、その利益は多様であるとされる³⁴。つまり、地蔵でも観音でもその利益に示されているように、「現当二世」の多様な利益を持つという点がポックリ信仰の祈願指向とよく合致し、最も信仰されているのではないかと考えられる。上述したように、ポックリ信仰はまさしく「生」と「死」、すなわち「現世」と「来世」と両方に関わるもので、健康で長生きするという「健康長寿願望」が前提となり、それでも寿命が来るなら、長患いせずに苦しみなく死んで行けるような安楽往生を祈願するわけである。

³³ 渡浩一「地蔵信仰」佐々木宏幹ほか監修『日本民俗宗教辞典』（東京堂出版、1998）225頁を参照。

³⁴ 渡浩一「観音信仰」佐々木宏幹ほか監修『日本民俗宗教辞典』（東京堂出版、1998）133頁を参照。



写真 2-2-1 宮城・白石「小原ぼけ除け
ころり観音」(2013 年 10 月 13 日筆者撮影)



写真 2-2-2 宮城・白石延命寺の「ころり
地蔵尊」(同左)



写真 2-2-3 青森・弘法寺の「ぼっくり
長命極楽地蔵」(2015 年 2 月 15 日筆者撮影)



写真 2-2-4 埼玉・常満寺の「ぼっくり観音」
(2013 年 9 月 6 日筆者撮影)

さらに、写真 2-2-1,3,4 のように、観音像や地蔵像の足元に老夫婦の一对の像が置かれていることが実に印象深いことである。それは、おそらく「ぼけよけ二十四地蔵尊霊場」の影響を受けたのではないかと推測できる。「ぼけよけ二十四地蔵尊霊場」は、1985 年 5 月に和歌山・奈良・大阪の 24 カ寺を結んで、誕生したものである。この霊場の仕掛け人である第三番札所の禅林寺（高野山真

言宗)の住職の話によると、近年、檀信徒からぼけ老人を抱えての苦勞話を聞かされ、ぼけへの不安を打ち明けられたりするようになり、人々をぼけの不安から救ってくれる仏を迎え、他の寺にも呼びかけて霊場会を結成したいという発願からできたものである。また、ひと目で、ああ、これはぼけよけ地藏さんだなとわかる姿で、結局、地藏の前部両脇に、お爺さんとお婆さんがふくよかな笑顔で寄り添って合掌している図柄になったと言われる³⁵。

表 2-2-1 の他、ポックリ信仰の祈願対象となるものは、例 48 の京都市東山区金園町の金剛寺の「庚申様」と呼ばれる青面金剛、例 50 の大阪市天王寺区四天王寺・万燈院の「紙子仏」など多岐にわたる。

②墓や石碑。これらはすべて「那須与一」ゆかりのものである。

那須与一については、『平家物語』や『源平盛衰記』の軍記物語などに坂東武者の代表者として描かれていることはよく知られているところである。那須与一が実在した人物かどうかは不明にもかかわらず与一に関する伝承が全国に分布している³⁶。その中で、ポックリ信仰と結びついたのがその最期伝承であると考えられる。

山中清次の論考によると、与一の死亡場所や墓に関する伝承は近畿、中国、四国に広く分布している。そうした中、与一の最期に関わる伝承からは、彼が安らかに逝ったという事例と急死、病死したという反対の事例が確認された³⁷。例 47 の京都市東山区泉涌寺山内町の即上院の「那須与一の墓」、例 49 の亀岡市矢田町の「那須与一堂」、例 52 の兵庫・篠山の瑞祥寺の「那須与一大権現」、例 53 の神戸市須磨区妙法寺町の「那須与一の墓」、例 62 の徳島県名西郡石井町高原の「与一神社」の 5 か所とされる。

その関わりについては、まず京都の即上院の「那須与一の墓」を例としてみてみよう。木村博は以下のように述べている。

³⁵ 「新興霊場 和歌山、奈良、大阪の二十四ヵ寺がつくるぼけよけ地藏の活況！伝統もなく宣伝もせず採算も排したボケ霊場の大成功のワケは何か」『月刊住職』14（金花舎、1987）22-24 頁を参照。

³⁶ 山中清次「那須与一の伝承と信仰」栃木県立博物館編『那須与一の歴史・民俗的調査研究』（栃木県立博物館、1991）119 頁を参照。

³⁷ 同上：122-127 頁を参照。

那須の与一が死んでゆく時、余程スソの世話がかったと見え、これは私の業だ、私はこの病気で苦しんだのだから、世人も困るだろう。だから私一代でこの病気を無くすように私は守護神となろう、といひ残したのだそうだ。[木村 1989 : 72]

また、神戸の「那須与一の墓」については、昔那須与一の世話をした人の子孫によって構成されたといわれる「与一講」に保管されている「那須与一宗隆公之略伝記」によれば、那須与一が出家して北向八幡宮に参籠し、滞在中に病気になり、身体が自由にならないほど悪くなってしまい、念仏講の人たちが同情して念仏堂で看病したが、良くならなかったと言う。与一は死に際に「(略) 我れ死にたる後、報恩謝徳の為必ず諸人に斯る難病に浸されぬ様守護し遣す」と人々に言い残し往生を遂げたと記されている³⁸。

③自然石。この類に関しては、特に有名なのは例 63 の香川県高松市鬼無町の安楽院の「保久利大権現」である。昭和 43 (1968) 年日本テレビ、昭和 47 (1972) 年「毎日新聞」に取り上げられて以来、ここへの参拝は絶え間なかったという。昭和 47 (1972) 年 5 月 10 日付の「毎日新聞」の家庭欄に「悲しい流行・ぽっくり流行」という見出しの記事が掲載されている。

お堂はトタン屋根に板囲いがしてあるだけ。物置小屋のように粗末なものだった。ご神体は高さ 1 メートルの灰色がかった円すい型の自然石。薄暗い祭壇の奥に、まるでお坊さんが座禅を組んでいるようなかっこうで置いてあった。目をこらして見ると、つるつるした石の表面に「保久利大権現」と刻んだ文字が読みとれた。「ぽっくり」とはこの「保久利」がなまったものらしい。

上述してきたように、ポッキリ信仰の祈願対象となるものは、特定の教義に基づいて決められる

³⁸ 木村博『『安楽死』をめぐる民俗』井之口章次編『葬送墓制研究集成第二巻 葬送儀礼』(名著出版、1979)

ことなく、神でも仏でも石でも、言うならば鰯の頭でも信心の対象となるわけである。つまり、願をかなえてくれれば、何でもその信仰対象になれる好き勝手に個人的なレベルにおいて展開されるものである。祈るということには、祈るべき相手が必要になってくる。この必要、すなわち切なる願望をふりむけるものとして、神であり、仏であり、八百万の神仏であり、このことは、土俗信仰の姿をよく物語っていると塚本哲が述べている³⁹。さらに、最初は個人がある対象に対して祈ったら、「危機的状況」が解消されたという「オカゲ」体験があつてはじめて〈個〉の祈願対象となったのである。そこから、その「オカゲ」体験をもってロコミやマスコミなどを通して、〈個〉の願を叶えてくれたモノが多くの人々に知られ、〈群〉の祈願対象となったのがよく見られるパターンである。

3 地域分布 表 2-3-1 ポックリ信仰関連施設地域分布（筆者作成）

ポックリ信仰を扱っている場合は、多くは仏教系の施設であるが、寺社問わず全国各地に存在している。一応筆者が整理した付表のポックリ信仰関連施設からその地域分布をまとめると、表 1-3-1 にあるように、東北地方において最も件数が多いが、全体的には、近畿や中部地方を中心に、西日本の方がより多くポックリ信仰を扱っていることがわかる。

地方	件数
東北	17
中部	14
近畿	13
関東	12
四国	6
九州	5
中国	4

それはポックリ信仰の縁起話と大いに関係があると思われる。ポックリ信仰は、『往生要集』の著者である恵心僧都が臨終を迎える母を浄衣に着替えさせ、その呼吸に合わせて念仏を唱えたところ苦しむことなく安楽往生した、という伝説に基づいたものと言われている。そのため、1970年代ポックリ信仰のブーム期において、恵心僧都のゆかりを持ち、源信を開基としている例 54 の吉田寺と源信の誕生寺である例 55 の阿日寺がポックリ往生という有難いご利益がある寺院として

³⁹ 塚本哲『ぽっくりさん信仰』（保健同人社、1976）59 頁を参照。

マスコミによって大きく報道され、一気に人気を集めた。現在この両寺は、ポックリ信仰のメッカともいうべき代表的なポックリ寺となり、そこへの参拝者が後を絶たない。以後、ポックリ信仰は近畿一円に広がりを見せ、西日本において盛んに展開されていったのではないかと推測できる。

4 利益内容

繰り返して述べるが、ポックリ信仰の祈願指向の中核となるのはシモの世話にならず最後まで健康で長生きしたいことである。それに、苦しみなく死んでいきたいという「安楽死」願望が込められている。便宜上、ポックリ信仰の内実を捉えるために二つのように分けていうが、この二つは別々存在しているのではなく、相補的にポックリ願望の基盤を形成している。やはり、経済的にも医学的にも恵まれている現代においては、まず健康な生活を送りながら年を取っていきたいのが普通であるが、万が一病気になった場合は、治れる病気なら治してほしい一方、治らない病気なら長患いせずポックリ死にたいのが人情である。つまり、「安楽死」願望はシモの世話にならず長患いせず健康長寿願望の延長線上に、あるいはその末に当然出てくる話と言えよう。

また、「ボケ除け」や「中風封じ」などの利益をメインに出している寺院も見られる。これらは直接ポックリ信仰と関係していないように見えるが、最終的には、ポックリ信仰の利益の柱に帰着するのである。前で述べたように、「人（シモ）の世話にならない」ことがポックリ信仰の利益内容の要である。ぼけたり、中風になったりして自分の意思で動くことができなくなってしまうと、必ずではないが、他人からシモの世話を受ける恐れがある。つまり、「ボケ」や「中風」などの病気はシモの世話にならずにすむことへの障害となるものと思われるため、「ボケないように」や「中風にならないように」といった具体的な願を立てたのではないかと考えられる。現在、例えば 1984 年に近畿・中国・山陰・四国・九州の真言宗 33 カ寺によってスタートされた「西国ボケ封じ三十三観音霊場」や 1985 年に和歌山・奈良・大阪の一府二県 24 カ寺によって発足された「ぼけよけ地藏尊霊場」といった「ぼけ除け地藏尊霊場」や「ボケ封じ観音霊場」と名乗る霊場が相次いで生まれ、活況ぶりを見せている。

5 ポックリ信仰との結びつき方

各信仰対象がそれぞれいかなる経緯を通して、ポックリ信仰と結びついたのかについて、実は不明の所が多く、「いつしか参詣すればポックリ往生ができると伝えられるようになった」ということがしばしば見られるが、筆者は判明できる範囲で、主に以下のように分類してみた。

①付加型。もともと神仏が持つある利益にポックリの利益を加えるパターンである。時代や社会状況の変遷につれて、人々の願い事も変わりつつ、多様化を呈しているため、その変化に応じて人々が望む利益が生まれることは容易に考えられるのであろう。

例えば、「阿弥陀信仰」である。阿弥陀如来がポックリ信仰の祈願対象として祀られている経緯について、恵心僧都源信の母の臨終の話がよく指摘されるが、その他に、筆者は「阿弥陀信仰」でいう「極楽往生」と「来迎引接」の点からもその解明が可能ではないかと推測している。

伊藤唯真によると、日本における阿弥陀信仰の特色の一つは、阿弥陀仏の救済性に関するもので、阿弥陀仏の「来迎引接」と行者の「極楽往生」に特別の関心が寄せられていたことである。阿弥陀仏の来迎と衆生の極楽往生とは相応じるもので、この来迎引接と極楽往生が阿弥陀信仰を他の仏菩薩への信仰と区別するものである⁴⁰。また、『無量寿経』で説かれる阿弥陀仏の四十八願の中で、第十九願の「来迎引接願」は以下のような内容である。

たとい、われ仏たるを得んに、十方の衆生、菩提心を発し、もろもろの功德を修め、至心に発願して、わが国に生まれんと欲するに、寿終わる時に臨みて、(われ) もし大衆とともに圍繞して、その人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。[藤田宏達 1994 : 100 頁]

つまり、その「極楽往生」と「来迎引接」から、臨終の時、阿弥陀仏のお迎えによってそのまま苦しみなく、安らかにその極楽浄土へ導いてくれると信じて、そのありがたい利益を付け加えたのではないかと考えられる。

もう一つは、烏枢沙摩明王である。もともと烏枢沙摩明王はインドの神話に登場する火の神様「ア

⁴⁰ 伊藤唯真「阿弥陀信仰の基調と特色」伊藤唯真編『阿弥陀信仰』（雄山閣、1984（1988））143—160 頁を参照。

グニ」で、不浄を厭わず、不浄な場所に巢食って諸病災厄の因をなす魔鬼の類を抑える呪力を有するために、「東司の神様」とか、「トイレの神様」など廁の守護神としてよく知られている⁴¹。そこから、烏枢沙摩明王を祀ると、シモの病気を患わないとか、年を取ってシモの世話にならないという利益が生まれてきたと考えられる。

付表の例37の静岡県伊豆市の金龍山明德寺がそのように信仰を集めている。この明德寺には500余年前より烏枢沙摩明王が祀られているといい、傍におまたぎ、おさすりといって、高さ三尺くらいの男根石とくりぬき便所が作られており、男根石に触って便所を跨ぎ、祭壇の烏枢沙摩明王に拝めば、年を取ってもシモの世話にならないとされる⁴²。

つまり、烏枢沙摩明王は「トイレの神様」から、シモの病気と連想され、シモの病封じ、あるいはシモの世話にならないという利益が加わり、ポックリ信仰の祈願対象となったのではないかと推測できる。

②あやかり型。実際に最期ポックリ往生を遂げた人にあやかりたくて、その人が生前篤く信仰していた神仏が信仰対象として、多くの人々に祈願されるようになるパターンである。これには、参詣者のロコミやマスコミの力が大いに発揮されていると思われる。

例えば、前記の香川・高松安楽院の「保久利大権現」をみれば、「鬼無のぽっくりさん」とも呼ばれることが、ポックリ信仰の祈願対象となった経緯については、昭和47（1972）年5月10日付けの「毎日新聞」で、以下のように記されている。

このお堂をお守りしている高松市のはずれ、木田郡庵治町、西国十五番寺「大師寺」住職、大野龍鳳さん（69）の話によると『ぽっくりさま』の信仰由来は、二百数十年前の享保年間にはじまるという。そのころ、衣掛村に「弥助」というひとり者のおじいさんがいて、朝晩、この自然石に手を合わせ「ぽっくりあの世へ行けますように」と祈ったところ、だれの厄介にもな

⁴¹ 飯島吉晴「烏枢沙摩明王と廁神」宮田登・坂本要編『仏教民俗学大系8 俗信と仏教』（名著出版、1992）313-328頁を参照。

⁴² 同上。

らず往生した。その話が村人たちに伝わり、自然石に「保久利大権現」の六文字が彫込まれ、願をかけると「家族のものに、しものめんどろをかけず、ぽっくり死ぬる」という功德の伝説が残った。

つまり、日頃からその信仰対象に祈った末、本当に誰にも迷惑をかけずに往生したという利益譚がまず地元の住民に伝わり、その後、以上のような新聞などマスコミの報道で拡散され、次第に大勢の人々に知られるようになった。そのように、その死に方にあやかりたいという気持ちから、もともと〈個〉が信仰していた祈願対象が〈群〉の信仰対象となったわけである。

③人神型。人神は、一般的に霊神信仰と説明されており、生前悩み苦しんだものが、死後はやり神として一世を風靡するという現象が特徴的である。また、人神ではあるが、固有名詞は特になく、非業の死を遂げた者が突如としてカミに祀られている場合も目立っていると宮田登の指摘のように⁴³、このような2種類が見られる。その一つは、ポッキリ往生ができなかった、すなわち最期に病気に苦しんで死んだ人が遺言をもって自らその守護神となるというケースである。その代表は那須与一である。那須与一は最後に中風になり、村人に看病されながら、たいへん苦しんで死んでいったといわれる。その死に際に、「私が死んだ後は、報恩謝徳のために必ずあなた方がこのような難病にかからぬようにお守りいたします」⁴⁴と言い残し、後世の人々に信仰されるようになったというわけである。

もうひとつのパターンは、いかなる死に方を遂げたかはともかく、死後神として祀られ、霊験を現したとされるモノに安楽往生の利益があるというケースである。例えば付表例 22 の群馬県伊勢崎市の「幸三郎地藏」のことであるが、『伊勢崎市史』によると、あるとき墓地周辺の杉の大木を若者が中心になって伐採した際、幸三郎が作業中倒れてきた大木の下敷きとなり、26歳の若さで死んだので、その菩提のために建てられたものだと言われる。また、この幸三郎地藏はさまざま霊験を現

⁴³ 宮田登『日本を語る3 はやり神と民衆宗教』（吉川弘文館、2006）53頁を参照。

⁴⁴ 木村博『死—仏教と民俗』（名著出版、1989）65-66頁を参照。

し、近郷の人々の信仰を集め、特に老人が参詣すれば、安楽に成仏するといわれている⁴⁵。

④連想型。ある行為や言葉から連想させ、ポックリ信仰と結びついたというパターンである。例えば、付表例 44 の三重県志摩郡の「志摩のぬれ仏」のことであるが、昔から波打ち際に船人や海女を守る地藏であるが、満潮時に、腰まで海水が浸ることから腰からシモの病に靈験があると伝えられるようになったという。つまり、「腰まで海水が浸る」ことから連想を走らせ、「腰からシモの病にならず」ことへ、という素朴な発想からの産物だと言えよう。また、「那須与一」の例であるが、彼がポックリ信仰の祈願対象となった経緯は上記の他、もうひとつがある。『平家物語』において、与一が太陽を描いた紅に金色の日の丸の扇を一発で射落とした弓の技が描かれている。太陽は生命の根源で、その太陽を描いた扇を落とす行為を、人間の命を落とすことと重ね合わせ、一発で命を落とす、転じてポックリと死ぬということになったというのである。非合理的に見えるかもしれないが、「病は気から」といわれるように、信心しているという心の安らぎから病気が治癒されることもあり、現実にもそのように信じて祈りを捧げる人がいるということは、人々が避けられない自分の死と真剣に向き合っている証ではないかと考えられる。

何といっても、人々の願い事は常に時代や社会によって変わるため、たとえ昔流行ったある神仏の機能が廃れ、現在必要とされている新しい機能に変わったりする。したがって、神仏の利益も不変のものではなく、常にその時代の人々の要望に応じてダイナミックに変化し、これも民間信仰の一つの特色ではないかと考えられる。

6 祈願方法

「撫でさすり四百四病ではげ給ひ」という江戸時代の川柳があり、さすがの賓頭盧尊者も四百四もの病で撫でさすられると、塗装もはげてしまったという意味である。おびんづるさまは、病人が自分の患部と尊者の同じところを交互に撫でると、病気が治ると信じられ、「なで仏」とも呼ばれ親しまれている。つまり、人々は神仏に願をかけ、祈りを捧げる際に、ただ手を合わせたり、賽銭を

⁴⁵ 伊勢崎市編『伊勢崎市史・民俗編』（伊勢崎市、1989）671 頁を参照。

供えたり、札やお守りをいただくのではなく、実際の効果はともかく、神仏像に撫でたり、何かを身につけたり祈りの方法にはバリエーションに富むのである。ポックリ信仰においても例外がなく、特に教義に基づいて決まっているやり方はないが、寺院と参拝者それぞれ独自の発想によっていろいろ工夫されているのである。一方、独自性といっても、最初にある個人の発想で始められたやり方で祈り続いた末に、本当にその願い事が叶ったとすると、いわゆる利益譚が広まって、徐々に多くの人に模倣されていき、その独自性が薄まり、一般化されるようになる。一例を挙げると、現在多くのポックリ信仰を取り入れている宗教施設で行われている「肌着祈願」がそれである。



写真 2-6-1 祈願済のタオルに捺印してもらう様子（山形風立寺・2015 年 6 月 7 日筆者撮影）

「肌着祈願」は、名前の通りに、肌着類やタオル、晒などをもって祈祷が行われる方法で、恵心僧都源信が母の臨終にやってあげた「浄衣祈願」と関係があると推測できる。源信が臨終を迎える母を浄衣に着替えさせ、その呼吸に合わせて念仏を唱えたところ、苦しむことなく安楽往生したという伝説から、さらにシモを汚さないように、シモの始末が自分でできるようにという願いで、「肌着」祈願が生まれ、広く受け入れられているのである。昔は腰巻きやふんどしで、現在は、パンツやタオル、晒などで祈祷が行われる。持参してもいいし、寺院でも買えるし、祈祷を受けたものをはいたり、あるいは枕や布団の下に敷いて寝たり、とにかく身に離さないようにすれば利益があると言われる。

また、「会津ころり三観音」の「だきつき柱」も有名である。「三観音」とは福島県会津地方の弘安寺「中田観音」、恵隆寺「立木観音」、如法寺「鳥追観音」から構成されるもので、三ヶ所ともに「だきつき柱」という柱があり、その柱に抱きつくと、長患いをせずにくろりと死んでいけると広く信仰を集めている。



写真 2-6-2 如法寺「だきつき柱」

(2014 年 7 月 31 日筆者撮影)



写真 2-6-3 弘安寺「だきつき柱」

(同左)

その他、「霊水」をもって祈ることもしばしば見られる。例えば、山形・米沢の「普門院」に「コロリ薬師」が安置され、お参りをすると、死ぬ時に苦しまなかった「澄心の泉」という水場がある。その由来話に、「この湧水は信仰の水ですから本堂を向き手を合せてから頂いて下さい」とし、「臨終正念を本誓とし霊験あらたかにして」という記述がある。その霊験あらたかさのためか、近所をはじめ、全国各地からその湧き水を求めに来る参拝者があまりにも多くて、「病の方怪我の方地元の方を最優先としポリ容器は一箇ペットボトルは五本迄とし良識をもって薬師瑠璃光如来の慈悲願力が得られるようにしましょう」と注意も掲げられている。



写真 2-6-4 普門院の「澄心の泉」

(2013年11月2日筆者撮影)

さらに、札をトイレに貼ったり、札に願い事を書いて水に流したりなど様々なやり方が見られる。何といっても自分で納得が行き、それで安心感が得られるならばよいわけで、お寺へお参りして、僧侶の説教を聞くだけでもいいのではないであろうか。

要するに、現代日本人の盛んな信仰を集めている「生」と「死」にまつわるポックリ信仰は、シモの世話になるような長患いをせずに健康で長生きしたいという「健康長寿」と、その結果、臨終の際に苦しまず安らかに死んでいきたいという「安楽往生」の祈願指向が含まれるものである。

ただし、いくら「安楽死」を願う信仰と言っても、医学上で言う「安楽死」とは全く異質のものであることに留意しなければならない。一般的にいう「安楽死」は「苦しみのない速やかな死」を意味するが、重要な点は、当事者が自ら生命を絶つ能力がないから、第三者の介助なしに死ぬことができないということである⁴⁶が、ポックリ信仰の「安楽死」願望は第三者の介助なしに、自然に苦しみなく死ぬことを望むことである。これについて、水野洋も、「半身不随で家族の迷惑や気がねをしながら下の世話までしてもらってまで生きるのは最高の不幸であり、そんなことになりたくないという切実な願いから来ているのである。このように元気な時から安楽死を望むのは、決して自ら医師の手で安楽死させてもらいたいという願いではなく、まさに自ら自然の力でポックリと死にたいという願望である」[水野 1973 : 32] と指摘している。また、いわゆる「ポックリ寺」として広く知られている吉田寺の先代住職の妻である山中かをるも、本当のぽっくりは急死することじ

⁴⁶ 酒井昭宏「安楽死/尊厳死」大庭健ほか編『現代倫理学事典』（弘文堂、2006）24頁を参照。

やなく、大和言葉で保久利（ほくり）往生といって、十分に寿命を生きて朽木が倒れるように、安らかに死ぬこと、すなわちぽっくり死にたいという『安楽往生』の願いは、よく生きたいという願いの裏返しである⁴⁷と新聞の取材で以上のように述べている。

また、「ぽっくり観音」、「ころり薬師」、「ピンピンコロリ地藏」など祈りの対象となるものは多種多様で、たとえそれに関わる空間が仏教的だとしても、特定宗派の色がなく、参詣者に対する規制が緩やかで、個人レベルにおいて展開されて好き勝手な一面があると考えられる。

⁴⁷ 「吉田寺（斑鳩町小吉田）『安楽往生』祈る寺」『毎日新聞』1996年5月13日、「奈良・吉田寺「ぽっくり寺」で知られる」『毎日新聞』2002年6月12日を参照。

付表 ポックリ信仰関連施設一覧（筆者作成）⁴⁸

N O	呼称	信仰 対象	利益	縁起	祈り方	施設内の 位置	施設名	所在地	宗派	本尊	出典
1	ぽっくり長 命極楽地 蔵	地藏	長生き、 大往生			境内	弘法寺	青森県津軽 市木造吹原 屏風山	高野山 真言宗	弘法大 師	筆者検証
2	ぼけ除観 音	観音	ボケ封じ			境内	全仏山青 龍寺	青森県青森 市大字桑原 字山崎	高野山 真言宗	大日如 来	青龍寺ホームページ： http://showa-daibutu.com/guide/ボケ避け 観音を参照
3	ころり地藏 尊	地藏	安楽往生	熊野詣で大蛇に殺された修験者の 安珍を、出身地の白石で供養する ため作られた。	地藏の足を人 知らず舐める ところり往生 がかいなう	境内	瑞珠山延 命寺	宮城県白石 市不澄ヶ池	真言宗 智山派	大日如 来	筆者検証

⁴⁸ 付表以外にも小さな祠や道端に佇む知る人ぞ知るポックリ信仰の対象となるものがあると考えられる。

4	小原ぼけ 除け・ころ り観音	観音	ぼけ除 け、安楽 往生	人々が老後に不安を感じているた め、ぼけずに迷惑をかけずにコロリ と往くことを祈願し、平成 7 年に別 当寺である清光寺の吉野範雄住 職が建立			飛不動尊	宮城県白石 市小原江志 山		不動明 王	筆者検証
5	関のピン ピンコロリ 地藏尊	地藏	元気で長 生き、大 往生			地藏堂	関泉寺	宮城県刈田 郡七ヶ宿町 大杉	曹洞宗		筆者検証
6	青麻大権 現	常陸 坊海 尊(清 悦仙 人)	中風病退 除	天正年間伊達家の臣亀岡の郷 士飯坂左衛門尉茂宏、敬神の念 毎に厚く青麻の大神を信仰し、鎮 守神として創立したが、茂宏の母 が中風になった時医薬禁厭等百 方手を尽くしたが快方の兆し見え ず、21 日間大神の前に願をかけた	「三度詣でれ ば生涯の中 風の難よりの がれる」と伝え られる		青麻神社	宮城県仙台 市宮城野区 岩切麻山		天之御 中主神・ 天照大 御神・月 読神	筆者検証

				ら全快した。それより中風除けの神として祀られている[木村、1989: 54]							
7	コロリ地蔵さん	地蔵	安楽往生	「コロリ(コレラ)にかからない地蔵」が「コロリ地蔵」となって、ころり往生ができると伝えられるようになったという		寺の墓地裏	増田山満福寺	秋田県横手市増田町	曹洞宗	阿弥陀如来	伴よう「北の地蔵さんーころりさん」『大法輪』大法輪閣、1995: 178-180 を参照
8	コロリ地蔵尊	地蔵	安楽往生	江戸中期に愛宕神社別当、阿闍梨渕清という傑僧が参詣者の安楽往生を願い、生きながら土中に埋まり、熱心に祈りを捧げ、即身成仏を遂げたといわれる	地蔵さんは特に煙草が大好きで、線香とともに煙草を供えて祈ると願いが叶うそうである	地蔵堂		秋田県湯沢市上院内愛宕神社手前			伴よう「北の地蔵さん煙草好きのころりさん」『大法輪』大法輪閣、1997:188 頁を参照

9	コロリ地蔵	地蔵	シモの世 話になら ず安楽往 生			境内のお 堂	長谷寺	秋田県湯沢 市柳町	曹洞宗		木村博『『コロリ地蔵』の こと』『秋田民俗』秋田 県民俗学会、1973: 1-7 頁を参照
10	いびた地 蔵と千体 地蔵	地蔵	中風除け	米沢で長患いして寝込むことを「い びた」と言い、中風除けの地蔵様と して信仰される	中風除けの お箸と護符	千体地蔵 堂	長命山幸 徳院笹野 寺	山形県米沢 市	真言宗 豊山派	釈迦如 来	幸徳院ホームページ: http://sasanokannon. com/keidai_info.html #sentai を参照
11	ころり観音	如意 輪観 音	安楽往生	もとは長谷堂城主が奉祀したもの で、「武士百姓共に生命は果敢な く露のころりと落つるに似ているか ら諸共につとめ励んで観音様にお すがりして立派な生涯を送ろうと 也」といういわれからころり観音と呼 ばれるようになった	三度詣でれ ば安楽死が できるといわ れている	観音堂	長谷川こ ろり観音 堂	山形県山形 市長谷堂		如意輪 観音	木村博『『安楽死』の願 い』『死—仏教と民俗』 名著出版、1989: 46-49 を参照

12	ころり往生 阿弥陀如来	阿弥陀如来	安楽往生		数珠を繰りながら祈る	常行念佛堂	宝珠山立石寺	山形県山形市山寺	天台宗	薬師如来	筆者検証
13	三宝岡の 生き如来; 「ころり観 音」	阿弥陀如来;観音	ぼけ、長 患い封 じ、安楽 往生	地元の人が病気で苦しんでおりなかなか往生できないところにこの仏像に拝んだら苦しみなく往生できたことから「ころり観音」と呼ばれるようになったと言われる	肌着祈願	本堂と奥の院	最上山風立寺	山形県山形市下東山	天台宗	阿弥陀如来	筆者検証
14	ころり薬師	薬師如来	安楽往生	昔から薬師様並びに「澄心の泉」が戦勝と臨終正念に霊験あらたかにされている	霊水	普段は本堂。例大祭の前日に神輿で錦戸薬師堂へ	岩上山普門院	山形県米沢市関根	真言宗智山派		筆者検証

15	中田観音	十一面観音	安楽往生		柱に抱きつく	本堂	普門山弘安寺	福島県大沼郡会津美里町	曹洞宗	十一面観音菩薩	筆者検証
16	立木観音	十一面千手観音	安楽往生		柱に抱きつく	本堂	金塔山恵隆寺	福島県河沼郡会津坂下町	真言宗豊山派	十一面千手観音	筆者検証
17	鳥迫観音	聖観音	安楽往生		柱に抱きつく	本堂	金剛山如法寺	福島県耶麻郡西会津町	真言宗室生寺派	聖観音	筆者検証
18	延命ぴんころ地藏	地藏	健康長寿と安楽往生	水戸藩の藩医の遺言により、人々が天命をまっとうしコロリと最期を迎えることを願い、1750 年頃建てられた延命地藏尊	地藏に身代わりになってもらうように自分の身体の悪いところに	愛染堂（縁結び）の横	大悲山保和院桂岸寺	茨城県水戸市松本町	真言宗豊山派	勢至菩薩	「二十三夜尊保和院桂岸寺 ぴんころ地藏完成 水戸」『茨城新聞』2007 年 11 月 27 日を参照

					触れ、洗い流す						
19	ポックリ地藏	地藏	安産、長寿、極楽往生	地藏像に享保 2(1717)年の文字が刻まれている		地藏堂	鹿島神社	茨城県取手市萱場			取手市ホームページ： http://www.city.toride.ibaraki.jp/index.cfm/9,4078,31,280,html を参照
20	ポックリ不動尊	不動明王	安楽往生	戦国時代に焼け残った不動明王を阿弥陀堂に設置した。それ以来、不動尊への信心を通じて、極楽往生へ導く阿弥陀如来への願いが届く	ポックリ不動尊のお姿を半紙に包んで布団の下に敷いて寝る	阿弥陀堂	慈光寺	茨城県坂東市弓田	天台宗	阿弥陀如来	立石尚之「岩井市弓田のぽっくり不動尊」『西郊民俗』西郊民俗談話会、2005:14-16を参照
21	“ぼけ封じ観世音”	観音	ぼけ封じ	北関東で最初のぼけ封じ観音		境内	梅花山成就院	栃木県下都賀郡岩船町	真言宗豊山派	不動明王	成就院ホームページ： http://www.cc9.ne.jp/

								三谷			~oyako-sidare/about/sansaku.htm を参照
22	幸三郎地蔵	地蔵	安楽往生	狩野幸三郎という人が家業に励んでムラ人の信頼を得ていたが、非業の死を遂げ、その菩提のため「幸三郎地蔵」と名付け建てられた。その後幸三郎地蔵は様々な霊験を現し、近郷の人々の信仰を集めてきた。老人が参詣すれば、安楽に成仏するといわれる	満願成就のあかつきには腹がけや頭巾を奉納する	共同墓地		群馬県伊勢崎市下道寺			「村の社寺と信仰」『伊勢崎市史・民俗編』伊勢崎市、1989:671 を参照
23	白寿ぼけ封じ・中風封じ・ぼっくり往生観	千手観音と釈迦	延命、ぼけ封じ、安楽往生	「畳の上、ベッドの上などでぼっくり往生したい願い、思いで開祖宮木常満大和尚が全国のぼっくり寺を巡り、1991 年に唯一ぼけ封じ・延	流し札、肌守り	本堂前	保寿院石屋山常満寺(保久利寺)	埼玉県日高市高萩	禅宗系単立	薬師如来、千手観音、釈	常満寺ホームページ: http://ぼっくり寺.jp/index.html を参照

	音と釈迦			命・ぽっくり往生として開山したとい う						迦如 来、十 三仏、 水子地 蔵	
24	保久利大 権現		長生き・長 患いせず 安楽往生	1973 年高松市の保久俣大権現よ り勧請	「保久利大権 現守護処」の お札、パンツ や襦袢祈祷		福祐山頭 妙寺(ぽ っくり寺)	千葉県いす み市長志	日蓮宗		頭妙寺ホームページ: http://temple.nichiren.or.jp/1031056-kenmyouji/ を参照
25	ぴんぴん ころり大師	弘法 大師	健康に生 き、寝込 むことなく 大往生		ぴんぴんころ りお守り	大師堂	東光院	千葉県千葉 市緑区平山 町	真言宗 豊山派	薬師如 来	東光院ホームページ: http://www.tokoin.com/kobodaishi.html を 参照
26	「保久利 (はくり)観	聖観 音	長寿、シ モの健			本尊脇	桃源山功 徳院龍泉	東京都八王 子市長房町	浄土宗	阿弥陀 如来	菊地正『とんとんむかし』東京新聞出版局、

	音さま」		康、保久 利(ほくり) 往生				寺				1987:107 頁を参照
27	矢来のお 釈迦様	釈迦	シモの 世話にな らず良い 往生	「桓武天皇」が鎮護国家寿命長 久のため比叡山根本「伝教大師」 へ勅命し彫刻された尊像といわれ ている	下着祈願; 「お百度」を踏 み護符を頂く	釈迦堂	一樹山宗 柏寺	東京都新宿 区榎町	日蓮宗	日蓮聖 人	宗柏寺ホームページ: http://souhakuji.com/ 01_syodou/index.htm l#syakadou を参照
28	ぽっくり観 音 ぼけ 除け観音	聖観 音; 千手 観音	ぼけよ け・安楽 往生		「ぼけ除け」と 「ぽっくり往 生」のお札	境内	長谷山仙 光院	神奈川県逗 子市葉山町	高野山 真言宗	十一面 観音	仙光院ホームページ: http://www.senkouin .org/precinct/kannon -rokujizou.htm を参 照

29	ぼっくり大 師とぼけ 封じ観音	弘法 大師; 観音	ぼけ封じ と安楽往 生	「ぼけ封じさんでボケなくても寝た きりの長患いは嫌だ」という檀信徒 の声に応じて「ぼっくり大師」が建 てられた	足元の湧水を 柄杓にすくい 像の足にか け、ピンピンコ ロリの往生を 祈念;枕大師 を枕の下に敷 いて毎日寝る	境内	福泉寺	神奈川県横 浜市緑区長 津田町	高野山 真言宗	薬師如 来	福泉寺ホームページ: http://www.fukusenji.jp/engi.htm を参照
30	ぼっくり地 蔵	地藏	安楽往 生			境内	松林山禅 長寺	新潟県佐渡 市赤泊	真言宗 智山派	聖観世 音菩薩	禅長寺ホームページ: http://sadotemple.jp/zenchoji/02_midokoro.htm を参照
31	ぼっくり地 蔵	地藏	健康長 寿、迷惑 をかけず			境内	成就山管 明寺	新潟県佐渡 市上新穂	真言宗 智山派	不動明 王	管明寺ホームページ: http://www.kanmeiji.jp/daigomi.html を参

			安楽往生								照
32	ぴんころ 地蔵	地蔵	健康長 寿、安楽 往生	2003 年に全国から健康長寿のま ちとして注目される佐久市のシンボ ルとして、地元の「のざわ商店街」 により「成田山薬師寺」参道に建立	地蔵の体を触 りながら 1 つ お願い事を祈 る	山門前	成田山薬 師寺	長野県佐久 市野沢	真言宗 智山派	不動明 王	佐久市のざわ商店街振 興組合(ぴんころ地蔵) ホームページ: http://pinkoro.com を 参照
33	ピンピンコ ロリ地蔵	地蔵	健康長 寿、安楽 往生	「PPK(ピンピンコロリ)運動」発祥 の地であることに因んで建立		瑠璃寺 (天台宗) 境内	光明功德 佛	長野県高森 町大島山			光明功德佛ホームペー ジ: http://www.takamori .ne.jp/pinkoro/index. html を参照
34	下田のお 地蔵さん	地蔵		願掛け地蔵に老人達の「ぼっくり死 にたい」という願掛けが多くあり、い		公園内	玉諸公園	山梨県甲府 市向町			甲府市ホームページ: http://city.kofu.yama

				つしか「ぼっくり地蔵」と呼ばれるようになった							nashi.jp/senior/ohanashi/no3/shimoda.htmlを参照
35	ぴんころ 地蔵	地蔵	健康長 寿、安楽 往生	2007年7月、マロニエ下呂温泉 20周年記念事業として、命の道 (健康ロード)の建設とともに、弘法 山、飛騨信貴山・三坊様の精入祀 りを得て、地蔵尊と観音菩薩を建 設。ぴんころ地蔵尊の名のいわれ は、健康で長生きし、楽に大往生 が出来ることから		温泉地の 散策路	オテル・ ド・マロニ エ下呂温 泉	岐阜県下呂 市萩原町			下呂温泉ホームペー ジ: http://marronnier.info/pinkoro/index.html を参照
36	輔苦離往 生佛	釈迦 如来	延命天 寿、安楽 往生、身 体健全		「輔苦離往生 佛祈祷大祭 札」	輔苦離仏 堂	見性寺	静岡県葵区 新聞	曹洞宗	如意輪 観音	見性寺ホームページ: http://kenshoji.com/?page_id=67 を参照

37	便所の神 様	烏瑟 沙摩 明王	シモの世 話になら ず	不浄のものを浄化し清める徳を持 つ古代インドの神様から「便所の神 さま」として「下の世話にならず下半 身の健康を保つ」という御利益が求 められる	形だけしつら えられた便溜 めを「おまた ぎ」する、また 木で男女両 性の象徴を形 どったものを 「おさすり」す ると、いっそう 効果があると いわれている	寺の東司	明徳寺	静岡県伊豆 市市山	曹洞宗	釈迦如 来	木村博『『安楽死』の願 い』『死—仏教と民俗』 名著出版、1989:62- 64を参照
38	遠州ぼっ くりさま		安楽往 生		ぼっくり御祈 禱	子安延命 堂	実谷山極 楽寺(あじ さい寺)	静岡県周智 郡森町	曹洞宗	阿弥陀 如来	極楽寺ホームページ: http://www.ajisaider a.com/info.html を参 照

39		大聖 歡喜 双身 天	長生き、 長患いせ ず大往生	昔ある姥が足柄山聖天尊に祈願し、寝たきりになって下の世話を受けるような長患いせず大往生したいと腰の物を持参し堂主に祈祷してもらった。年月を経て姥の子供たちに聞いたら、「米寿の祝を経て大往生」という言い伝えから	「腰の物」祈願	本堂	足柄山聖 天堂	静岡県駿東 郡小山町竹 之下	曹洞宗	大聖歡 喜双身 天	木村博『『安楽死』の願 い』『死一仏教と民俗』 名著出版、1989:60- 61を参照
40		釈迦	長生き、 安楽往生		「嫁いらすパ ンツ」と「延寿 パンツ」	ぽっくり堂	岩戸山観 世音寺風 天洞	愛知県豊田 市足助町大 蔵	日蓮系 単立	聖観音	風天洞ホームページ： http://hutendou.jp/keidai/index.html を参 照
41	ぽっくり弘 法大師	弘法 大師	長生き、 長患いせ ず安楽往 生	呉服屋のおばあさんが弘法大師を篤く信仰し、死期を悟り、荒熊神社に弘法大師像のお守りを託してぽっくり安らかに往生を遂げたことか	「願掛けふる べのお鈴」を 頭上にかざし てお願いする	弘法の社	荒熊神社	愛知県南知 多町山海高 座		荒熊大 神	磯部宅成「ぽっくり弘法 大師と荒熊神社」『みな み』南知多町郷土研究 会、2004:73-74を参

				ら	といい						照
42	大隋求菩薩	与願 金剛	シモの 世話にな らず安楽 往生		七月七度詣 り;ポックリ祈 禱並びにしも の世話になら ない為の祈禱	薬師堂	弘法山遍 照院	愛知県知立 市弘法町弘 法山	真言宗 豊山派	弘法大 師	遍照院ホームページ: http://henjoin.com/guidance を参照
43	中風除け 寺	観音	中風除け	およそ1300年前、天平年間、行基 の開基と寺史に伝えられて以来、 この地で祈れば病はたちどころに 癒え、特に成人病予防、中風除け に靈験あらたかと信仰を集める	かぼちゃしる こ	本堂に 向かって 右の脇壇	性海山宝 樹院妙善 寺	愛知県幡豆 郡幡豆町	浄土 宗西山 深草派	阿弥陀 如来	妙善寺ホームページ: http://www.hazu-kanon.net を参照
44	石ボトケ (ぬれ仏)	自然 石	シモの病 封じ、婦	波打際に舟人や海女を守る地藏 で、潮が満ちてくると、裾の辺が波		志摩町御 座字西の		三重県志摩 市志摩町御			竹中淳「〈欲望の終着 駅〉全国ポックリ信仰案

			人病	に洗われることから		山の海岸 に		座			内』『婦人公論』中央公 論社、1986:232頁を 参照
45	転利(ころ り)観音(2 体)	千手 観音 聖観 音	長患い せず安楽 往生	古来より安産、眼病、転利に御利 益があると伝えられ、転利が“ころ り”に通じるから、ころり観音と呼ば れるようになった	三回参拝す ればご利益が ある	本堂	唐喜山赤 後寺	滋賀県長浜 市高月町	天台 宗	千手観 音と聖 観音	同上
46	“一願一 言地藏”	地藏 菩薩	安楽往生	唯一願を一言でお願いすればどん な事でも必ず叶えてくれると伝えら れ霊験あらたかな仏なので、安楽 ボックリの後生も叶えられる	一つの願いを 一言でお願い する	本堂に続 く石段の 左手	成相山成 相寺	京都府宮津 市成相寺	橋立真 言宗	聖観音 菩薩	成相寺ホームページ: http://www.nariaiji.jp/information/index.html を参照
47	那須与一 の墓		シモの世 話になら ず安楽往 生	当寺の本尊である阿弥陀如来さま を深く信仰し、その前で没したとい われ、また死んでいく時にスソの世 話がかかって「これは私の業だ、私	「床づれ」の 護符	境内	即成院	京都府京都 市東山区泉 涌寺山内町	真言宗 泉涌寺 派	阿弥陀 如来	木村博『『安楽死』の願 い』『死—仏教と民俗』 名著出版、1989:70・ 72を参照

				はこの病気で苦しんだのだから、 私一代でこの病気を無くすように私は 守護神となろう」といい残したことから							
48	庚申さま	青面 金剛	シモの世 話にならず 元気にすごす	9世紀に修験者の浄蔵法師が創建、昔から腰痛、神経痛、リュウマチなど諸病平癒のこんにやく封じが有名	下着類をもつてタレコ封じ 祈祷	本堂	大黒山金剛寺八坂 庚申堂	京都市東山区金園町	天台宗	青面金剛	金剛寺庚申堂ホームページ： http://www.geocities.jp/yasakakousinnndou/ を参照
49	那須与一 のお墓		シモの世 話にならず 安楽往生	死んでいく時にスソの世話がかかって「これは私の業だ、私はこの病気で苦しんだのだから、私一代でこの病気を無くすように私は守護神となろう」といい残したことから			那須与一堂	京都府亀岡市矢田町			木村博『『安楽死』の願い』『死—仏教と民俗』名著出版、1989:70・72を参照

50	紙衣仏		シモの世話にならず安楽往生	五百羅漢の一人で難病に苦しみな がら紙の衣を着て修行し除災無病 の利益をあたえようとの誓願をたて たといわれ、紙衣仏を念ずると身も 心も清浄になり宿願がかなえられる ことから、この仏の衣がえの式が行 われるが、そ願をかけた者が、その 古い衣を着せてもらうと、年をとって 重い病気にかかっても、人に下の 世話をかけないですむという	紙衣加持、紙 衣の雛形を受 けて、病人の 床の下にひそ かに敷く	万燈院 (紙衣堂)	四天王寺	大阪府大阪 市天王寺区 四天王寺	和宗		四天王寺ホームペー ジ: <a href="http://www.shitennoj
i.or.jp/map.html">http://www.shitennoj i.or.jp/map.html を参 照
51	ぼっくり尊		シモの世話にならずにぼっくり往生		下着を加持し てもらい身に つける	権現社の 横	三川山蔵 王大権現 社	兵庫県美方 郡香美町香 住区三川		蔵王権 現	香美町ホームページ: <a href="http://www.town.mik
ata-kami.lg.jp/www/c
ontents/1106811373
218/">http://www.town.mik ata-kami.lg.jp/www/c ontents/1106811373 218/ を参照

52	那須与一 大権現		長患いせ ずシモの 世話にな らず安楽 往生	京都の即成院から勧請、昔から「病 まずに逝ける」という効験があつて、 近郷近在の人々から信仰されてい る		寺の本堂 隣の小祠	瑞祥寺	兵庫県篠山 市井串	曹洞 宗		山中清次「那須与一の 伝承と信仰」『那須与一 の歴史・民俗的調査研 究』栃木県立博物館、1 991:124-127を参照
53	那須与一 公墳墓		安楽往生	重病にかかった与一が村人に看病 されながら臨終の時「我れ今日ま で皆々さまに長々厚き看病に預か り、そのご恩を報ぜず、ここに永き 別れをするには残念に思えど、時 来らば是非もなし。我れ死にたる 後、報恩謝徳のため、かならず諸 人にかかる難病に侵されぬよう守 護しつかわす」といい残したことか ら	晒し祈願； 祈祷済みの 晒しを下着に 縫いつけると 霊験あらたか とされる			兵庫県神戸 市須磨区妙 法寺町字円 満林 24			木村博『安楽死』の願 い『死—仏教と民俗』 名著出版、1989:65- 67を参照

54	「ぽっくり寺」	阿弥 陀如 来	無病息 災、延年 長寿、安 楽往生	源信が母の臨終に際し除魔の祈願をした浄衣を着せたところ、安らかに往生を遂げたことにちなみ、参詣するとポッキリと逝けると伝えられるようになった	肌着祈祷	本堂	清水山頭 光院吉田 寺	奈良県斑鳩 町小吉田	浄土宗	阿弥陀 如来	筆者検証
55	「ぽっくり寺」	阿弥 陀如 来	健康長 寿、安楽 往生	源信が母の臨終に際し除魔の祈願をした浄衣を着せ、一緒に念仏しながら安らかに往生を遂げたことにちなみ、参詣するとポッキリ逝けると伝えられるようになった	浄衣(晒し布) 祈祷を受け、 それを枕元に 置いたり、身 に付ける	本堂	阿日寺	奈良県香芝 市良福寺	浄土宗	阿弥陀 如来;大 日如来	筆者検証
56			長患いせ ず、シモ の世話に ならず往 生できる	江戸前期にこの地の郡奉行を務めていた吉弘統家が主君である郡山藩主本多政勝の没後、その菩提寺を弔うために建立した「位牌堂」で、いつしか安楽往生を願う人々	柱に抱きつ いて身体をこ するつける; 肌着祈願		傘堂	奈良県葛城 市新在家			竹中淳「〈欲望の終着 駅〉全国ポッキリ信仰案 内」『婦人公論』中央公 論社、1986:233頁を 参照

				が多くなっている							
57	ポックリ 寺		安楽往生	藩公はじめ奥方や側室等婦人方の 帰依篤く、家臣団の菩提寺として 栄えた。また、お参りすると苦しま ずに往生できる「ポックリ寺」として、 昔から有名である。			富中山法 泉寺	鳥取県鳥取 市立川町	顕本法 華宗	久遠実 成釈迦 牟尼仏 と宗祖 奠定の 大曼陀 羅	法泉寺ホームページ： http://www.hal.ne.jp/ housenji/ を参照
58	ぽっくり地 蔵	地藏	安楽往 生				東光山瑠 璃院福王 寺	岡山県真庭 市蒜山中福 田	真言宗 御室派	薬師如 来	福王寺ホームページ： http://www.fukuouji. com/fukuoujihpkeida i.html を参照

59	嫁いらず 観音	十一 面観 音	安産→嫁 に苦勞を かけず極 楽往生	観音さまが人々を苦しめた妖怪を 退治したことで、行基が十一面観 音像を彫った	祈祷を受けた 肌着を身に着 けることで御 利益があると いう	奥の院	嫁いらず 観音院	岡山県井原 市大江町	真言 宗	十一面 観音	鈴木岩弓「老いと宗教」 『岩波講座 宗教』7岩 波書店、2004:257-2 59を参照
60	嫁いらず 観音・ぼ け封じ観 音二体	観音	ボケ封じ、 安楽往生	薬師堂周辺に安置されている33 体の石像は徳川時代に観音信仰 に篤い豪商や豪農が寄進したも の、いつの頃からか老後の無病息 災と家族の手数を煩わすことなく、 極楽往生を叶えて下さる靈験あら たかな仏に至った	祈祷を受けた 肌着を身に着 ける	薬師堂周 辺の、竹 藪の丘の 小さな祠		山口県大島 郡周防大島 町久賀			周防大島町ホームペー ジ: http://www.town.suo-oshima.lg.jp/syoukokuankou/yomeirazukannon.html を参照
61	ぼっくり地 蔵	地藏	健康長 寿、大往 生	「保久利院」の名前からぼっくり信 仰とは因縁の深い寺で、昭和59年 春、弘法大師の入定1150年を記		本堂	保久利院 地福寺	徳島県板野 郡藍住町	高野山 真言宗	地藏	竹中淳「〈欲望の終着 駅〉全国ポツクリ信仰案 内」『婦人公論』中央公

				念して、「健康長寿」と「大往生祈願」を大々的に打ち出した							論社、1986:234頁を参照
62	与一夫妻のお墓		安楽往生	与一神社は、与一が隠住した所だといひ、与一夫婦の墓という宝塔が御神体となって祀られ、ポックリと死ぬという霊驗があつて近隣の年寄たちがお参りに来ているという			与一神社	徳島県名西郡石井町			山中清次「那須与一の伝承と信仰」『那須与一の歴史・民俗的調査研究』栃木県立博物館、1991:124頁を参照
63	保久俚大権現(鬼無のぼっくりさん)	自然石	安楽往生	あるおじいさんが朝晩この自然石に手を合わせ「ぼっくりあの世へいけますように」と祈ったところ、だれの厄介にもならず往生した話が村人に伝わり、ポックリ功德の伝説が残った			保久俚山安楽院	香川県高松市鬼無町鬼無			「悲しい流行・ぼっくり信仰」『毎日新聞』1972年5月10日

64	嫁楽観音	准胝 観世 音	長寿、 安楽往生	弘法大師が三日間こもって安楽往生の秘宝を伝えたという言われから	弘法大師御 相伝、安楽往生秘法の護符を背中に敷いて寝る	観音堂	宝珠山悲願院地蔵寺(「日本三大・長命安楽往生寺」)	香川県三豊市高瀬町	真言宗 善通寺派	地蔵;准胝観音	さぬき三十三観音霊場 ホームページ: http://www.sanuki33.jp/map/23/ を参照
65	ぼっくり結び観音	観音	健康長寿、寝込まずに安楽往生		結び札に名前を書いて観音さんの傘に結ぶ	本堂傍	亀老山高龍寺	愛媛県今治市吉海町名	真言宗 御室派	千手観音	高龍寺ホームページ: http://kouryuji.jp/ を参照
66	延命長寿 ほっこり往生老楽観音	観音	長寿、 安楽往生	昭和 58 年 10 月弘法大師の夢のお告げにより、ほっこり往生老楽観音菩薩が刻まれ、59 年 3 月に開眼、本堂に安置された。信仰すると長生きができ、死ぬときはほっこりと			西林山三蔵院浄土寺	愛媛県東温市下林	真言宗 醍醐派	大日 如来と 不動明王	四国三十六不動霊場 公式サイト http://sikoku36fudo.org/?page_id=139

				安らかに極楽往生できる							
67	“嫁いらず 地蔵”	地蔵	シモの世 話になら ず安楽往 生	現在の久留米市に江戸初期現当 二世の願いのもとに阿弥陀如来と 延命地蔵尊のお堂が建立された が、その靈験があらたかだったの で、嫁の手がいらない「嫁いらずの 地蔵尊」と呼ばれるようになった	下着祈願;祈 禱を受けた下 着類を身につ ける	地蔵堂	高野山高 野寺	福岡県朝倉 市菩提寺	高野山 真言宗	弘法大 師	甘木高野山高野寺ホ ームページ: http://www.bit-one.jp/koyazi/yome.htm を 参照
68	ぽっくり地 蔵;嫁いら ず観音	地蔵; 観音	シモの 世話にな らず安楽 往生			本堂前	高見山南 光院	熊本県人吉 市西間下町	高野山 真言宗	毘沙門 天王	南光院ホームページ: http://homepage2.nifty.com/nankouin/
69	ぽっくり寺	釈迦 如来	長患い せず安楽				金海山大 恩教寺釈	熊本県八代 市泉町柿迫	天台宗	釈迦 如来	佐々木幸恵「ツアー熊 本県泉村「ぽっくり寺」

			往生				迦院				の日本一長い石段」 『週刊新潮』新潮社、1 994:40頁を参照
70	ぽっくり天 狗	天狗	ぼけ封 じ、健康 長寿、安 楽往生	この「ぽっくり天狗さま」は、高知県 の山間部に在住の方から当神社に 寄贈されたもの。戦後間もない貧し いころ、旅の行商人が行き倒れに なり、それを助けた当家の先代の 主人はそのお礼にと行商人から 「天狗様」を頂いた。行商人は「毎 日朝晩、ホギホギと唱えてお祀りし てください。きっといいことがありま す」と言い残して旅立った。それか ら主人は毎日「ホギホギ」(宝来宝 来)と祀ったところ、病気がちだった	天狗の大きな 鼻を両手でさ すり、願いを 心に念じて 「ホギホギ」と 四回唱える	ぽっくり天 狗の社	宝来宝来 神社	熊本県阿蘇 郡南阿蘇村 河陰		御神体 は「当錢 岩」と呼 ばれる 巨岩	宝来宝来神社ホームペ ージ: http://hogihogi.theshop.jp/items/303432 を 参照

				<p>息子も元気になり、子宝にも恵まれ多くの孫に見守られながら百八歳をもって、大笑いしながら「ぽっくり」と大往生を遂げた。</p> <p>その息子が先日のテレビで当神社のことを知って、偶然にも「ホギホギ」と唱える同じお参りに感激し、「ぜひこの神社でお祈りしていただけますか」と寄贈を申し込んだ。</p> <p>そこで当神社は、このありがたいぽっくり天狗様をお祀りするために新しく神殿を建立する運びとなったという。</p>							
71	ぼけない 地蔵、ぼ	地蔵	ぼけず 寝つかず	<p>身代わりとして人生の心配事を引き受けていただきたいとの願いで、</p>		観音寺への石段の	八幡山命 水延命地	大分県竹田市寺町八幡			大分県観光情報公式サイト:

つくり地 蔵、寝つ かぬ地藏 の3体		大往生	近所の九十歳の女性が平成元年 に寄進		手前のお 堂	蔵尊	山			http://www.visit-oita. jp/spot/h_taketa0024 .html
-----------------------------	--	-----	-----------------------	--	-----------	----	---	--	--	---

第三章 ポックリ信仰の流行——『恍惚の人』を一例に

「超高齢」「大介護」時代を迎える時代において、もはや高齢者介護問題を避けて通ることはできない。介護という糸口によって、経済や政治などの社会問題が端的に露呈されるとともに、介護に関わる個人の価値観なども露わになる。その中で、「老人介護文学（小説）」という新しい文学ジャンルも誕生した。文学作品は、登場人物の心理や性格などの描写を通して、普段生活の場において、見えにくいながらも潜在化している問題を顕在化させることができる。特に「老人介護文学（小説）」であるからこそ、そこに反映されている老いや生と死に対する認識がより鮮明に反映されるのである。さらに、「老人介護文学」の誕生に先立つ作品とされる『恍惚の人』という小説が本研究の研究対象であるポックリ信仰の流行の契機とされるため、本章では、主に『恍惚の人』を入口として、その内容や刊行時代から分析を行い、いかにポックリ信仰の流行のきっかけとなったかを明らかにしたい。

1 老人介護文学（小説）

『上野千鶴子が文学を社会学する』という著書の中で、日本近代文学において、従来から書かれてきた老人文学がある他、老人介護文学というものもある⁴⁹と上野千鶴子が「老人介護文学」という概念を提出した。明確な定義はなされていないが、ただ小説というジャンルに限って、すなわち「介護小説」については、「加齢、事故、病気によって必要（生活・人生の質の確保のために不可欠）とされるケア・看護の場を描いた小説や、介護をめぐる発生する人間関係を描いた小説」[米村、佐々木編 2008: 17]と定義付けされている。それを踏まえて、老人介護文学とは、簡単に言うと、高齢者の介護に関わることを中心に描いた文学作品であると理解してよいであろう。

理論上、介護者の性別によって、介護は大きく「女性型」と「男性型」との2種類、さらに、「女性が女性を介護する」「女性が男性を介護する」「男性が女性を介護する」「男性が男性を介護する」の4種に分かれ、老人介護文学作品も以上のような形で展開されているのである。が、実際の介護現場では、近年になって、男性が介護することも多くなってきたが、また夫婦ともに親の介護をす

⁴⁹ 上野千鶴子『上野千鶴子が文学を社会学する』（朝日新聞社、2000）57頁を参照。

る場合もあるが、それも実は女性、すなわち妻の方がその主役で、やはり「女性型」、つまり女性を中心に介護者役を担当する、担当せざるをえないことが多いのが事実である。

例えば、真野さよの『黄昏記』（1990（1981））は、夫の13回忌を無事に終えた75歳の母がぼけ始め、52歳の娘によって介護されていたが、「脳軟化症」が進み入院して、やがて亡くなった話である。中に、次のような文章がある。

うちの姑は86まで元気に暮らして、お便所で知らんようになって、それが最期でしたんよ。村の人らがあやかりたいいうて、母の肌着を焼いて灰をなめされてもらいよりました...まあ羨ましい。わたしも毎日、神様仏様をお願いすることは、どうぞして家の者に厄介かけんと死なせて下さい、それだけです。〔真野 1990（1981）：65頁〕

また、テレビドラマや映画化もされた佐江衆一の『老熟家族』（1985）は、老人性認知症になった80代の親が50代の嫁に介護されたが、結局母が父に扼殺されたという話である。小説の中に、息子家族と一緒に暮らしている老夫婦が地域の神社や道路の清掃奉仕に積極的に参加して市長から表彰され、祝いの夕食の場で「これで、ばあさんといっしょにポックリ死ねたらこんな幸せはないよ」〔佐江 1985：36頁〕と父が話している。さらに、「病まわずにポックリ死にたいからね」〔同上 146頁〕「息子の家で長生きして死ねるのだから、わしら果報者だ」〔同上 5頁〕と老夫婦が自分自身の死について考えている。

1995年に発行された佐江衆一の『黄落』も老人介護を描く小説で、還暦を迎えた息子夫婦が毫碌した94歳の父と88歳の母の介護をするいわゆる「老々介護」の話である。喜の字の祝をすませてから母は「ポックリ死にたいねえ。長患いをしたら、トモアキと蒔子さんに迷惑をかけるものね」〔佐江 1995：103頁〕というようになった。さらにそろそろ高齢者の仲間入りする息子夫婦も、転んで大けがし、寝たきりになった母の看病をしながら、「何が長寿萬歳なものか。息子の私さえ忘れる母は、垂れ流しの寝たきりになった長生きするのか」と、「子供たちには、俺たちのような苦労はさせたくないな。ええ、絶対にさせないわ。あまり、長生きしないことだね。最後はおばあちゃ

まのようにすればいいのよ。最後の二、三週間だけのことを、いまから子供たちに頼んでおくか。病院ではああはいかないからね」と自分の死についても問いかけ、考えるようになった。

以上のような描写から、長い間高齢生活を過ごしてきた 80、90 代の年寄りも生きていながらも死を意識し、死の心構えの用意をして自ら死を受け容れようとしている姿勢が窺われる。ボケなどで寝たきりになって家族に迷惑をかけるような長患いをせずに、ポックリ死にたいという高齢者の切実な声が胸に響く。そのように、作品が伝わるメッセージが浮き彫りになって、読者の人々に読み取られるのである。

2 『恍惚の人』

そういった老人介護文学の先駆けとされるのが有吉佐和子の『恍惚の人』である。1972 年 6 月に、『恍惚の人』が純文学書き下ろし特別作品として新潮社から出版され、爆発的な注目を集めるようになって、6 ヶ月で 140 万部のベストセラーとなった。さらに、翌 1973 年に、森繁久彌主演で映画化され、1990 年、1999 年、2006 年三回にもわたってテレビドラマ化されたほどの大人気ぶりを見せ、その後発行された文庫本は今でも売れ続けている。この本は、「人々が、痴呆の老人の問題、その家族介護の限界、さらには自分たちの老後の生活のことなどを考えるに当たって、『教科書』の役割を果たした」[森 1972 (2004) : 431 頁] と評価されている。

前述で述べているように、ポックリ信仰は『恍惚の人』の大ヒットを機に、流行りだしたとされるが、いったいいかなる経緯を通じて、人気を呼んだか、その過程の中に、『恍惚の人』はいかなる役割を果たしたかについては、いまだに十分に検討されていないままであるため、以下ではそれを明らかにしていきたい。

3 『恍惚の人』とポックリ信仰の流行

3-1 作品内容から

『恍惚の人』は、40 代の夫婦である立花信利・立花昭子が 84 歳の認知症の父・立花茂造を介護する状況を描く物語である。昭子は法律事務所で働き、信利は商社に務めるサラリーマンであり、

一人息子の敏は大学受験に励む高校2年生という舞台設定であり、これに登場するのが姑の死をきっかけに認知症の症状が現れるようになった「恍惚」の舅—茂造である。以下では、この小説の内容から関連がある箇所を抽出し、登場人物の会話や心理描写からポックリ死に対しての考え方を考察する。

(1) 登場人物の一人である昭子の姑が美容院から帰ってきて家に辿り着いたところ、突然死んでしまったことに対して、昭子および昭子の義理の姉（光子）は以下のような反応を示している。

「光子さんがね、私の兄嫁ですけど、うちのお姑さんのこと理想的な死に方だって言ってくれたんですよ。最後まで健康だったし、誰にも迷惑かけなかったし、皆に惜しまれるしって〈中略〉私も死ぬときはお姑さんにあやかりたいわ。美容院で最後の身だしなみをしたなんて、美しいわよ、本当に。」[有吉 1972 : 52 頁]

「75 だったそうだね。病みつかずに亡くなられたのは御当人も周りの者も幸せというものだよ。」[同上 : 69 頁]

(2) 老人クラブで90歳の一人のお爺さんが碁を打っている途中、碁盤の前にじっと動かなくなり、静かに前のめって顔を白黒の石の上に伏し亡くなったことに対して、人々は以下のような反応を示している。

「まあ齢に不足はないからねえ。勝負に勝って死んだんだから極楽往生ですな。あやかりたいものですね」

「まあ90まで病知らずで、患いつかずに死ねるなんて、幸せなひとでしたねえ」

「好きなことをしていて、その最中にねえ」

「勝ったんでしょう。勝って死んだんじゃ思い残すことは何もありませんよ、きっと」

「羨ましいわねえ。あやかりたいわ」[同上 : 173 頁]。

「ああ、90なら思い残りがいないでしょうよ。病気にならなくて幸せな人でしたねえ。羨まし

いこと」[同上：174 頁]。

架空の内容と言っても、当時の人々の心の声を反映しているところがある。「最後まで健康で、誰にも迷惑かけなく」、「75 で病みつかずに」、「90 まで病知らずで、患いつかずに」死ぬるのが「幸せというものだ」「極楽往生だ」「羨ましい、あやかりたい」といった話は、言い換えれば、最期まで長患いせず元気に生きてから苦しみなくポックリ死ぬのが望みで、共通の願いであることがよく伝わってくる。

これに対して、そのように死ぬことができない場合は、以下のような反応が見られる。

(1) ある僧侶の父が 79 歳で全身不随、もう 3 年間寝たきり状態になっており、看護婦をつけてずっと流動食で生きている。それに対して息子は以下のように話している。

「こうして亡くなられた方を見ると羨ましいですよ。親不孝を言うようですが、親爺もきっと羨ましいと思ってるだろうと思うんですよ。僕の親爺のようになると長生きも楽じゃないですよ。医者とはあと十年は確実に保つと言ってますがね」[同上：36 頁]。

(2) 認知症になって自分の下の始末までわからなくなっている茂造を見て、息子夫婦は以下のような話を交わしている。

「停年と同時にころりと死ぬのが男には理想じゃないのかな。老人クラブで唄ったり踊ったりというのは僕にも出来そうにないからな。復員してきたときのことを思い出すよ」

「どうして」

「あのときはもう死ぬ心配はなくなったという解放感があって、生きるってことは素晴らしいと思っていたんだかね、親爺を見ているとああなる前に死にたいものだと思うからね、寿命が伸びるというのも妙なものだよ。みんなが死ななくて、齢をとる一方だという世界を想像すると寒くなってくる」[同上：118 頁]。

さらに、茂造と同じ老人クラブに通っている年寄りたちも以下のような反応を見せている。

「まあ昭子さん、人間もあんなっちゃおしまいですよ。〈中略〉あんなにぶっこわれるまでには死にたいもんだって皆が言うようになりましてね」〔同上：146 頁〕。

つまり、介護を必要とされる老人、とりわけ茂造のように、人にシモの世話までを受けながら亡くなったことを直面に際して、やはりそのように死んでいきたくないという気持ちが強くなり、そうなる前に死にたいという本心が窺える。

このように、嫁を中心とした家族が認知症の父を介護する状況やそれをめぐって発生する人間関係の生き生きとした描写が、当時の読者、とりわけ主人公と同年配にある中高年世代の心を強く打ち、共感を引き起こした。小説の内容を身近な家族や自分の老いの現実と重ね合わせて、現に抱えている「老人問題」、また、当然将来抱えることになる「老後問題」をそれぞれ真剣に考えるようになり、一般国民に「老人問題」への関心を広めた。その関心度の高さから「恍惚」が当時の流行語にもなり、社会現象になったほど大きな反響を呼んだ。これは辞書の中における「恍惚」の解説からも覗ける。『広辞苑』の初版（1955 年発行）と第 2 版（1976 年発行）では、「①物事に心を奪われて、うっとりするさま②ほのかで分明でないさま」とあったが、『広辞苑』第 3 版（1983 年発行）から最新の第 6 版（2008 年発行）まででは、「①物事に心を奪われて、うっとりするさま②ぼんやりしてはっきりしないさま。老人などの衰弱した精神状態にいう」と老人への言及を足した解釈に変わった。この変化はまさにこの小説の影響からきたものではないかと推測できる。

また、前で論じたように、昭子の姑は健康で長寿な生活ができ、最期に誰にも迷惑をかけず亡くなったのに対して、舅（茂造）のほうは、老後認知症になってしまって人にシモの世話まで受けるようになりながら亡くなったというまっ逆な老後及び死に方に対する「羨ましい」と「なりたくない」という異なる周囲の反応を通じて、人々がいわゆる「ポックリ死」を改めて考えるようになった。それまで、ポックリ死は、突如して死にゆくさま、「急死」「即死」など意味的にあまり違いがないが、どちらかというとネガティブなイメージが帯びており、拒否反応が示されることが多かつ

た。なぜそのようになったかという点、恐らく「ぽっくり病」と連想させるからかもしれない。『日本国語大辞典』では、「ぽっくり病」が「健康な日常生活を送っていた者が、ある日突然、原因不明のまま急死する病気。20～30代の男性に多い」と解釈されている。特に「20～30代の男性に多い」という点に注目したい。つまり、若者の中で「ぽっくり病」の発生によって死ぬことが多いわけである。したがって、ポッキリ死は、ぽっくり病で若いうちに急に死んでしまうことを指していることから暗いイメージが帯びたのである。確かに、若きして死ぬのは甚だしい残念なことであるが、しかしながら、90歳まで長生きして最期まで健康で亡くなるポッキリ死はどうも前者とは異質なもので、齢に不足がないから、まさに「大往生」なので、悲しいというよりもむしろ「羨ましい」「あやかりたい」気持ちになるわけで、「ポッキリ死」に対して新たな認識がなされた。この認識の変化は、毎年の最新語、時事語や流行語など生まれたての、時代色の豊かな用語を幅広く収録している『現代用語の基礎知識』からも窺われる。1976年までは、医学用語として「ぽっくり病」しか編入されていなかったが、1978年から社会風俗用語の部門に、「ぽっくり寺」が収録されるようになり、「病気で寝たきり老人になって長々と家族に迷惑をかけるのはたまらない。死ぬ時にはまわりの迷惑にならぬようポッキリと死にたい願う老人が多いが、それに応じてポッキリと苦しみなく、あの世へゆかせる功德のある寺というのが全国に数か所現れ、お参りのおじいさん、おばあさんでにぎわっている。人よんで“ぽっくり寺”」[入江 1978: 962]と解説されている。

つまり、この小説を通して、「ポッキリ死」が再認識され、従来のネガティブで暗いイメージのため敬遠されていたことから、意味の転換が行われ、めでたいことで多くの人、特に高齢者に願われるポッキリ往生の意味合いが含まれるようになったのである。

3-2 刊行時代から

3-2-1 宗教背景

藤井正雄(1980)によると、戦後「新興宗教」ブームと、回向寺や祈祷寺の復活と、霊場ブームといった宗教的な動きがあったとされる。敗戦の精神的ショックと厳しい経済状況の下で、日本全土が社会不安に包まれていた。そうした中で、「お助け爺さん」「踊る宗教」「御光さま」など雨後の

竹の子のように生まれた一連の新興宗教が名乗りをあげ、新聞や雑誌やラジオを賑わせることとなった。また、日本経済が復興期に向かうことに伴い、既成教団もよみがえった。これまですっかり根を下ろした葬祭の機能をそのまま存続させる一方、家業や人生の進路といった将来の不安な部分の緊張を解消し、心の安らぎの場を提供し続けてきたという回向寺と祈祷寺の復活が見られ、大いに信者を集めた。こういった社寺の復活は、実にマスコミの脚光を浴びたことからできたことと言わざるをえない。その中でも、特に放送番組や雑誌の記事やコラムの一つとしてこぞって取り上げたのが、有名社寺の年中行事や祭り、また珍しい社寺の紹介であった。例えば、これまでも一般大衆の信仰を集めてきた西国、坂東、秩父などの観音霊場巡りや弘法大師信仰の「八十八ヶ所巡り」などの巡礼が人気を呼んでおり、ブームまでとなったわけである⁵⁰。

3-2-2 社会背景

『恍惚の人』は1972年に刊行され、爆発的な人気を呼び、ベストセラーとなったが、ポックリ信仰も1970年代から流行りだして盛んになったとされる。では、その頃は一体いかなる時代であるか、当時の社会状況はポックリ信仰の流行にいかなる影響を与えたかといったことが問題になってくる。以下では、それらを明らかにしていきたい。

①高齢化社会に突入

死亡率の低下や少子化の進行で、1970年、日本は高齢化率が7%を超え、前例のない速さで国連の定める「高齢化社会」に突入した。これに伴い高齢者世帯も大幅な増加を示し、昭和46(1971)年に137万世帯となり、全世帯の4.4%を占めている。その中で、昭和45(1970)年の厚生行政基礎調査によれば、65歳以上のひとり暮らし老人は、全国で約48万人と推計される。

⁵⁰ 藤井正雄「民衆信仰と戦後仏教の歩み」『現代仏教を知る大事典』（金花舎、1980）32-34頁を参照。

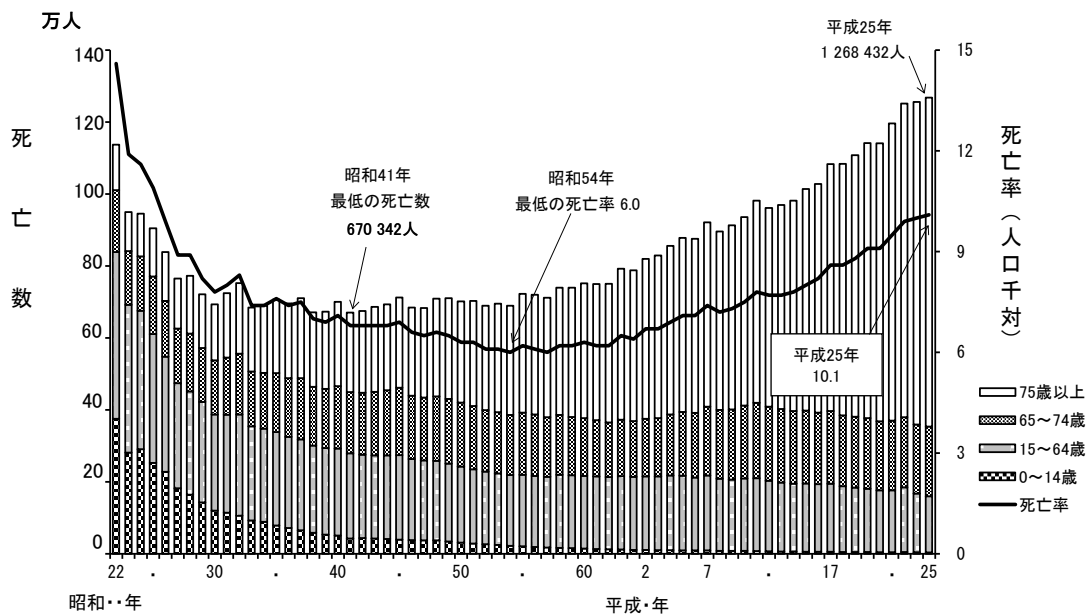


図 3-3-1 死亡数及び死亡率の年次推移（厚生労働省人口動態統計による）

一方、図 3-3-1 の死亡率を見れば、昭和 50 年代から事情が大きく変わっている。14 歳以下の死亡数は急激に減少し、わずかな数を占めているのに対して 65 歳以上、特に 75 歳以上の死者が大幅に増加し、相当な割合を占めていることが注目されよう。つまり、昔から言われてきた「老少不定」という言葉はもう適用できなくなり、死は老いを経た後に迎える現象であり、老いというのは死を迎えるための通過点として位置づけられているということができよう⁵¹。しかも、昭和 44 (1969) 年の簡易生命表からみれば、当時 65 歳に達した男の平均余命は 12.5 年、女は 15.5 年となっており、実際に高齢に達した人は平均寿命よりまだかなり長く生きのびることができるということである。したがって、それぞれ自分の老い、老後についていろいろ考え、悩まざるをえなくなるのである。

一方、歳が伸びる長生きすることは、本来喜ぶべきことであるが、その反面、高齢による心身機能の低下は人間にとって不可避のものであり、健康の問題は老人の最大の関心事であるといえよう。昭和 44 (1969) 年の「老後の生活に関する世論調査」で「高齢者」が日常何を心配しているかに

⁵¹ 鈴木岩弓「老いと宗教」池上良正ほか編『岩波講座宗教第 7 巻 生命』（岩波書店、2004）245 頁を参照。

についての意識調査の結果によると、60歳以上の人の老後の生活上の悩みは「健康上のこと」がもっとも心配されているということである。実際昭和43（1968）年の居宅寝たきり老人実態調査によれば、70歳以上の居宅寝たきり老人の数は約20万人で、さらに昭和46（1971）年の人口動態社会経済面調査では、70歳以上の者の約4人に1人が病弱又は寝たきりとなっていることがわかった⁵²。そのように、「恍惚」の高齢者、「寝たきり老人」などを抱える家庭が多くなり、高齢者問題の比重が増加することも意味する。そのため、従来家庭内の問題として、あまり目立たない状態で扱われてきた高齢者問題が、高度経済成長の進行の中で、社会問題としての性格をだんだんと強くしていった⁵³。

表3-3-1 1970年代高齢者福祉に関する出来事（筆者作成）⁵⁴

年次	高齢者福祉に関する出来事
1970年	『厚生白書—高齢者問題をとらえつつ』
1971年3月11日	厚生省高齢者対策プロジェクトチーム発足
1973年1月1日	老人福祉法一部改正施行（老人医療費無料化）福祉元年
1973年9月15日	シルバークロスタ、国電中央線に登場
1975年6月13日	国民年金法改正（高齢福祉年金引き上げ、所得制限緩和）
1976年1月20日	安楽死協会（現、尊厳死協会）設立
1976年8月30日	高齢者福祉協会発足
1979年6月15日	自民党「家庭基盤の充実に係る対策要綱」を発表、「日本型福祉社会」を目指す
1979年12月21日	総理府、初の『高齢者白書—高齢者問題の現状』を発表

⁵² 『厚生白書』（昭和48年版）http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1973/dl/13.pdf を閲覧、2014年5月27日。

⁵³ 森幹郎『『恍惚の人』解説』有吉佐和子著『恍惚の人』（新潮社、1982（2004））434頁を参照。

⁵⁴ 久武綾子ほか『家族データブック』有斐閣、1997を参照。

表 3-3-1 のように、当時それに応えるために、様々な対策が探られたが、まだまだ不足で、高齢者の生活を十分保障できるまでに成熟していないのが実状である。当時の高齢者福祉状況について、「はっきり分ったのは、今の日本が老人福祉では非常に遅れていて、人口の老齢化に見合う対策は、まだ何もとられていないということだけだった」[有吉 1972:229]と主人公の昭子が語っている。小説とはいえ、時代の細部を忠実に伝えているからこそ、読者の共感を得られるのではないかと信じられる。このように、高齢化の進みに伴う高齢者問題が深刻になっていく一方で、それに見合う対策が十分でないため、いつかわが身に起こるかもしれない「恍惚」症状や寝たきりへの恐れなど老後への心配や不安が生まれたのである。

②家族構成の変化

『恍惚の人』は、共働きの夫婦、ひとり息子、別棟に住む親という舞台設定で物語が始まるわけで、そこから当時の家族構成の変化が窺える。戦後の民法改正により、従来の「家」制度が、夫婦と子供を基盤とする家族制度に移行し、核家族世帯が増加している。その結果、孫の祖父母に対する疎遠の感覚が強くなる。昭和 45（1970）年の「老人実態調査」によると、ひとり暮らし老人の 60%は淋しさを訴え、22%は介助が必要であるにもかかわらず誰もいない状態で、9.2%は子供との接触がない⁵⁵ということで、その生活実態が浮き彫りになったのである。つまり、急速な科学技術の進歩の結果、古くから受け継がれてきた伝統的なものが陳腐化してしまい、老人の知恵を活かす余地がなくなり、老人軽視の傾向が強まった結果、高齢者は邪魔者として排除され、社会的孤立な状態に立たされるのである。もちろん、人それぞれの事情があり、個人差があることは当然であるが、高齢者は経済的にも精神的にも満たされていないのが実状である。

⁵⁵ 『厚生白書』（昭和 45 年版）を参照。

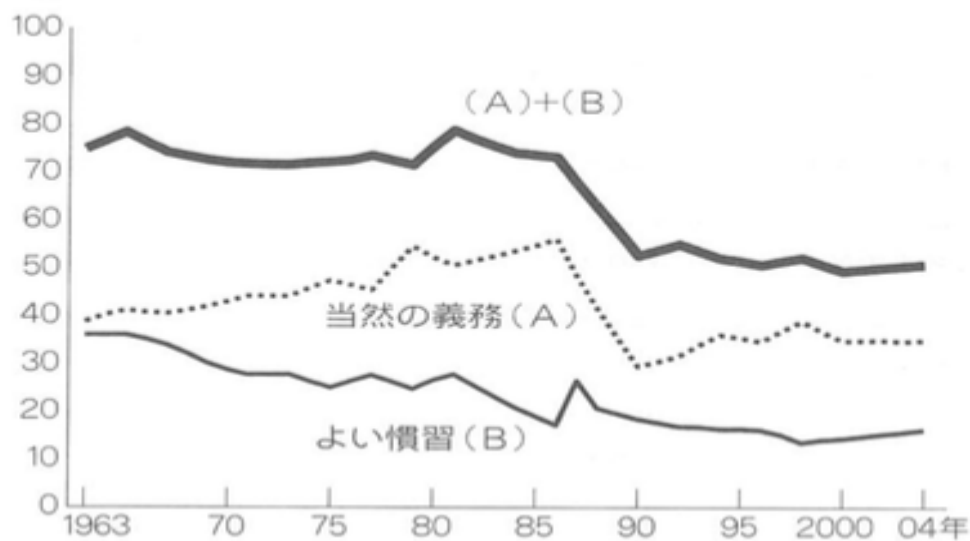


図 3-3-2 老親扶養観の変化⁵⁶

一方、高齢化と家族制度の変化により、扶養に関する考え方も変わりつつある。図 3-3-2 で示されているように、1970 年代まで老親扶養に対しては、まだ「当然の義務」あるいは「よい慣習」という考え方が根強く見られ、8 割近くを占めていることがわかる。実際、65 歳以上の者で生計を主として子供の扶養に頼っている者は昭和 32 (1957) 年 77%、昭和 38 (1963) 年 65%、昭和 43 (1968) 年 57%⁵⁷と減少していく傾向が見られるものの、まだ半分以上子供に頼っていることがわかる。さらに、65 歳以上要介護の高齢者もおおよそ 9 割が嫁、配偶者、あるいは子によってその面倒を見られている。その中で、嫁が看護している場合は半数近くを占めている⁵⁸。つまり、当時は「いわゆる『日本型福祉社会』の政策のもとで、家族（女性）を福祉の受け皿として位置づける高齢者の在宅支援が進行していた時代である」[柳谷 2011 : 4 頁]。親の介護くらいは子供がするのは当たり前で、老人施設などに入れるのは「世間体が悪い」と思われるため、やむを得ず家族に頼って介護することが少なくなかったのである。それに、家族介護と言っても、特に女性に担われることが多かったと言えよう。それがまた家庭内にトラブルを起こしかねないが、もし自分の娘であれば、

⁵⁶ 黒田俊夫「老親扶養をめぐる」毎日新聞社人口問題調査会編『超少子化時代の家族意識—第 1 回人口・家族・世代世論調査報告書—』(毎日新聞社、2005) 304-309 頁を参照。

⁵⁷ 同上。

⁵⁸ 『厚生白書』(昭和 45 年版) を参照。

まだましであるが、嫁になると、つまり嫁に介護してもらわなければならないと、姑にとってはこれほど嫌なことはないと思われる。「嫁姑問題」は永遠の課題と言っても過言ではないほど家庭内の難問である。今日はその状況が大きく変わっているかもしれないが、1970年代はまだ嫁姑問題が深刻であり、ただでさえ円満ではない関係なのに、認知症、あるいは寝たきりになって、嫁にシモの世話までになると、まさに尊厳が保たれずきわめて惨めなことであると思う姑は少なくなかろう。そうならないように、いわゆる「嫁いらず観音」⁵⁹という異色の信仰対象が生まれたのではないかと考えられる。つまり、嫁に迷惑をかけず、特にシモの世話で嫁の手を煩わすことなく元気に過ごして死んでいけるように観音に祈願するのである。

また、女性が介護の主役ということから、男女役割分担意識の問題（特に夫婦共働きの場合）も浮き彫りになる。高学歴化や職場進出が盛んになり、自己犠牲よりも自己実現を願う女性が増えるにつれて、主婦一人の肩に介護の重荷がかかることへの不満が強まってきた。『恍惚の人』も当時まだ珍しい、夫婦共働きという設定で、女性主人公は一人前の頼もしい存在として法律事務所に通いながらの介護が続いたわけである。商社マンの夫には全く力が借りられず、献身的に一人で舅の介護をやってきた。文学作品なので理想的な話ができるが、実際はこの小説をきっかけに、それまで黙って介護に携わってきた女性たちが一斉に発言し始め、それまでくすぶっていた女性の不満感に火を付けたのが『恍惚の人』であるとされる⁶⁰。

介護というのは、労力や時間、金が限りなくかかるもので、時が経つにつれて誰でも厭きるし、嫌になるのは理解できなくもないことである。「倒れて末 60 日」と言われるように、たとえ肉親であつても 2 ヶ月も看護を続ければ疎ましくなる。したがって、介護の問題は、嫁姑関係だけでなく、夫婦関係、さらにいうと、孫までに影響を与えることもある⁶¹。ゆえに、家庭に高齢者を抱えると、ことに介護の要る高齢者を抱えと、仕方なく家族の誰かが犠牲になるため、「親孝行」と「家庭崩

⁵⁹ 岡山県井原市大江町の「嫁いらず観音院」がその一つであり、信仰対象は十一面観音で、通称「嫁いらず観音」、ここに参詣に来て「下着祈願」を行うと、下の世話で嫁の手を煩わすことなく安楽往生ができると考えられ、非常に人気があるとされる（鈴木岩弓「老いと宗教」池上良正ほか編『岩波講座 宗教7』岩波書店、2004：257-258 頁を参照）。

⁶⁰ 袖井孝子「老年文学と老人の生活」渡辺勝夫編『群像』（講談社、1990）279 頁を参照。

⁶¹ 1960年代、「バシ抜き」は結婚相手の条件の一つであったという。バシ抜き、ことに介護が必要とされるバシ抜きだとすれば、孫の縁談に響くことがあると言われる。

壊」とのバランスをどうやって取るのかを考えさせる契機にもなる。

以上のように、『恍惚の人』が刊行された 1970 年代は高齢者問題に限っても頗る意味がある時代であった。高齢化や核家族化の進行に伴うライフスタイルの変化は、自らの人生設計を問い直すことにも及んだ。大正期は家庭を築くため一生懸命に努力を続けてようやく一息ついたところで、夫婦前後して一生を終えていたのであるが、現在は長い老後を生きるように変わったのである。老後の長期化が、従来の人生設計そのものを自らの死を意識した上で考え直すことにさせ、ポックリ寺に安らかな死を祈願する流行を招くことに拍車をかけたのではないかと考えられる。

さらに、無視できない要因の一つはマスメディアの影響である。当時、『恍惚の人』の大ヒットで、人々が「老い」への関心が高まり、老人問題を考える特集が新聞や雑誌などによく組まれていた。そんな中で、ポックリ信仰という一見異色なものは、マスコミにとっても格好な素材で、信仰とともに各地にあるいわゆるポックリ寺が相次いで紹介されていた。それで、筆者は全国紙の『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』の記事データベースにそれぞれ「ぽっくり（ポックリ）」または「ころり（コロリ）」と検索をかけてみたが、ポックリ信仰関係の記事は 1970 年代以前ほとんど見当たらず、1970 年代から多く取り上げられるようになった。そこで、ブーム期でもあった 1970 年代のものを選り以下の表にまとめた。

表 3-3-2 1970 年代の新聞記事にみるポックリ信仰⁶²（筆者作成）

	新聞名	日付	見出し	関連内容
1	毎日新聞	1970.11.11	茶の間＝コロリ 観音	米沢・普門院の「コロリ観音」、老人たちが長患いして嫁や俵に迷惑をかけぬよう、コロリと死ぬよう、願をかける観音さま
2	毎日新聞	1972.5.10	悲しい流行・ぽっくり信仰	老人の「ぽっくりさま」参りは絶え間ない＝高松市鬼無町で

⁶² 『聞蔵（朝日新聞データベース）』（朝日新聞社）、『毎索（毎日新聞データベース）』（毎日新聞社）、『ヨミダス歴史館（読売新聞データベース）』（読売新聞社）を参照。

3	毎日新聞	1972.6.4	根深い老人の「ぽっくりさま」信仰	「ぽっくりさま」信仰—願をかけると、長患いせず、家族にも面倒をかけないで、ころりと往生させてくれるというもの。四国高松の「ぽっくりさま」のほか第二、第三の「ぽっくりさま」が現れた。どこも古くから伝わっているものだが、お年寄りたちの話を聞くと、そこには単に信心とは片付けられぬ問題が潜んでいた
4	毎日新聞	1972.6.14	女の気持＝ぽっくり死ねたら幸せ	眠ったような安らかな死だった両親にあやかって、死ぬ時は、苦しまず家族やまわりの人にも迷惑をかけずに、ぽっくりと死にたいと 62 歳の主婦からの投稿
5	朝日新聞	1972.11.4	ぽっくりさん	よくお参りしておけば、死ぬときは長患いをせず、息子や嫁に世話をかけずに、ぽっくり死ねる <u>『恍惚の人』の直接の影響かどうか、各地にある“ぽっくりさん”という名のお寺へのお参りが最近、急に増えた</u>
6	毎日新聞	1972.12.27	「ぽっくり様」その後—ご利益願い大繁盛	奈良・阿日寺と香川・大師寺におけるぽっくり祈願の盛況。高度福祉の掛け声と腹裏に、ぽっくり祈願に足を運ぶお年寄りが増えている現実
7	朝日新聞	1973.5.12	ポックリ寺人気上昇/切々と祈る安楽往生“軽労大国”のお年寄り	不治の病のとき、ことに下着をつけると、ポックリと安楽往生ができる。つまり、嫁などに、あの恥ずかしくて苦痛な下の世話をかけずにすむ <u>「これが恍惚の人ブームというのですやろうか」</u> と阿日寺の住職が示している
8	朝日新聞	1973.5.12	生と死	昔は「子供たちのためせめて 40 歳までは命をお与

	聞			えください」とひたすら祈ってきたが、現在は「死ぬときはあまり長く苦しませぬよう、ポックリと参られるよう」と変わり、安楽死願いを裏返せば「それは死を恐れるより長からん生を願う証拠とみるべきではないか」
9	朝日新聞	1973.5.16	「ポックリ寺」... 老母を思う	最近のポックリ寺の記事を読み、小さい時よく近くのポックリ地藏様へ「コロリと死ぬるようにしてくさだい」とお参りに行った母のことを思い出したとの投稿
10	読売新聞	1973年6月26日	南無.....安楽死 如来	安楽死信仰であるが、むろん死路を急いでいるわけではない。吉田寺、普門院、即成院など幾つかのポックリ寺を紹介し、その裏にある原因も探る
11	読売新聞	1973.8.28	よみうり寸評	いくら医療費を無料にしても、ひと思いに死ぬるよう祈る“ポックリさん”の信仰が、最近、ますます盛んである
12	朝日新聞	1974.9.15	願うは、ただ安らかな死/奈良の“ぽっくり寺”に集まる老人病苦、孤独に追われ/木魚に託す悲痛な訴え —“安楽死”	下の世話で家族に迷惑をかけたくない；恥ずかしい思いをする前にポックリ死にたいと祈る 奈良・吉田寺
13	読売新聞	1974.11.29	“ポックリ寺”参り	何の支障もなく、例えば「長患い」「シモの世話」など、按配よく死ぬるようにと信仰しているもの。 <u>それが“恍惚ブーム”の中で、あっという間に有名に</u>

				<p><u>なった。</u></p> <p>ポックリ信仰は、本当は生きたいのだが、“恍惚”の恐怖から逃れたいという心理が横たわっている</p>
14	読売新聞	1975.9.14	世話かけずポックリと	「私の老後の設計は、ある朝、ポックリこの世を去ることである」と 49 歳の主婦からの投稿
15	朝日新聞	1975.12.18	厳しい老後を商売のタネ/ポックリ寺ツアー大当たり、「夢の手伝い」業者/福祉関係者は「悲しい」	<p>参れば誰の世話にもならず、ポックリ死ねる、家族に迷惑をかけたくないし、自身も世話になりたくない、病んでから世話になるのはつらい</p> <p><u>47 年頃</u>、窓口に「ポックリ寺に行きたいんだが」といった相談がきっかけで“ポックリ寺ツアー”を企画したと旅行代理店の話</p>
16	朝日新聞	1975.12.25	ポックリ祈願	<p>俗称ぽっくり寺が依然大はやりだという。そこに参れば、誰の世話にもならず、ポックリ、安楽往生が遂げられる</p> <p><u>ポックリ寺信仰は今に始まったことではないが、最近のようにブームにまで高まったのは例の『恍惚の人』がベストセラーになってからのようだ</u></p>
17	読売新聞	1976.5.1	安楽死一ひそかな願い 死に方を選ぶ権利もあるのでは	<p>突然死であった母と、余命一年か一年半といわれたガンで亡くなった父という両親の死に方を比べ見、安楽死または死に方を選ぶ権利について語り、「ポックリ寺の繁盛が、長わづらいの不治の病人をかかえた家族の悲惨さを知りつくした結果であり、また役立たずの存在を荷厄介にする世相へのはかない抵抗の側面を持っている」</p>

18	毎日新聞	1976.7.17	宗教を現代に問う＝第8部・神なき時代－（182） 死・ぽっくり寺	奈良・阿日寺 明るく“迎え”を待つお年寄りたち、ぽっくり死ぬことだけを祈願するのではなく、生きている間は達者に長生きするように、つまり「生」と「死」にまたがる人生をまるごとそっくり面倒を見るといいうのである。
19	朝日新聞	1976.7.19	根強いブーム ぽっくり寺信仰/奈良と山形に実情を見る/「安楽往生」を願って	ぽっくり寺信仰、一言で言えば「長患いせず、ぽっくり死にたい」という願望こめたお寺参りだ
20	読売新聞	1976.9.17	よみうり寸評	飛行機自殺は、ぽっくり寺を連想させる。そこへ参れば、長患いもせず、ヨメや子供にシモの世話にもならず、ぽっくり極楽往生できるという寺が、方々で、お年寄りを集めている。恍惚の人となって生ける屍をさらすことを、死ぬことよりも恐れている、日本の老人の気持ちと境遇が生み出した日本的安楽死への願望だ。
21	読売新聞	1977.9.14	“ぽっくり寺”は語らいの場/お祈りの後はお茶/話せば心も落ち着く	「ぽっくり寺」＝長患いせずに死ぬるという言い伝えが古くからある寺で、一種の“安楽死信仰”。90%は6、70代の女性で、しかもその半数以上は未亡人だ
22	読売新聞	1978.1.22	心配です老後と死、「考える会」にどっと700人、	老後と死をテーマにした「安らか眠りのために」というジェロントロジー研究会が開いた公開シンポジウムにて、お年寄りが死をどう考え、どう対

			ポックリ願望、家族関係は...	処しているか、またどうあるべきかなどについて話している
23	朝日新聞	1978.3.6	ポックリ願望の本音/肉親の介護に限界を予感、奈良・吉田寺での調査	ポックリ願望の一番の理由は「人に迷惑をかけたくない」、さらに、迷惑をかけたくないことの本心は寝たきりになることそのものへの恐怖にあった
24	読売新聞	1978.5.7	腰巻寺、ポックリ寺が大繁盛	願わくば、世話にならずとすむように、信心すれば長患いもなく、「極楽浄土への結構なお参りができる」ということで、人間らしく人生を全うし、ある時突然、ポックリと死んでいくことを願う <u>『恍惚の人』の発表とともに、「吉田寺」への参詣者も「急激に一層増えてきた」と同山関係者の話</u>
25	読売新聞	1978.9.12	回帰への挑戦、裏返しーポックリ願望	「ポックリ往生寺」と呼ばれ、寝たきり老人にならず天寿が尽きた時ポックリ死ねるという利益がある。老人たちのポックリ願望は長寿願望、さらに、若くて健康な身体を求める回帰願望につながる

これらの記事を見ると、「ぽっくりさん」信仰、「ぽっくりさま」信仰、「ぽっくり寺」信仰、または「安楽死信仰」と称し、ポックリ信仰とはいかなるものかを説明する上に、当時まだ数少ない、いくつかのポックリ寺院を取り上げ、それらの場所や利益内容、参拝者像、祈祷方法など詳しく紹介し、情報提供の機能も果たしている。さらに、ポックリ寺の盛況の裏に、当時老人福祉状況の貧困や老人対策の遅れなど深刻な老人問題が関連していることも指摘されている。また、『恍惚の人』とポックリ信仰の流行との関係性について言及する記事も多く見られる。例えば表 2-3-2 の 1972

年 11 月 4 日付きの『朝日新聞』の「ぽっくりさん」と題する記事で、以下のように記されている。

有吉佐和子さんの小説『恍惚の人』には、老人性痴呆症のために、まったく“こわれてしまった”老人の姿が、なまなましく描かれている。年をとるのはしかたないとしても、ああはなりたくない、というのが、小説を読んだ人みんなの思いだろう。その直接の影響かどうか、各地にある“ぽっくりさん”という名のお寺へのお参りが最近、急にふえた。よくお参りしておけば、死ぬときは長わずらいをせず、息子や嫁に世話をかけずに、ぽっくり死ねるというのである。奈良県北葛城郡香芝町にある光明山阿日寺もそのひとつ。(中略) もうひとつ、大阪・四天王寺境内にある万灯院、通称「紙衣(かみこ)はん」(中略) どちらもご本尊が、安楽死を約束してくれるわけではない。ただ老人たちが、表向きのご利益を拡大解釈して、むりにもそう祈りたい気持ちが、なんともいえず気の毒である。(中略) このぽっくりさん信仰は、裏返せば、福祉の貧しさへの、老人のぎりぎりの抗議でもある。

そのほか、上記の記事の中にあった奈良県の阿日寺の住職も、「これが恍惚の人ブームというのはですやろか。ことしは多い日には七百人、八百人、それも東京や北海道、九州からですわ。以前は、大法要の日以外はほんのパラパラでしたのに」と 1973 年 5 月 12 日付きの『朝日新聞』の「ポックリ寺人気上昇」と題する記事中に述べている。さらに、1975 年 12 月 25 日付きの『朝日新聞』で「ポックリ祈願」と題し、「ポックリ寺信仰は今に始まったことではないが、最近のようにブームにまで高まったのは例の『恍惚の人』がベストセラーになってからのようだ」と指摘されている。1978 年 5 月 7 日付きの『読売新聞』で、「腰巻寺、ポックリ寺が大繁盛」と題して「作家・有吉佐和子さんが、小説『恍惚の人』を発表したのは 47 年でした。痴呆(ちほう)老人がテーマのこの作品は、ベストセラーとなり、老人対策を社会問題にまで発展させました。とともに、吉田寺さんへの参けいも、『急激に一層増えてきた』とは同山関係者の話です」とポックリ寺への参詣の急増と『恍惚の人』との関係性が指摘されている。

当時、これらの記事が大きな話題となって、人々がポックリ信仰へ大いに関心を寄せるようにな

り、全国津々浦々から引きも切らず高齢者がポックリ寺へ足を運び、一大ブームまでとなったのである。

以上、『恍惚の人』とポックリ信仰の流行との関係を考察してきた。信仰であれ何であれ、一つの事象の流行は、様々な複雑な要素が混じり入ってできたことは言うまでもない。その中に、当時日本社会は高齢化が顕在化し始め、高齢者問題がマスメディアに登場する機会が増えた中で、本格的に認知症高齢者及びその介護をめぐる様々な問題を取り上げたこの小説は、ポックリ信仰の流行化において、火付け役のように作用したのではないかと考えられる。

その内容からみると、認知症高齢者とその介護、女房に死なれた亭主の生活、男女役割分担意識、日本式葬儀の在り方、嫁舅（姑）問題、高齢者福祉、近隣・地域社会など家庭や社会問題など、多くの問題を提起し、高齢化社会に入った日本社会に老人対策を問いかけた作品である。小説とはいえ、きっと時代の細部を忠実に伝えているので、多くの読者の共感を引き起こし、老人問題への関心を広めた。人々が自分または身近の人の老後や死について改めて考えるようになった。

また、1970年代は高齢者問題において非常に意味のある時代でもあるという点にも留意しなければならない。1970年に「高齢化社会」に突入し、それに伴う核家族化により、独居高齢者が増加し、経済的にも精神的にも満たされない生活状態に陥りやすいため、老後への不安や心配が生じるのは極当たり前のことである。その不安や心配から、周りの者に誰にも迷惑をかけず、ポックリと死んでいけると切実に願う高齢者が増えるわけである。

そのポックリ願望が急増している中で、新聞やテレビなどがちょうど人々のニーズに応じて、ポックリ往生の願いを叶えてくれる神仏がある寺院を紹介し、一気に人気を呼んだ。多くの人がポックリ寺院へ殺到し、繁昌している様子を見せることになった。

本章では、『恍惚の人』という文学作品に注目することで、当時の「高齢化社会」における寝たきり高齢者や「恍惚」の高齢者などをめぐる高齢者問題を読み取り、その問題を背景にするポックリ信仰の流行化を明らかにしようとした。次章からは、現在ポックリ信仰がいかに展開しているか、参詣者が何を祈りに来るか、すなわちポックリ信仰の内実などの問題を、筆者が行なった調査結果を参照しながら分析していこう。

第四章 ポックリ信仰のメッカ——吉田寺

前章で述べているように、1972 年『恍惚の人』が大ヒットとなったことをきっかけに、ポックリ信仰が一気に人気を集め、「ぼっくり寺」が当時の流行語となったほど多くの団体や参拝者がポックリ寺院へ押しかけた。その中で、大いに取り上げられ、注目されたのが吉田寺のことで、今にはポックリ信仰のメッカともいうべき存在となった。前記の『日本民俗大辞典』と『日本民俗宗教辞典』の「ぼっくり信仰」の項目でも、「ぼっくり信仰で最も有名な寺院に、奈良県生駒郡の吉田寺がある」「奈良県生駒郡斑鳩町の吉田寺にお参りすることをぼっくり寺参りとして近在によく知られている」と、吉田寺が取り上げられ、その代表的な地位が窺える。

一方、吉田寺に関する先行研究は、ルポルタージュなどが多く見られるが、それを対象とする学術的研究は管見の限りほとんど見られない。その中で、老年心理学を専門とする井上勝也は早くも 1978 年に、吉田寺へ参詣に訪れる老人を対象に、参詣動機のアナケート調査を行なった⁶³。また、民俗学者の木村博は「安楽死をめぐる民俗」の中に、吉田寺のことに触れている⁶⁴。

そこで本章では、当寺に保存されている「御祈祷申込用紙」と「参拝申込書」を手掛かりに、参拝者像の分析を通して、吉田寺においてポックリ信仰が現在いかなる様相を呈しているかを探っていきたい。

1 清水山吉田寺について

1-1 周辺環境

吉田寺（キチデンジ）は、千古の歴史を秘めた日本古代文化発祥の地、斑鳩の里にある。この斑鳩の里は、法隆寺をはじめ、中宮寺、法輪寺、法起寺など、聖徳太子ゆかりの寺々が点在しており、伝来初期の仏教文化が華麗に開花した仏法興隆の地である。また、竜田神社をはじめ、斑鳩神社、素戔鳴神社、子守神社、八幡神社など、斑鳩町内における神社数は 16 社もある⁶⁵。このように、吉

⁶³ 井上勝也「ポックリ信仰の背景」『ジュリスト増刊総合特集 12 高齢化社会と老人問題』（有斐閣、1978）200-204 頁を参照。

⁶⁴ 木村博『「安楽死」をめぐる民俗』井之口章次編『葬送墓制研究集成第二巻 葬送儀礼』（名著出版、1979）169-175 頁；『死—仏教と民俗』（名著出版、1989）74-81 頁を参照。

⁶⁵ 斑鳩町史編集委員会『斑鳩町史』（斑鳩町役場、1963）472-473 頁を参照。

田寺は法隆寺と万葉の古歌で有名な竜田川の間あたりに、寺社の多彩さ、歴史の奥深さ、さらに周辺に郷愁を誘う田園風景が広がり、豊かな詩情を味わうことができる妙なる雰囲気が出る場所にひっそりと佇んでいる。

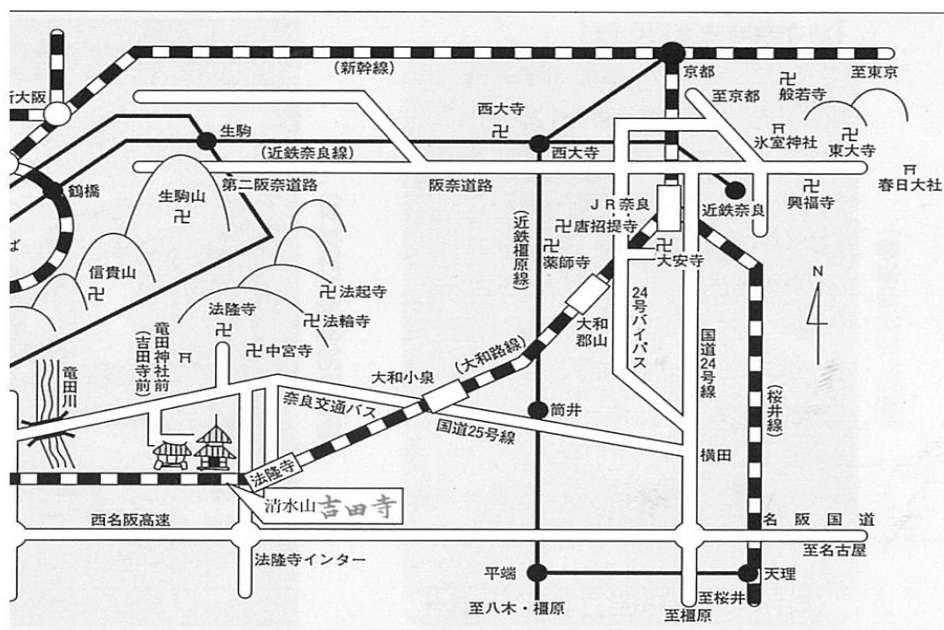


図 4-1-1 吉田寺の周辺地図（吉田寺パンフレットを参照）

1-2 概況

吉田寺は奈良県生駒郡斑鳩町小吉田にある浄土宗の寺であり、正式な名前は「清水山顕光院吉田寺」である。古代より矢田丘陵の南端の竹藪の丘の南裾から清水が湧き出し、人々はこの丘を清水山と呼び、山裾から流れ出る清水が、美味しい米を稔らせる田を吉田と呼んだとされる。ポックリ往生の利益で「ぽっくり往生の寺」「ぽっくり寺」「腰巻のお寺」とも呼ばれている。本尊は阿彌陀如来で、現住職は、平成10（1999）年に31世の住職となった山中真悦である。

その創建については『斑鳩町史』で、以下のような記述がある。

『恵心院源信僧都行実』によれば、当寺は天智天皇の勅建で妹の間人皇女（孝徳天后）の陵

寺であったところに、永延元年（988）に恵心僧都がこの地に来遊し、生身弥陀の出現を感じ一寺を創建したという。『吉田寺因縁』によれば元禄3（1690）年浄土宗に改まり無本寺であった。そののち中宮寺門跡慈眼院宮の信心浅からず、安永3（1774）年3月8日には梵鐘を寄進せられ、翌4年住持智霊律師のときに、鐘楼堂を建立した。文久3（1863）年住持旭隆が四方に勧奨して本堂を再建した。[斑鳩町史編集委員会 1963：528-529 頁]

法隆寺前の国道25号線を西へ、「竜田神社前」バス停で降り、国道沿いに「ぽっくり寺 吉田寺」という大きな左折の道案内板が目につく。左へ曲がって少し進むと、吉田寺が見えてくる。その前にも「ぽっくり往生の寺 清水山・吉田寺 腰シモ・スソの世話かからぬ肌着の御祈祷あり」と書かれている立体的な看板が立っている。また広い駐車場に、吉田寺の縁起などを記している看板が掲げられている。駐車場の横の放生池に沿う石畳の参道を進み、「極楽橋」を渡り、山門をくぐる。竹藪や樹木の生い茂った森に包まれた参道をぬけると、先に多宝塔が目につく。多宝塔は国の重要文化財で、本尊を刻んだ栗樹の切り株の跡に建立されたと伝えられる二層の塔である。室町時代に建造され、高さはおおよそ12メートルで、恵心僧都の父の菩提追善のためと伝えられる大日如来像が安置されている。平素は秘仏で拝観できないが、9月1日-2日及び11月1日-3日のみ特別開扉される。多宝塔の奥に本堂が建てられている。五間四面の堂内には、数十個の木魚がずらりと並んでおり、昔はお年寄りたちが「元気で長生きさせてほしい」「長寿で大往生を」などと書いた祈願文を木魚の中にひそかに奉納して帰っていったと同山関係者が話している。その奥に、本尊の丈六阿弥陀如来像が奉安されている。「大和おおぼとけ」の別名でも有名であり、千体仏の光背を持ち、上品上生印を結ぶ奈良県下最大の阿弥陀如来座像で、国の重要文化財に指定されている。この阿弥陀如来像は、恵心僧都が境内の栗樹より阿弥陀丈六の尊像を感得され、「相伝僧都。嘗過吉田寺、其地本八幡宮之旧趾也。偶得栗樹。大数十围。奇文燦非庸材因伐之刻丈六尊像。建堂塔安之。至今感応影響。（恵心院源信僧都行実より）」[荒井 1974：10 頁] とあるように、一刀三礼、念仏の中に造られたとされる。



写真 4-1-1 道の立て案内板
(2014 年 9 月 12 日筆者撮影)



写真 4-1-2 入口にある看板
(同左)



写真 4-1-3 吉田寺の縁起話
(同上)



写真 4-1-4 本堂
(同上)

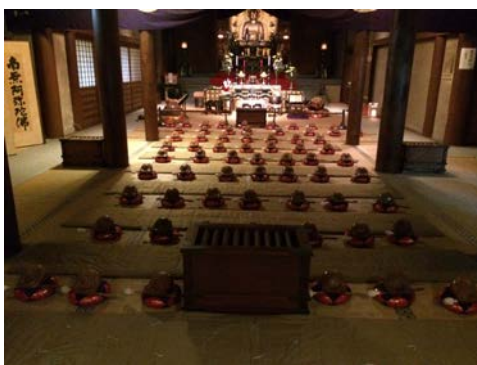


写真 4-1-5 本堂内
(同上)

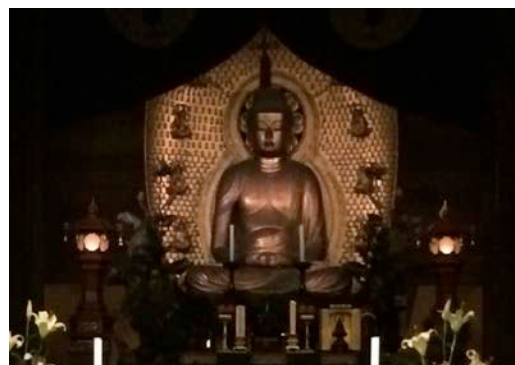


写真 4-1-6 本尊の阿彌陀如来
(同上)

2 吉田寺におけるポックリ信仰

2-1 ポックリ往生のいわれ

吉田寺におけるポックリ往生の利益については、『斑鳩町史』に「ここへ参拝すると死ぬ時に安らかに死ねるというので河内や近郷から老人が詣る。これを俗に『ほっくり往生』という」[斑鳩町史編集委員会 1963 : 434 頁]と記されている。また、「清水の霊泉があり万病に効くが特に腰より下やすその世話がからず、無病息災で長寿を全うして往生できるという。これを小吉田の温泉という」[同上]と記述されている。

吉田寺においてポックリ信仰と結びついた最も有力な縁起話は周知のように、恵心僧都源信の話である。孝心の篤かった恵心僧都が母の臨終の善知識となり、除魔の祈願をした浄衣を着せた。すると母は、苦しみもなく安らかに、称名念佛の中に往生の素懷を遂げた。その後、恵心僧都が母の三回忌追善と末世衆生救済のため、清水の森に生えていた栗の霊樹の中に、感得された本尊の阿弥陀如来像を造った。この由来より、本尊の前で祈祷を受けると、長く病み患うことなく、腰・下・スソの世話にならず延年天寿を全うし、最期臨終の時にも阿弥陀如来のお迎えが得られ、安楽往生できるという霊驗がある。

2-2 祈祷方法

ポックリ寺として名高い吉田寺では、先代住職から口伝えによって伝わってきたとされる祈祷の秘法がある。

祈祷は原則として毎日行われ、当日祈祷、別祈祷と特別祈祷の3種類がある。当日祈祷は、当日一度だけ祈祷をし、別祈祷は三日間繰り返す毎日祈祷をし、特別祈祷は一週間繰り返す毎日祈祷をするということである。また、参詣者の都合で直接参詣できない者は郵送やファックスによる祈祷も設けられている。さらに、『一度では足りない』『十度なら十分だ』ということはありません。重ねられるだけの功德を重ねていただければありがたいと思います。ただ一つの目安として一年に一度、三年ほど続けて祈祷を受ける参詣者が多いようです」と当寺の関係者が話した。また、山中住職は「ポックリ往生の御祈祷を受けて本当にすぐ往生するわけではない。死のため御祈祷を受ける

なんてとんでもない話、その裏返しは良い生きへの求めです」と指摘している。要するに、ポックリ往生の利益と言っても、死の前には健康で長生きしたいわけである。万が一病気になったら、治るのなら治ってほしいのが人情である。治らないと、せめて苦しみなくポックリ往生ができるように願うわけである。

祈祷を希望する場合は、申込用紙に名前と年齢（数え歳）と住所などを書き込み、新品のパンツなどの肌着類やタオルなどをもって祈祷する。昭和 40 年代まで肌着のほかにもよく腰巻を持ってきたということで、「腰巻寺」とも呼ばれた⁶⁶。持参した肌着の上に札をのせ、包み紙に水引をかけて本尊の阿弥陀如来の前に供えて祈祷を受ける。住職が祈祷希望者の名前を読みながら念仏を唱える。祈祷が済むと法話が始まる。祈祷の済んだものを身につけたり、あるいは布団の下に敷いたりすると、シモの世話にならずポックリ往生ができるということである。

3 吉田寺におけるポックリ信仰の展開

吉田寺において開基の恵心僧都の母親の臨終の伝説により古くからポックリ信仰があったが、限られた人が知るものであった。戦前までこの寺は、身寄りのない、あるいは身寄りを断ち切った尼僧のぽっくり往生の信仰が非常に深かったと言われる⁶⁷。ただ、「その存在さえ知る人はあまりいませんでした。かつてはごくごく限られた人々だけが、ぽっくり死を願って腰巻を持ってお参りをした、ひっそりと救いを求めに来る念仏道場でした」[山中 2001 : 102 頁]と住職が振り返っている。それが、1972 年に有吉佐和子の『恍惚の人』が発行された後、一気に変わった。「昭和 47 年に有吉佐和子さんの小説『恍惚の人』が引き金になって老人問題が世間でやかましくなりました。ちょうどその頃に、テレビの『ワイドサタデー』という番組で西川きよしさんやタレントさんが取材に来はって寺から生中継したんです。それがきっかけになって、全国からかなりの反響が来た」[同上]と住職が吉田寺においてポックリ信仰が盛んに展開されるようになったきっかけを明かした。前章で既に述べているように、『恍惚の人』における認知症老人をめぐる本人や家族の葛藤に関する生き生きとした描写が「古い」の現実を社会に突きつけ、当時の読者、とりわけ主人公と同年

⁶⁶ 山中真悦「ぽっくり寺和尚が教える『往生の心得』『新潮 45』20 巻 3 号（新潮社、2001）103 頁を参照。

⁶⁷ 同上。

配にある中高年世代の心を強く打ち、共感を引き起こした。「老人性痴呆になって家族や他人に迷惑をかけて死にたくない」、「ぼけて寝たきりになりたくない、なんとかポックリ死にたい」などの切実なポックリ願望が急増した。その中で、そのような素朴な願いを叶えてくれる神仏が存在することは、マスコミにとって非常に格好のネタで、テレビ番組だけでなく、新聞記事にも相次いで取り上げられる。特に、1973年5月12日付きの『朝日新聞』は母の日の特集で、吉田寺の写真とともに「ポックリ寺人気上昇」という見出しの記事が掲載され、縁起話から祈祷作法までその詳細が書かれている（資料一）。その内容は以下のよう、



資料一：「ポックリ寺人気上昇」（『朝日新聞』1973年5月12日）⁶⁸

（前略）最近とみに評判の高い二つのポックリ信仰の寺を奈良県下になぞねる。一つは斑鳩（いかるが）の里、法隆寺のほどちかくにある吉田（きちでん）寺である。国道25号沿いに大きな看板があり、それには「腰シモ、スソの世話かからぬ御祈祷あり」とある。コジュケイがしきりに鳴く境内に、同じ奈良県下から念仏講の団体が貸切りバス二台で着く。九割はおばあさ

⁶⁸ 朝日新聞記事データベース <http://database.asahi.com/library2/smendb/d-image-frameset-main.php> より、2014年5月27日に閲覧。

んだ。ツエをたよりの人もいる。(中略) 住職の説明によると、不治の病のときこの下着をつけると、ポックリと安楽往生ができる。つまり嫁などに、あの恥ずかしくて苦痛な下(しも)の世話をかけずにすむというのである。

この記事のすぐ隣に「生と死と」というタイトルの 65 歳の女性読者からの投稿が載せられている。「この子らのためにも、せめて四十歳までの命を与えてくださいませ」とひたすら神に祈った自分が、ここまで生きながらえ、子らも成人し、結婚し、四人の孫をみることになった現在は、「死にますときは、どうぞ余り長く苦しませぬよう、ポックリと参られますよう」とまたひたすら神さまにお願いし、祈りの内容も変わってきたことに気づいた。続き、「きけば世間にはポックリ信仰のお寺があつて、そこにお参りすればポックリ往生のご利益があるという。行ってみたい気もする」と語りながらも、「人間、平然と自らの死をおもひ、ひたすら安楽死を願うといえども、ひとたび裏返せば、それは死を恐れ、より長からん生を願う証拠とみるべきではないか。...与えられた今日の命を大切に、またとこぬこの一日の生命の火を思い切って燃やしてみよう」と自ら生と死について述べている。つまり、経済や医療技術の発展により、長生きはある程度遂げられるようになり、むしろこれ以上長生きすれば困る恐れがあるため、祈りの中身にも自然に変化が生じたわけである。

このようにテレビ番組と新聞記事といった媒体による映像化、文字化されたものは、これ以後の参詣者の範囲を大きく拡大する結果を生み、また他のマスコミへの情報提供といった効果もあげた。その後、マスコミによる報道が頻繁に行われ、米ニューズウィーク誌までに紹介されたこともある⁶⁹。膨大な量のため、ここで、筆者は 1970 年代から 1990 年代までに、全国紙の『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』に報道された吉田寺の記事を以下の表にまとめた。

⁶⁹ 「ザ・特集：びんころ地蔵、ポックリ大師、ころり観音…なぜ『PPK』ブーム？」『毎日新聞』、2011 年 2 月 17 日、17 頁を参照。

表 4-3-1 吉田寺に関する新聞記事（1970 年代-90 年代）⁷⁰

	新聞	見出し	日付
1	朝日新聞	ポックリ寺人気上昇	1973.5.12
2	読売新聞	南無...安楽死如来	1973.6.26
3	朝日新聞	願うは、ただ安らかな死/奈良の“ぽっくり寺”に集まる老人/病 苦、孤独に追われ/木魚に託す悲痛な訴え	1974.9.15
4	読売新聞	“ポックリ寺”参り	1974.11.29
5	読売新聞	“ポックリ寺”は語らいの場/お祈りの後はお茶/話せば心も落ち つく	1977.9.14
6	朝日新聞	寝たきりで生かされるより安楽死“ポックリ願望”の本音/奈 良・吉田寺での調査	1978.3.6
7	読売新聞	腰巻寺、ポックリ寺が大繁盛	1978.5.7
8	読売新聞	裏返し—ポックリ願望、回帰への挑戦	1978.9.12
9	朝日新聞	待機（輝けシルバー、高齢化社会への対応：4）	1987.10.8
10	毎日新聞	喜び、つらさも延びた/熟年ダンス、人気のクラブ/ひそやかに「ポ ックリ寺」	1990.8.5
11	朝日新聞	9月のこよみ	1991.9.1
12	毎日新聞	問われる「終末医療」/苦痛を伴う死期が迫る	1991.9.14
13	朝日新聞	宗教、文化あんない・28日/奈良	1992.8.28

⁷⁰ 「聞蔵」（朝日新聞記事データベース）、「ヨミダス歴史館」（読売新聞データベース）、「毎索」（毎日新聞データベース）より筆者作成。

14	朝日新聞	9月こよみ	1992.9.1
15	朝日新聞	宗教、文化あんない・27日/奈良	1992.11.27
16	朝日新聞	9月のこよみ	1993.9.1
17	朝日新聞	94年初もうでガイド	1993.12.31
18	朝日新聞	県内の初もうでガイド	1994.12.30
19	朝日新聞	若一光司（関西探検）奈良・吉田寺/ぽっくり往生の願い	1995.4.25
20	毎日新聞	吉田寺（斑鳩町小吉田）「安楽往生」祈る寺	1996.5.13
21	毎日新聞	9月のこよみ	1996.9.1
22	朝日新聞	ハトを逃し殺生を戒める/吉田寺で放生会	1996.9.2
23	毎日新聞	年末年始ガイド	1996.12.31
24	毎日新聞	9月のこよみ	1997.9.1
25	読売新聞	大往生とは「眠るような死」願望	1997.9.13
26	朝日新聞	初もうでガイド	1997.12.31
27	毎日新聞	年末年始ガイド	1997.12.31
28	朝日新聞	9月のこよみ	1998.9.1
29	毎日新聞	9月のこよみ	1998.9.1

30	読売新聞	ぽっくり寺の場所や由来	1998.10.27
31	朝日新聞	新年の願いは...初もうでガイド	1998.12.31
32	毎日新聞	年末年始ガイド	1998.12.31
33	朝日新聞	1972・ぽっくり寺/安楽な最期願う（今日的遺跡探検）	1999.6.14
34	毎日新聞	ぽっくり寺・吉田寺周辺、身近に感じる「古い」	1999.6.27
35	朝日新聞	9月のこよみ	1999.9.1
36	毎日新聞	9月のこよみ	1999.9.1
37	毎日新聞	年末年始のイベント	1999.12.18
38	朝日新聞	2000年のはじまりに...初もうでガイド	1999.12.31

以上の記事内容を詳しく見てみると、1970、80年代頃は吉田寺におけるポックリ往生の利益を強調する記事が主であるが、90年代以降になると、ポックリ信仰の人气が安定していくにつれて要となるポックリ往生の利益に注目しながらも、関連のあるイベントの方に重きが置かれ、特に9月1日に行われる当寺において最大の行事と言っても過言ではない「放生会」への報道や告知はほぼ欠かさず毎年新聞に登場する。つまり、吉田寺はありがたい利益がある「聖地」だけではなく、楽しめる「観光地」にもなっていると感じ取れる。テレビや新聞などに取り上げられるたびに参詣者の増加が繰り返される結果となった。

また、当時高度経済成長期を経た日本は、多くの公害事件など開発に伴うマイナス面が社会問題として顕在化し、経済効率を優先する生き方に反省を迫った。1970年3月に富士ゼロックスが掲げて流行語にもなった「モーレツからビューティフルへ」のキャッチコピーと、当時の国鉄が行なったキャンペーンでもうひとつの流行語となった「ティスカバー・ジャパン」とともに、高度成長に

疲れを感じた人々の琴線に触れた。各地への気軽な旅が人々の間に楽しみとして定着するきっかけとなり、旅行ブームとまでなった。特に家族とともに出かける旅行は、仕事の明け暮れに区切りをつける休息の役割と家族の一体感を生み出す上で効果を持ち、それまでと異なり旅を日常的な営みに置き換えたとされる⁷¹。これも後のポックリ寺巡りの盛況につながったのではないかと考えられる。

4 吉田寺におけるポックリ信仰の現状及びその参詣者

そのようにして 1970 年代から参詣者が急増し始め、ピークの時は、一日 10 台の団体バスで 500 人もの参詣者が押しかけたこともあった。時代を経るにつれて、一時のブームは去っても「ぽっくり寺ってどんなところかな？」と今日に至っても参詣者が少なからず訪れ、さらに、アメリカ、ブラジル、中国、シンガポールや韓国など海外からの参詣者もいると当寺関係者が教えてくれた。

吉田寺においては随時に祈祷が行われる。また、直接参詣できない場合は、郵送やファックスによる祈祷も行われる。そこで、本節において筆者は当寺に保存されている、名前や住所、性別、年齢（数え歳）などが記入されている「御祈祷申込用紙」と「参拝者申込書」を資料として利用し、2013 年 5 月 1 日から 12 月 31 日までの分を集め、月毎の人数推移、男女比、年齢や地域分布など参詣者像の分析結果を参照しながら、ポックリ信仰の構造及び展開状況を考察する。ただし、個人で拝観だけをして祈祷を受けない場合は記入されないということで、分析するものは記入した分だけを対象とするものである。

4-1 参詣人数の推移と男女比

参詣者は延べ 4343 人で、その中に祈祷を希望した者は 935 人で、その中の一人は「愛犬」（15 歳）のために祈祷を受けている。祈祷希望者の中には、男性と女性がそれぞれ 275 人と 620 人となり⁷²、男性は女性の半分以下である。ここでポックリ信仰の一つ大きな特徴、すなわち女性参詣者が圧倒的に多いことが読み取れる。それには色々な要因があるが、一つ考えられるのが女性のクチ

⁷¹ 湯川洋司「生きがいと労働観」佐野賢治ほか編『現代民俗学入門』（吉川弘文館、1996（2001））

⁷² 団体参詣の場合は性別の項目に記入されていなかったため、この数値は個人参詣の分である。

コミの力である。クチコミとは元来、個人の口を介して行われるうわさや評判などの伝達であり、マス・コミュニケーションに対して使われた造語とされるが、今日は、口伝えのみならず、ネット上の掲示板やブログなどで不特定多数に伝播されるものも含めて捉えられるようになってきたと宮木由貴子が示している。さらに、宮木は、口コミ情報の交換頻度は男性に比べて女性で高く、ネット上の口コミ情報の利用についても女性の方がやや多いと指摘している⁷³。「おばあちゃんたちの口コミの力が無視できないものですね」と住職の妻も冗談交じりで話している。女性、とりわけ高齢女性はおしゃべりを好み、比較的休暇時間が多く、自分なりのネットワークを形成し、様々な情報共有をするわけである。仮に、ポックリ信仰の話になると、「この間吉田寺っていうお寺へお参りに行ってきた」とか「奈良にはポックリ往生ができるという霊驗あらたかなご利益があるお寺があるよ」「その御本尊の阿弥陀如来さまに願ったら、本当にポックリ往生を遂げた人がいるって」など吉田寺の話が持ち出され、盛り上がるのが予想される。それが事実かどうかはともかく、情報共有自体が吉田寺におけるポックリ信仰の伝播に大いに役立ったことは十分考えられる。

図4-4-1が示しているように、記入者数は5月と10月、11月が一番多いことがわかる。ゴールデンウィークを挟む春季や気候のいい時期、つまり、出かけやすい時期に訪れる参詣者が特に多いことである。また、祈祷希望者は60歳以上の者がほとんどであり、9割以上を占めている。その中、70代が一番多いことがわかる。つまり、高齢の参詣者が主であることはポックリ信仰のもう一つの特徴と言えよう。

⁷³ 宮木由貴子「現代の消費者における『クチコミ』」（第一生命経済研究所、2009年10月）36頁を参照。

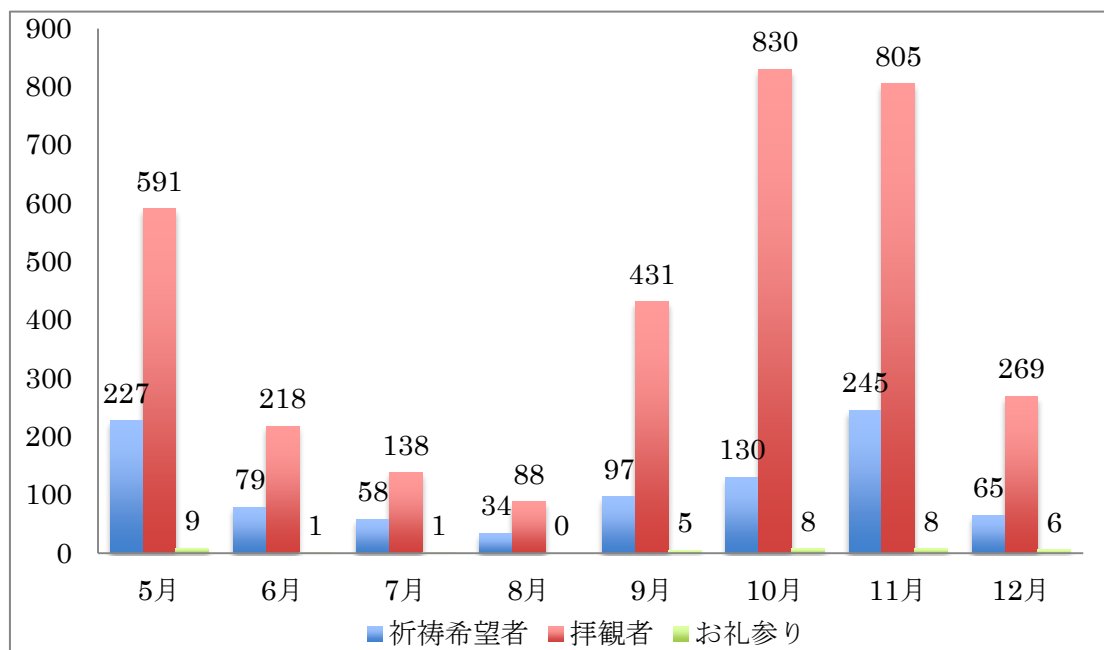


図 4-4-1 記入者の月毎の人数推移 (筆者作成)

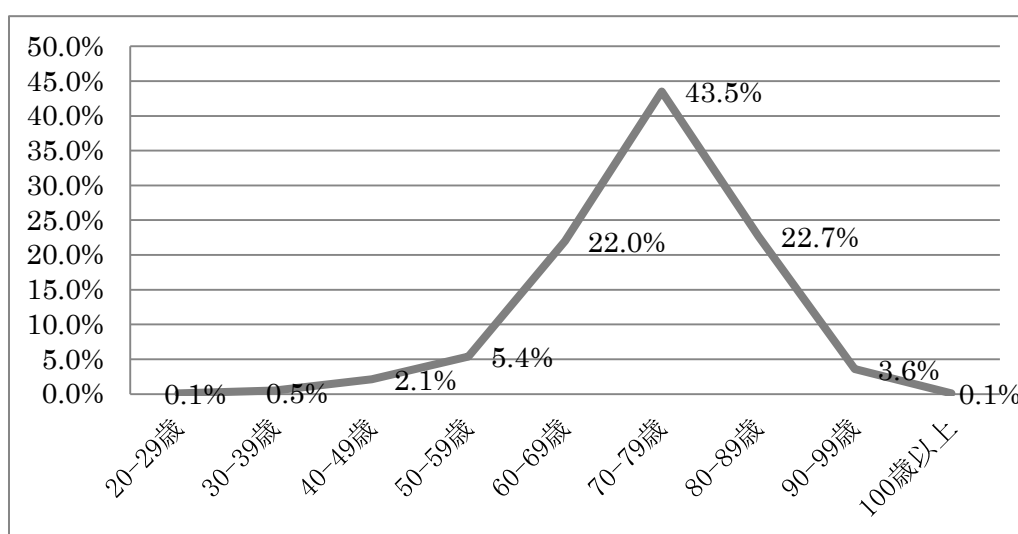


図 4-4-2 祈禱希望者の年齢別の人数推移 (筆者作成)

4-2 参詣者の地域分布

全記入者 4342 人の中に、出身地が確認できたのは 4304 人である。「ポックリ寺」として名が知れ渡った吉田寺は全国各地から参詣者が訪れるわけであるが、特に近畿や中部、四国地方からの参詣者が多いことが今回の調査で明らかになった。

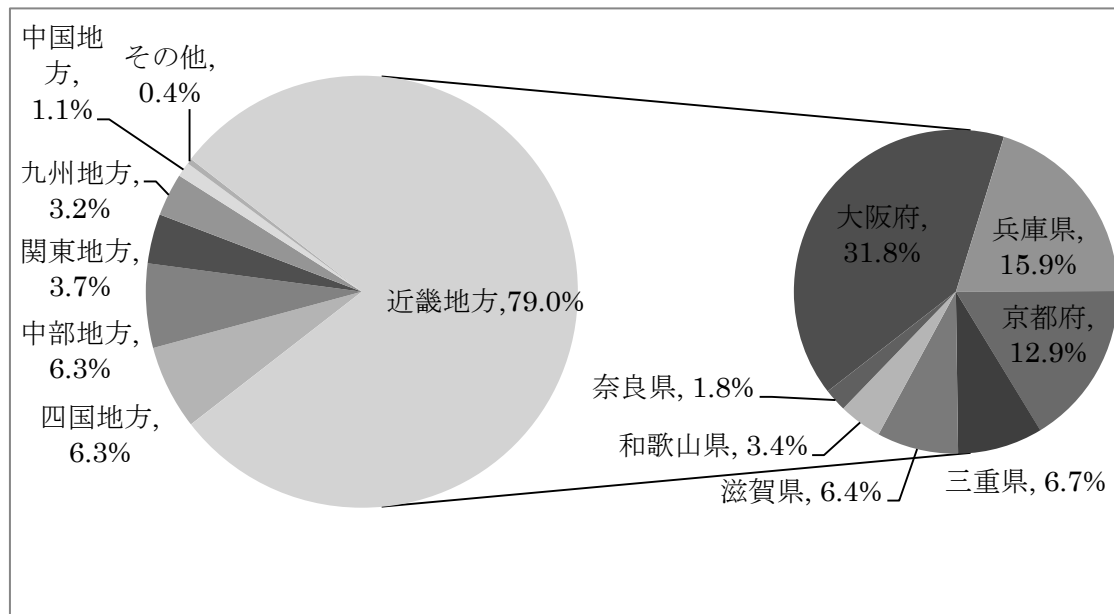


図 4-4-3 参詣者の地域分布（筆者作成）

図 4-4-3 で示されているように、およそ 8 割の記入者が近畿地方からであるが、吉田寺の所在地である地元の奈良よりも大阪、兵庫、京都からの参詣者が多いのがわかる。「遠いほど神」のように、近くのカミサマは「氏神」のようにわれわれ生活全般を守ってくれるとすれば、空間的に遠くにいるカミサマは生活全般というよりも、ある特定の面で機能を発揮し守ってくれる一種の「機能神」のような存在である。ここでも、地元の奈良より周辺からの参詣者が多いことはそれと通じるのであろう。その他、四国、中部地方や関東地方も多くないが、それなりの数を占めている。総じていうと、吉田寺におけるポックリ信仰の影響圏は、大阪を中心とする近畿地方で、しかも地元の奈良よりも隣の大阪をはじめとする周囲の県からの参詣者が多いことが一つの特徴である。

なお、祈祷を受けた者の願いが叶った、つまりポックリ往生を遂げた場合、お礼参りの塔婆回向

が行われる。その際、祈祷を希望するときもらったお札が当寺によって焚かれる。図 4-4-1 を見ればわかるが、お礼参りは今回の調査で合計 38 件があった。お礼参りは、神仏にかけた願の成就した札に参詣することであるが、ポックリ信仰になると、願が成就されたということは、その願主がもう亡くなったということであるので、本人が直接お礼参りに来るわけではない。ゆえに、死者に変わって家族などがこの願の成就した札に参詣することになる。今回扱われている資料の中に、亡くなった人の子供や兄弟がお礼参りに来た場合がほとんどである。38 件のお礼参りのうちで、31 件は死者の年齢が確認でき、70 代が 8 人、80 代が 13 人、90 代が 8 人、50 代と 60 代それぞれ 1 人である。つまり、高齢で亡くなった、いわゆる大往生を遂げた人が多い。また、「よい見取りができた」とか、「おかげさまで、母の下の世話をしたのは 3 日だけで済みました」とか、「よい往生でした」などの話がよく聞こえる。さらに、「あやかりたい」という気持ちで亡くなった人の子や孫が参詣するようになったというケースも見られた。安楽に往生できたならば、往生した本人のみならず、残された人にとってもそんな悲しいことではないから、「あやかりたい」気持ちになるのであろう。なぜかという、ポックリ信仰の願いは、その前提に、健康で長生きする願いが立ち、結果として安楽往生を迎えたからである。

4-3 団体参詣

4-3-1 ツアー団体

今回資料として利用した団体参拝者申込書には、57 件の団体名が示され、それらを表 4-4-1 にまとめてみた。

名前だけで判断不能なものは 4 件があり、それを除けば、各種の老人クラブや老人福祉施設などが 15 件あり、約全体の 3 割を占め、高齢層の団体が多いことが一つの特徴だと言えよう。その次には、「〇〇市食生活改善推進協議会」、「〇〇町消費者協会」、「〇〇地区更生保護女性会」、「〇〇自治会」などの地域団体が 14 件あり、約 2 割を占めている。また、宗教団体は 8 件ある。その他、同じ趣味による結成された団体やボランティア団体、企業の会員による結成された団体などが比較的少数に留まっている。

表 4-4-1 ツアー団体（筆者作成）

団体性質	件数	%
老人クラブや老人福祉施設	15	26
地域団体	14	24
宗教団体	8	14
趣味関係や研究会	5	9
ボランティア団体	4	7
企業の会員による親睦団体	3	5
職場関係	2	4
同窓会	2	4
不明	4	7
合計	57	100

4-3-2 旅行業界の関与

吉田寺は檀家がないにもかかわらず、全国各地から大勢の参詣者が訪れるのには、旅行関係業者の関与も一つの大きな要因であると考えられる。マイカー参詣のみならず、旅行会社やバス会社主催の「ポックリ往生寺巡り」といった参詣ツアーも企画されるようになり、多くの参詣客をこの地に運んできた。

当寺の「団体参拝者申込書」の記録によれば、8ヶ月間に、計 92⁷⁴件のツアーで、延べ 3370 人が吉田寺に訪れた。その中に、43 件が明確に旅行会社名、あるいはバス会社名を示している。図 4-4-4 はそのツアーを企画する各旅行会社の占める割合を示すものである。

⁷⁴ 一件のツアーにおいて旅行会社名、あるいはバス会社名と団体名が同時に書かれている場合があるため、全体の 92 を超えている。

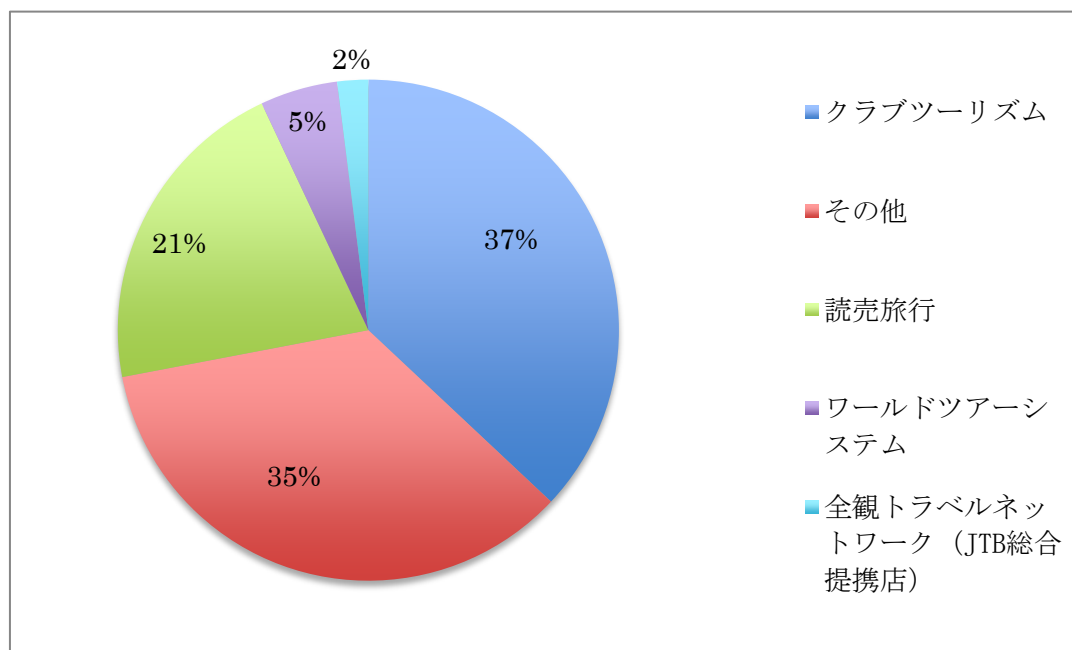


図 4-4-4 団体参拝を主催する旅行会社の詳細（筆者作成）

クラブツーリズム（KNT-CTホールディングス）によって組まれた団体参詣が最も多く、全体の 4 割弱を占めている。その中に、7 割がクラブツーリズム関西旅行センター（大阪）によって組まれ、他はクラブツーリズム神戸旅行センターとクラブツーリズム京都旅行センターによって組まれたものである。このクラブツーリズムでは、様々な旅行プランが企画されるが、特に「テーマ旅行」というものが設けられている。「テーマ旅行」には、全国の霊場めぐりや日本百観音めぐりなどが含まれる「こころの旅」や「神社仏閣めぐり」といった「美術」、「寺・仏像」、「歴史」のテーマで組まれるツアーがある。これらのツアーはお参りの旅の専門スタッフが添乗し、巡拝用品や参拝方法なども説明してくれ、65 歳から 85 歳の客を中心に、女性一人での参加が多いのが特徴であると当社のサイトで記されている⁷⁵。ここ吉田寺も「テーマ旅行」の該当地の一つとして企画に入れたのであろう。

次は読売旅行によるもので、全体の 2 割を占め、そのうち、関西エリアの営業所経由のものがほ

⁷⁵ <http://www.club-t.com/theme/culture/kokoro/about> を閲覧、2014 年 12 月 2 日。

とんどである。その他、ワールドツアーシステムや全観トラベルネットワークなど多くの旅行会社がポックリ信仰のメッカともいえるべき吉田寺を、観光スポットとしてツアーコースに組み込んで参詣者をこの地に運んできたことがわかる。一方、吉田寺は法隆寺インターまで約 1.5 メートルの至便の地に位置し、境内に大きな駐車場があり、観光バスが立ち寄りやすい条件を備えている。旅行会社が参詣客の運送をバス会社に委託する場合もあれば、バス会社が自ら参詣ツアーの企画から運送まで実施する場合もある。名鉄観光バスや遠州鉄道バスなど多くのバス会社がこのタイプのツアーを実施している。

このように、旅行関係業者の関与が吉田寺におけるポックリ信仰の展開に特に顕著であり、各地の旅行会社やバス会社が吉田寺を旅行商品として積極的に参拝ツアーに組み込み、吉田寺と参詣客をつなぐパイプ的な役割を果たしている。ゆえに、北の北海道から南の沖縄まで全国各地津々浦々から参詣者が訪れることになったのであろう。

一方、これらの参詣客は、ただ吉田寺を観光地として、著名な建築物、仏像や美しい景色などを鑑賞することにとどまらない。この寺にはポックリ大往生ができるという霊験あらたかなご利益があり、本尊の阿弥陀如来さまに何らかの霊的な力があると信じ、仏像に対して手を合わせて長寿無病などを祈ったりするわけで、信仰と行楽とが矛盾なく同時に取り入れている姿勢が窺える。

以上、吉田寺におけるポックリ信仰の展開についての分析を試みた。古くから吉田寺にはポックリ往生の言い伝えがあるが、それは限られた人だけが知るものであった。しかしながら、今日においては代表的なポックリ寺の一つとして名高く、ポックリ信仰のメッカともいえるべき存在になった。その要因には、当時の社会背景やマスコミの影響、旅行会社の推進などが考えられる。また、考察を通して現在のポックリ信仰のいくつかの顕著な特徴を見つけることができた。まず、祈祷者の中に、圧倒的に高齢女性が多いところから、ポックリ信仰は特に高齢女性の願いによって支えられていることがわかる。これは流行期から変わらずポックリ信仰の一般的な特徴と言えよう。その裏には平均的に男性より女性のほうが長生きすることと、介護への意識の違いが挙げられる。長生きして、もしも老後長患いして寝たきりになった場合、誰かに介護してもらう必要があるが、誰に頼るかに男女の差が見られる。小谷みどりの調査結果によると、男女とも困ったときには配偶者が頼り

だという傾向が見て取れたが、6割近くの男性は配偶者が「とても頼りになる」と回答した一方で、女性では約3割にとどまっている。それが介護の場面になると、男性では「配偶者」による介護への抵抗が最も少ない一方、女性では、同性の介護者以外に介護されることに強い抵抗感を持っている⁷⁶。つまり、多くの男性は万が一の場合は妻に介護してもらうことを期待していることに反して、女性は夫に介護してもらうことをあまり望まない。その上に、子供にも迷惑をかけたくないから、できれば自力で全うし、周りの誰にも迷惑をかけずにポツクリと死んで行けるようにと神仏に救いを求めることに至ったのではないかと推測できる。

ほかに、男女のロコミの差も考えられる。無論、前述のように、吉田寺におけるポツクリ信仰の流行には新聞やテレビなどマスメディアの役割が大きかったが、ロコミの力も無視できないものである。一言でロコミと言っても、男女の差があることが問題である。宮木由貴子の研究調査によると、男性がコミュニケーションを情報伝達の「手段」を捉え、無目的なやりとりを面倒くさがる傾向があるのに対し、女性はそれ自体を「娯楽」と捉え、やりとりを楽しむ傾向が強い点が認められている⁷⁷。ゆえに、女性は男性よりおしゃべりが好きなわけである。それがお婆さんたちの間で形成されたコミュニティにおいては、より顕著に見られる。お互いに自分の老後生活を語りながら、情報共有もする。しかしながら、男性の長寿化などにより、男性参詣者も相当な数を占めていることを見逃してはいけな

さらに、参詣者の中に、高齢者だけではなく、50代以下の者も何人かいた。それは祈祷を受けた人の子や孫が主である。そういった人たちには「よい見取りができたから、あやかりたい」という共通な認識が読み取れる。安楽に往生が遂げられ、往生した本人のみならず、残された人にとっても悲しいことではないのであろう。

また、かつて認知症や寝たきりのことを他人に言い難かった時代には、参拝者たちは安らかな最期を祈るために、人に見られないようひっそりと来るが多かったと同山の関係者が言うが、今は友人や同僚などと一緒に訪れたり、あるいは団体ツアーに参加したり、楽しみながら参拝するよ

⁷⁶ 小谷みどり「介護されることについての意識―主として性差の視点から―」『ライフデザインレポート』、第一生命経済研究所、2014年7月。

⁷⁷ 宮木由貴子「男女間コミュニケーションはなぜずれ違うのか」『ライフデザインレポート』、第一生命経済研究所、2014年1月。

うになった。このような変化には、社会進歩に伴う人々の意識の変化のほか、観光業者の参入も無視できない要因だと考えられる。旅行会社やバス会社がここを一種の「聖地」として扱い、旅行商品に取り入れるいわゆる「宗教ツーリズム」である。参加者が部分的ないし全面的に宗教的理由に動機づけられているツーリズムが宗教ツーリズムであるとリンシードが定義している⁷⁸。いずれの宗教施設においても同じ状況だと思われるが、信心篤い参拝者もいれば、それほど信じていなくても神仏に対しての敬虔さを持ち、賽銭を供えたり、線香を立てたり、神仏像に向かって手を合わせたりする行いも少なからず見られる。参拝客が吉田寺に訪れ、身体健康や安楽往生といった思いを込めて絵馬に書いたりお守りを買って求めたり願ったりするような宗教的行為を執り行うと同時に、本尊の阿弥陀如来をはじめ、国の重要文化財である多宝塔や大日如来像の鑑賞、さらに近くにある法隆寺や周辺の豊かな詩情が味わえる田園風景まで、いろいろとなる旅の行楽も求められる。今日、その大盛況はブーム期と比べると少し落ち着いたように見えるが、安定した活況はまだ続いていくのではないかと考えられる。

⁷⁸ Gisbert Rinschede 「Forms of religious tourism」 『Annals of Tourism Research』 19(1)1992 : 52 頁を参照。

第五章 東北地方におけるポックリ信仰の展開——風立寺を一例に

先行研究で見てきたように、ほとんどは広く知られており、しかも地域的には関西や四国に集中している。しかしながら、実際にそれほど知名度は高くないが、それなりの参拝者を集め、ポックリ信仰を展開している寺院が大量に存在していることも事実である。そこで、本章において筆者は東北地方におけるポックリ信仰の展開状況を概説し、さらに山形の風立寺を一例として、参拝者に焦点を当て、信仰の内実を探ってみたい。

1 東北地方におけるポックリ信仰の展開

1-1 会津ころり三観音

東北地方におけるポックリ信仰の展開という、まず思い浮かぶのは、「会津ころり三観音」であろう。会津三観音奉賛会事務局により刊行された「仏都あいづ 会津ころり三観音の旅」という冊子によると、人はすべて、三毒（貪瞋癡）によって諸々の苦悩を受け、この三観音を巡拝すると、み仏の導きで心に安らぎが宿り諸病がなくなり、健康に恵まれ、長寿を全うして、やがては病に伏すことなく大往生が約束され、来世には極楽に往生ができるとの由来がある。如法寺の「鳥追正観音」と恵隆寺の「立木千手観音」と弘安寺の「中田十一面観音」との三観音からなり、また堂内の「抱きつき柱」も本尊の三観音に劣らず信心の善男善女の願望を成就すると広く信仰を集めている。

第一霊場である如法寺（真言宗）の鳥追観音は、その縁起話によると、天平8年（736）の春、僧行基が会津巡錫の折、野沢のとある農家に宿した。行基は子にも恵まれず、鳥獣害による不作の貧苦で悲嘆に暮れる農夫を憐れみ、念持仏である一寸八分の聖観音像を授けた。以来、靈験がまことに著しく、一家は子を授かり、農作に恵まれ、幸福な人生を全うし、やがて観音様の導きにより、西方浄土に安楽往生が叶ったので、篤い信仰を集めるようになったと言われる。それを示すために、観音堂は、東西向拝口・三方開きという独特な構造になっており、東口から入り、鳥追観音に祈願したら、戻らずに西口から出ると、その彼方が「西方浄土」の世界なのである⁷⁹。また、写真 5-1-1 のように、堂内に二本の柱が立ち並び、「善男柱」と「善女柱」と称され、「慶長 18 年津川城主、

⁷⁹ 鳥追観音如法寺ホームページ：<http://www.torioi.com/info.html> を参照、2014 年 3 月 14 日に閲覧。

岡半兵衛重政公観音堂再建の時、善男柱は男衆、善女柱は女衆が集まり心願をこめて建立したと伝う。1、未婚者は良縁将来。2、夫婦は和合、家庭圓滿。3、厄除、長寿安楽、心願成就」とその縁起及び利益内容が書かれている。実は、この「会津ころり三観音」という名前もここ如法寺の住職である三留善明による発案で、今から 45 年ほど前、立木観音恵隆寺と中田観音弘安寺と相談してこのネーミングにしたと言われる⁸⁰。

恵隆寺（真言宗）立木観音は会津ころり三観音の第二霊場で、その「案内記」という印刷物によると、「別称をころり観音と申し、誠心誠意心願すれば、老若男女、貧富を問わず、平等のご利益が『ころり』と簡単に授かる。また、高齢の方が天寿を全うし、長患いをせずポックリ往生を心願すれば、『ころり』と旅立ちができ、後生安楽のご利益霊験があらたかである」と記されている。また、内陣右角にある「抱きつき柱」は本尊におすがりする代わりの柱として信仰を集め、「抱きつき観音」とも呼ばれていると書かれている。第三霊場である弘安寺（曹洞宗）中田観音堂にある「抱きつき柱」（写真 5-1-2）には、「歳をとって死病の床についた時には長わずらいをしない様にと心の中で念じて抱きついて下さい」ところり往生の利益が書かれている。長い年月を経て、ぴかぴかと光っている柱を見ると、どれほど参詣者に抱きつかれたのかが窺える。



写真 5-1-1 如法寺鳥居観音の抱きつき柱
(2014 年 7 月 31 日筆者撮影)



写真 5-1-2 弘安寺中田観音の抱きつき柱
(同左)

⁸⁰ 「祭り地図／鳥追観音例祭／信仰の姿を表したお堂／仁王像をなで心を清める」『河北新報』朝刊（1992 年 5 月 31 日）を参照。

1-2 普門院の「ころり薬師」

岩上山普門院（真言宗）は、山形県米沢市の郊外である関根にある寺で、大日如来が本尊として祀られている。当寺は縁起によると、仁寿3（853）年英慶法印が人々の治安と平穏を祈るために創立されたと言われる。約450年前、現在の場所に建てられ、その後、焼失し寛政8（1796）年に現在の建物が再建された。昭和10（1935）年に国史蹟と指定され、世に広く知られるようになった。ポックリ信仰と結びついているのは普門院の別当にあたる「錦戸薬師堂」に祀られている薬師如来である。この薬師如来像は、用明天皇とその皇子聖徳太子が一刀三礼しての作といわれ、もともとは奥州藤原氏に伝わり、秀衡の長男西城戸国衡の守り本尊であったが、秀衡の六男である頼衡が兜に奉安して吾妻山鳥越を経て、赤崩の地に守り伝えられ、「錦戸薬師堂」に安置され長い間信仰されてきたのである。ただ、現在は盗難を恐れて常時普門院本堂の正面左側にある小さな厨子の中に安置されており、例祭（5月8日・9月8日）の時だけ、奥の院と称される薬師堂に遷座されることになっている。「錦戸薬師堂縁起」によれば、昔から戦勝と臨終正念祈願に利益があるとされているが、いつの頃からか定かではないが、この薬師さまを信仰しよくお参りした者が死ぬ時に苦しまなかったことから話が広がり、いつの間にか「ころり薬師」と呼ばれるようになった。また病気や怪我だけでなく、生きていく上での不安や焦燥感などを取り除き、落ち着いた心を取り戻せると現在、薬師さまは、厄除開運、無病息災や安楽死などを願う大勢の人たちに篤く信仰されていると当寺のホームページに記されている⁸¹。

筆者は2013年11月2日に普門院に訪れ、高橋住職及びその関係者とインタビューを行なった。その話によると、ここは昭和45（1970）年から、参拝者が多くなり、年間参拝者が1万人に上ったこともあった。その中にはやはり60、70代の女性が圧倒的に多く、男女の割合はおおよそ3:7であったという。また、福島や宮城など東北一円からの参拝者が多く、とりわけ観光シーズン、すなわち5月や10月、または日曜日などになると、大型バスが3台ずつ押し寄せたことも多かったという。しかし現在は、昔のような盛況が見られなく、年間参拝者は千人ぐらいまでに減ってきているという少し冷めているような現状である。

⁸¹ 普門院ホームページ<http://fumon-in-yonezawa.jp/yakushi/>, 2017年11月30日閲覧。



写真 5-1-3 本尊の大日如来と脇の弘法大師
と興教大師（2013 年 11 月 2 日筆者撮影）



写真 5-1-4 普段秘仏となっている
コロリ薬師（同左）

1-3 関泉寺の「関のピンピンコロリ地藏尊」

「会津コロリ三観音」や普門院の「コロリ薬師」のように、昔から信仰されているものもあれば、最近になって新しく造られたものもある。Ⅱ部の冒頭でも取り上げられた宮城県七ヶ宿町関地区にある関泉寺（曹洞宗）の「関のピンピンコロリ地藏尊」はそれである。写真 5-1-6 で記されているように、この「ピンピンコロリ地藏尊」は約 90 年前に先代住職が檀家から寄進してもらった地藏で、ずっと本堂の中に祀られていた。が、高齢化の進みにより、お地藏さまが求められるものにも変化が起きた。七ヶ宿町は高齢化率が 44.6%（2014 年 3 月末現在）と宮城県内の市町村で最高ということで、年寄りたちの「元気に長生きし、できるだけ介護のお世話にならずに大往生を遂げたい」という願いがだんだん強くなったわけである。それに気づき、しかもお地藏さまを寄進してもらった檀家も亡くなった前日まで働いてまさにピンピンコロリの精神を見事に実践したということで、町民の願いが叶うように、新しく地藏堂の建立を決意したと住職が語る。2014 年 11 月に、「ピンピンコロリ」の発祥地ともいわれる長野県の「ぴんころ地藏」が祀られている「薬師寺」の承諾を得、「関のピンピンコロリ地藏尊」と名付け、境内に新しく地藏尊堂を建立した。この地藏尊堂は地元紙の『河北新報』に紹介されて以来、今、静かな人気を呼んでおり、地元だけでなく、岩手や福島からの参詣者も訪れ、多い時は一日 3、40 人、週末になると 100 人近くの参詣者が参りに来る

こともあると住職が語る。



写真 5-1-5 関泉寺の「関のピンピン
ころり地蔵尊」(2015 年 11 月 26 日筆者撮影)



写真 5-1-6 「ピンピンころり地蔵尊」の
縁起書(同左)

上記以外にも、東北地方には 10 数カ所があり、さらにまだよく知られていない、知る人ぞ知る小さな祠や道端に佇むものもあると考えられる。以下では、筆者が風立寺を一例に、聞き取り調査や絵馬調査結果を参照しながら、ポックリ信仰の内実を探る。

2 最上山浄国院風立寺

最上山浄国院風立寺は、山形県山形市下東山三宝岡にある天台宗の寺で、山形百八地蔵尊第二番霊場、北国八十八ヶ所第三十五番霊場、最上四十八地蔵尊第四番霊場、出羽十三佛霊場である。JR 仙山線高瀬駅から徒歩 5 分のところに、周囲を小高い山に囲まれ、人里を離れたような環境にある小さな素朴な寺である。が、歴史はかなり古い。当寺の「縁起略記」によると、当山は、平安時代文徳天皇の御代、斉衡三(856)年に慈覚大師円仁によって山寺(立石寺)を開基するに先立ち開かれたと言われている。歴代領主から崇敬され、特に山形城の城主最上義光に祈祷寺として篤く帰

依され、寺領を与えられ、最上山と号したという⁸²。寺号は、たちまち風輪が立ち起って霊験のあらたなることを祈念して大師自ら名付けたという。



図 5-2-1 風立寺周辺地図（「google 地図」より筆者作成）



写真 5-2-1 道沿いや電柱に掲げられる風立寺の立て看板（2015 年 5 月 13 日筆者撮影）

⁸² 山形県編『日本歴史地名大系 6』（平凡社、1990）316 頁を参照。

本尊は阿弥陀如来で、脇土観音、勢至の二菩薩が安置されている。なお、本尊は大師自ら白壇の香木を用いて、一刀三礼のもとに刻され、その胎には、大師が東北巡錫の折、夕陽干草の中より求めた一寸八分の阿弥陀如来の黄金仏が収められた。また、大正 13 年、現本堂が再建された際、黄金仏は現本尊の真下に安置されている。目をつぶって願をかけた後、さっと如来像の目を見ると如来像がまばたきするということから、古来より三宝岡の生き如来、また霊験あたらかな安楽往生の如来として信仰を集めており、通称「ぼけ、長患い封じのぼっくり寺」とも呼ばれている。



写真 5-2-2 風立寺本堂

(2015 年 5 月 13 日筆者撮影)



写真 5-2-3 切断された両手と詫び状

(2015 年 6 月 7 日筆者撮影)

さらに、当寺にはこんな逸話もある。本尊の阿弥陀如来はご利益があると聞いて、明暦 3 (1657) 年 5 月に下野国大田原町 (現在の栃木県大田原市) の有志が妬んで本尊を盗み出そうとし、それがバレないように如来像の両手をノコギリで切断、村のお堂に祀ったが、とたんに村中に悪病がはびこり、二年後には「如来さまのバチがあたった」と詫び状とともに風立寺に返したという。切断された両手と詫び状は今も当寺に残っており、この手で身体の悪いところをさすってもらおうと治ると言われている (写真 5-2-3)。

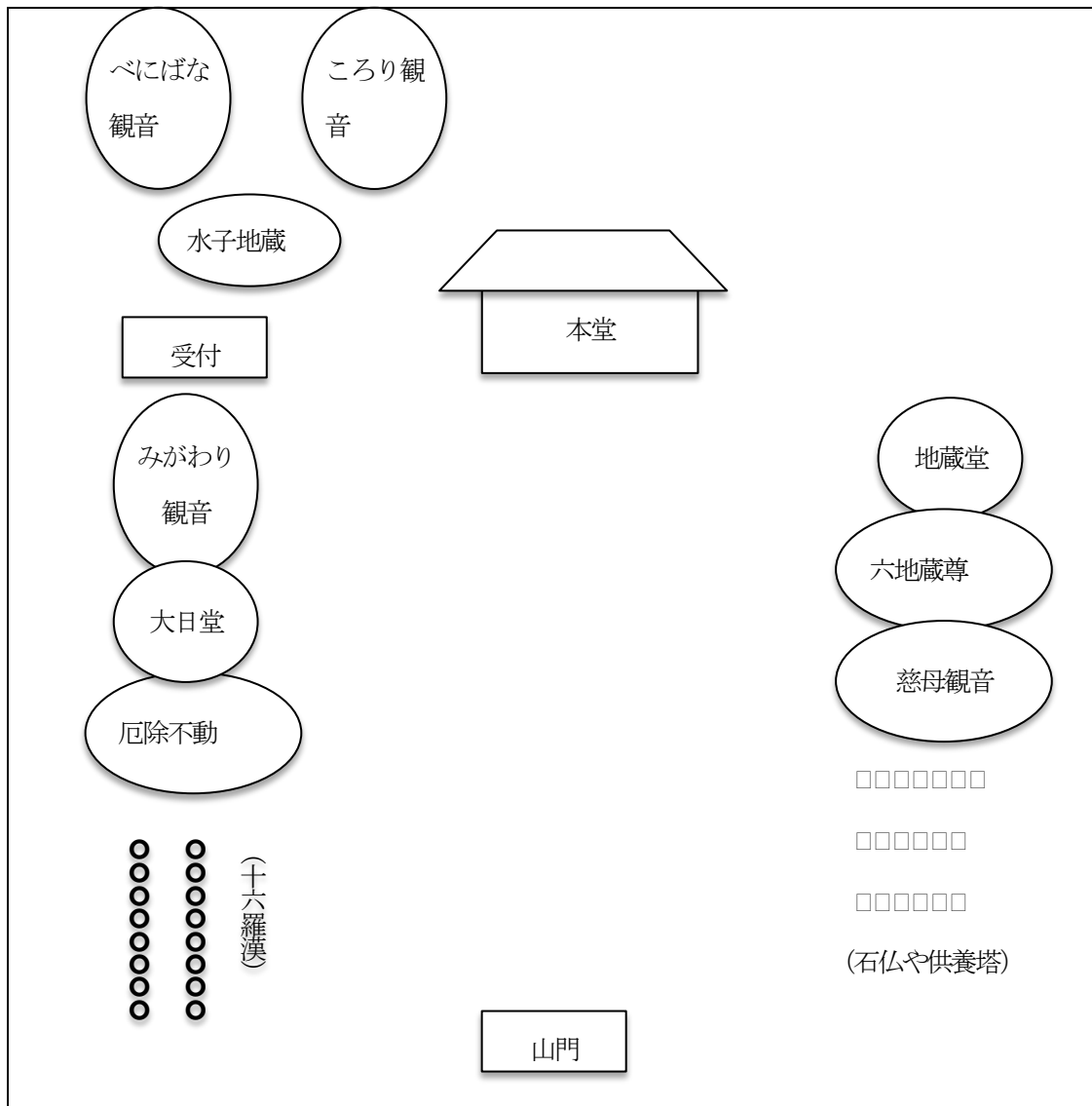


図 5-2-2 風立寺境内図（筆者作成）

上の境内図が示したように、山門に入ると、眼前にたくさんの仏像が立ち並ぶ。本尊の阿弥陀如来ところり観音のほか、十六羅漢や厄除不動、大日如来、みがわり観音、慈母観音、六地藏尊、水子地蔵など数多くの仏像が祀られており、実に濃厚な仏教的雰囲気包まれている。



写真 5-2-4 厄除け不動

(2015 年 5 月 13 日筆者撮影)



写真 5-2-5 みがわり観音

(同左)



写真 5-2-6 慈母観音

(2015 年 2 月 25 日筆者撮影)



写真 5-2-7 「べにばな観音」

(2015 年 5 月 13 日筆者撮影)

3 風立寺におけるポックリ信仰の受容

3-1 「安樂如来」と「ころり観音」

風立寺においてポックリ信仰の本尊はまず当寺の本尊である阿彌陀如来である。この阿彌陀如来がいかにか安樂往生の如来になったかについては、僧侶による法話で明かされる。2015年6月7日に筆者が行なった調査によると、以下のような内容となる。

「(前略) 本尊がみなさまの正面にある阿彌陀さま。阿彌陀さまは、みなさまご存知でいらっしゃると思いますか、極樂を作った仏さまですね。皆さまを助ける、極樂に。皆さまの願い事を叶えるまでは、わたしは菩薩から如来にならないっていう四十八の誓願を立てて、それが成就できて、如来になったわけですから、阿彌陀さまは皆さまを極樂へ。で、ここのお寺、856年に建ったんで、もう千何年もなってるんです。そういっぱいお参りしてくると、皆さんだんだん欲が出てくるんですね。極樂に連れてくれるだけでもありがたいと思うのに、『どうせ極樂行くんだったら、ころりに苦しめないで連れてくださいよ』って。そうやってお参りをされる方が多かったんです。いつの間にか、『ころりさん』『ぽっくりさん』っていうあだ名がついたんです。その願い事が叶うことが多かったから、ここもお寺も千何年も続いたわけですね。もしそれがきかなくて、あまりそういう願い事したのに、叶わなかったんだったら、とっくの昔に廃れて、お寺はなくなっているわけです。もともと檀家さんがないお寺ですから。でも幸いにして、今はね、80家の檀家さんがいらっちゃって、信者さんもお集まりもあって、なんとかこうやって維持していただきっているわけです。」

要するに、阿彌陀如来の本来の「極樂往生」と「来迎引接」という信仰から、臨終の際、阿彌陀さまのお迎えによって苦しみなく安らかに極樂浄土へ旅立つとポックリ往生の利益が作り出されたのである。さらに、それが数多くの霊驗話によって広がり、今日までに定着しているわけである。ここで住職から聞いた霊驗話をあげると、84歳の男性が、「おれは如来様に約束したんだから病気などしないであの世へ行く」と語って、そのとおりに、死ぬ前日まで元気に仕事をし、夕食を食べて床につき、翌朝、家族が床に行ったらすでに冷たくなっていたという話がある。また、願をかけた本人の家族から「お陰さまで三日後に往生することができました」と感謝の電話がかかってくることもよくあるという。



写真 5-3-1 本尊の阿弥陀如来と脇の観音、勢至菩薩（2015 年 5 月 13 日筆者撮影）



写真 5-3-2 「奥の院」にある「ころり観音」（2015 年 5 月 13 日筆者撮影）

ここにはもう一つの信仰対象が存在する。本堂の左脇に続く「安楽往生参道」を登ると、山上に「奥の院」と称されるところに祀られている「ころり観音」（写真 5-3-2）という石仏が現れる。住職の話によると、本当は観音菩薩ではなく、勢至菩薩であるが、ずっと昔から地元の人たちに観音

さまと親しまれてきた。それが、ある村人が病気になってお医者さんに診てもらってもなかなか治らず非常に苦しんでいるところ、この仏像に拝んだら苦しまずに亡くなったということから、いつの間にか「ころり観音」と信仰を集めるようになった。さらに、昭和 60（1985）年に、その隣に「あなとうと あんらくかんのん ともしひに かのよこのよのたびじあかるし」という「安楽観音御詠歌」の石碑も作られた。



写真 5-3-3 安楽観音参道

（2015 年 5 月 13 日筆者撮影）



写真 5-3-4 「ころり観音」（「安楽観音」）

（同左）

風立寺では、随時に参拝者の希望に応じて祈祷が行われる。受付で「御祈祷申込書」に名前と住所を記入すると、祈祷の木札や紙札が渡され、本堂で僧侶による法話が行われる。法話後、持参した肌着類や手ぬぐいなどをもって祈祷が始まる。祈祷が済むと、「胎内くぐり」が行われ、祈祷済みの肌着類や手ぬぐいなどに捺印してもらうというお参りの流れである。



写真 5-3-5 団体参拝者

(2015 年 6 月 7 日筆者撮影)



写真 5-3-6 僧侶による法話

(同左)



写真 5-3-7 祈祷済みの手ぬぐいに捺印

をしてもらう様子 (同上)



写真 5-3-8 捺印行列の並ぶ参拝者たち

(同上)

3-2 受容過程

前述のように、もともとここは最上義光が崇敬した祈祷寺で、財政的には豊かであったが、戦後の農地改革によって寺の所有地の大半が失われた。さらに、先代住職は現住職の中学生の頃亡くなったため、一時期無住職にもなってしまう、寺の維持が非常に困難な状況に陥った。そのため、現住職は昭和 42 (1967) 年住職になって三年目から 10 年間会社に勤めながら、住職を兼務したと本人が語る。こうした中で、転機が来たのは 1970 年代であった。当時、老人問題の深刻さの指摘からポックリ信仰が一躍脚光を浴び、各地から人々がポックリ寺へ押しかけた。その時から風立寺に訪れる参詣者も増えてきて、特に春と夏の命日には五、六百人がどっと押しかけ、仙山線も命日に

は高瀬駅の乗降客が急に膨れ上がり、たいへんな賑わいを見せていた。その盛況が1975年7月21日付の地方紙『河北新報』で「山形市風立寺 ころり観音は大にぎわい／世相反映する安楽死信仰／毎日50人前後が参拝／県外からもご利益求め／迷惑かけず安らかに“楽しく参る”それでいい」といった見出しで、本尊の阿弥陀如来像と参詣後お弁当を食べたり世間話に興じたりして楽しむお年寄りたちの様子など4枚の写真と1枚の地図を配置した記事が一面に掲げられた。新聞記事というマスコミによる初めての報道は、これ以後の参詣者の範囲を大きく拡大する結果を生むこととなった。

それまで当寺は特に宣伝に努めていなかったが、その勢いに、安楽往生の利益を人々に知らしめることで寺の経営を立て直そうと住職が考えた。会社の退職金を利用してパンフレットを作ったり、枕カバー、手ぬぐい、下着などのご利益グッズを売り出したりして宣伝に努めたのである。また、山形市観光課の協力を得ながら、バス会社や旅行会社とも提携し、その結果、昭和55(1980)年頃から平成10(1998)年までのピーク期において、年間参詣者が四、五万人ぐらいに上り、多い時は一日大型バス5台、マイクロバス15台が訪れたこともあったと住職が振り返った。個人で県内や近県からの参詣者はもちろんいるが、バスツアーなどによる団体参詣者が圧倒的に多いと住職が語る。およそ30年前に、庄内交通の旅行会社である庄内トラベルがバスツアーを企画して以来、毎年旅行会社やバス会社によるバスツアーが組まれ、山形県内のほか、仙台、岩手、秋田、福島など近隣一円をはじめ、東京や北海道からも、実に多くの参詣者を集めるようになったのである。現在はピーク期と比べると落ち着いているように見えるが、それでも、5月から11月の間、毎月バス2台の割で団体参詣者が訪れ、とりわけ全国生産量のおよそ7割を占めると言われる山形県のさくらんぼ狩りの6月が最も多いと住職が話す。



写真 5-3-9 風立寺のお守り
(2015 年 5 月 13 日筆者撮影)



写真 5-3-10 風立寺の「ぼけ封じお守まくらカバー」
(同左)

4 信者の内実

では、参詣者がいかなる理由を持って風立寺に訪れたのかを探るため、以下において、風立寺での聞き取り調査及び絵馬調査の結果を参照しながら、分析を試みる。調査は 2015 年 6 月 7 日に行なったものであり、聞き取り調査は岩手県花巻市のある部落からの団体参詣者の 18 人を対象に調査用紙を配り、インタビューした結果をまとめたものである（表 5-4-1）。

この団体の 18 人は全員女性で、その中に 10 人は 65 歳以上で、残りの 8 人は 1 人が 55 歳で、7 人が 60 歳以上 65 歳未満という中高年と前期高齢者からなる団体で、高齢の女性に多いというポツクリ信仰の一般的特徴はここでも顕著である。その中の半分が旅行会社の広告を通じて風立寺を知ることになったということで、地元だけの信仰ではなく、県外にもその名が広がっていることを物語っている。彼女たちはほとんど家族と一緒に暮らし、ここに来られたことは健康状態にも大きな問題がない、つまり特に孤独で惨めな境遇にあるというわけではない。が、表 5-4-1 でわかるように、やはり、身体のことと家族のことが一番気がかりである。これは彼女たちの参詣理由または祈願内容からも読み取れる。祈願内容に関して、「家族の世話にならないように」と「シモの世話にならないように」とを合わせて 94%の参詣者が祈ったと回答し、最も高い割合を占める。その次は、「安楽往生」で、78%の参詣者が祈ったと回答した。3 位を占めるのは「身体健康」で、39%の参

詣者がその祈りをしたと答えた。また、「長生き」したいと願った参詣者は28%を占める。つまり、「長生き」というよりも、家族など周りの人に世話をかけず、特にシモの世話をかけず安らかで苦しまない最期を遂げたいという願いを抱えている参詣者が多いことがわかる。老女の1人は「不安を取り除くために」参りに来たとした上に、「家族にシモの世話にならず安楽往生できること」を祈ったといい、まさにその祈りが不安の中身を語っている。もう一人の老女は、単刀直入に「ころり観音参りに来たよ」とし、「長生きし、最期に家族の世話、特にシモの世話にならないように」と観音さまに祈ったと話す。また、たとえここに来た理由を「観光」にしながらも、「身体健康」や「安楽往生」、「病気平癒」の願いをかけたと語り、本尊の阿弥陀如来さまやころり観音さまに対しての信心が窺える。

表 5-4-1 風立寺参詣者聞き取り調査結果（筆者作成）

年齢状況（人）	55-59 歳			60-64 歳			65-69 歳			70 歳以上		
	1			7			9			1		
家族構成（人）	一人暮らし			夫婦二人			家族と同居			その他		
	1			4			11			2		
心配事（複数・件）	身体			家族		金銭		人間関係		なし		
	10			10		3		1		1		
参詣回数（件）	初めて				2 回					3 回以上		
	16				1					1		
情報ルート（件）	娘	旅行会社の広告			近所の人		母親		友人		その他	
	1	9			3		2		1		2	
参詣理由・祈願内容（複数可・件）	身体健全	安楽往生	長生き		家族の世話にならな いように		シモの世話にならな いように		病氣平癒	観光		その他
	7	14	5		11		5		3	2		2

ただ、この聞き取り調査は 18 人しか取れていないという数少ないデータであるため、ポックリ

信仰の内実を探るにあたって非常に不十分と考え、当寺に奉納されている146枚の絵馬をも手掛かりとして考察を試みる。

1枚の絵馬に複数の参詣者が願い事を書いた場合があるため、合計164人の参詣者がカウントされた。まず名前で判断した結果、女性は98人で、祈願者全体の約6割を占めている。やはり女性が多いという特徴はここにおいても同様に见られる。願い事の具体的な中身は以下の表にまとめられた。

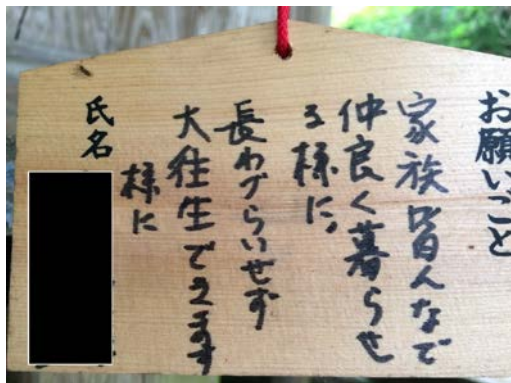


写真 5-4-1 願い事が書かれている風立寺に奉納されている絵馬 (2015年5月13日筆者撮影)

表 5-4-2 祈願内容（風立寺に奉納されている絵馬
より筆者作成） N=228⁸³

表 5-4-2 が示したように、身体の健康から、家庭や金銭、入試、良縁まで、様々な願い事が書かれている。その中に、ポックリ信仰の基本的利益と見なされる「健康祈願」「安楽往生祈願」「長寿祈願」にあたるものは、「身体健康」「安楽往生」「ぼけ封じ」「長患い封じ」「長生き」「人に迷惑をかけず（逝けるよう）」といった願い事であり、合わせて 131 件があり、全体の 8 割近くを占める。さらに細かく見ると、「身体健康」が最も多く祈願され、42 件がある。その次は「安楽往生」で、32 件がある。それから「ぼけ封じ」と「長患い封じ」はそれぞれ 29 件と 20 件がある。要するに、生きている間はやはり元気に生きていきたいと、最期は苦しまずに安らかな死に方を遂げたい気持ちが強く読み取れる。

祈願内容	件数
身体健康	42
安楽往生	32
ぼけ封じ	29
病氣平癒	22
長患い封じ	20
家内安全	15
入試合格	12
家庭円満	10
金運	8
交通安全	7
良縁	6
長生き	5
人に迷惑をかけず（逝けるよう）	3
その他	17

この結果は、前述の聞き取り調査と若干の差異が見られるが、健康な身体を持ちながら生き、最期に安楽往生ができることを、多くの参詣者が願うことには通じると考えられる。また、聞き取り調査で多くの参詣者たちが口にした「家族の世話にならないよう」と絵馬に書いてある「ぼけ封じ」「長患い封じ」とはかなり通じると考えられる。たとえばけになると、ぼけた本人にとっては何もわからないからまだましだと思えるもおかしくないが、家族にとっては、大変なことになるのは間

⁸³ 1 枚の絵馬に複数の願い事が書かれている場合があるため、全体の 146 枚を超えている。

違いはない。それを避けるために「ぼけ封じ」であったり、「長患い封じ」であったり願を立てたのではないかと考えられる。一方、「長生き」を願う参詣者は聞き取り調査でも、絵馬調査でも数少なかった。やはり、「人生は100年時代」と言われている今日、医療技術や衛生面がかなり進んでおり、以前と比べると、「長生き」はもう夢ではなく、現実になってきたから、カミに願わなくても、ある程度保証されるわけである。さらに、この調査結果を、1973年塚本哲による奈良・阿日寺で調査と1980年渡辺喜勝による山形・普門院での調査と比較してみると、時代とともに、ポックリ信仰の祈願内容も変化を見せる（表5-4-3）。

表5-4-3 祈願内容の年次別の推移（筆者作成）

祈願 内容 (%)	年次	1973 ⁸⁴	1980 ⁸⁵	2015 (N=131) ⁸⁶
安楽往生祈願		60	48	27 ⁸⁷
健康祈願		35	30	69 ⁸⁸
長寿祈願		5	22	4

それぞれ、調査方法や問題設定に相違があるため、比較をするのには無理があるが、大まかに、「安楽往生祈願」と「健康祈願」と「長寿祈願」との三つの枠で分けてみると、「健康」を祈る人が増える傾向が見られる一方、「安楽往生」を祈る人が減少しつつある。前章でも述べているように、ポックリ信仰のブーム期でもある1970、80年代においては、前例の見ない速さで高齢化が進み、高齢者問題の深刻さが露わになり、医療や福祉状況も不十分なため、悲惨な老後が待ち構えるかも

⁸⁴ 塚本哲『ポックリさん信仰』（保健同人社、1976）92-97頁を参照。

⁸⁵ 渡辺喜勝「民間信仰儀礼にみる死生観の一例—米沢普門院『コロリ信仰』を中心に」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』8（山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所、1981）33頁を参照。

⁸⁶ ポックリ祈願に関連のある祈りだけを計算に入れ、「家内安全」「入試合格」「家庭円満」「金運」「交通安全」「良縁」「その他」を除いた分である。

⁸⁷ 実際絵馬に書いてある「安楽往生」と「人に迷惑をかけず（逝けるよう）」という願い事を合わせて「安楽往生祈願」とみる。

⁸⁸ 実際絵馬に書いてある「身体健康」と「ぼけ封じ」と「長患い封じ」という願い事を合わせて「健康祈願」とみる。

しれない自分には、せめて安らかで苦しみのない最期を遂げさせてくれればとの気持ちがより強くなったのではないかと考えられる。現在、いくら医療技術が進歩したとしても、現時点ではまだ老化を防ぐができないし、その先にある死はなおさらである。つまり、事故死や大きな病気がない限り、だれでも老いを経て死ぬことになるわけである。そうすると、死を意識しながら、より良い生または老いを生きていくためのことを考えるのは当然である。それは、個々の願い事にも反映されるわけである。

終章

1 老いを生きる

人は誰でも生まれて、やがて死んでいくという過程を経なければならない。死があるからこそ、有限な生がより輝きを放つように見える。死あるいは死に方を問うことは、結局、生あるいは生き方を問うことになり、いかに生きていくかによって、自分の望む死あるいは死に方へと導いてくれる。しかし、その間に、「老」が待機している。その意味で、高齢者は「生」と「老」と「死」と関わりを持つコーホートとして、極めて重要な立場にいるわけである。

日本の伝統社会においては長生きした老人を崇敬の対象とする長寿信仰が見られる⁸⁹と宮田登が指摘している。宮田によると、日本の年齢の数え方に二つがあり、一つは現在の一般的満年齢の数え方で、もう一つ伝統的な年齢認識があり、誕生と同時に一歳、正月がくるともう一歳というように、正月の度に重ねていく魂の数を数える数え年の年齢である。そこでは、生命力は魂の数に比例して強まるものとみなされ、長寿の生命力こそが人々の憧れであり、長寿の者は神に選ばれた者として、他の人々から崇敬されるのであった。たとえば近畿地方およびその周辺の村落では、長寿の者こそが神祭りの神聖な役にふさわしいとする観念があり、魂の数がだれよりも多い人物こそが、人生の階段をのぼりつめて最高の位置についた、最も神に近い存在とみなす観念が生きている⁹⁰。高齢者は「還暦祝い」、「古希祝い」、「喜寿祝い」、「傘寿祝い」、「米寿祝い」などいわゆる長寿祝いをしてもらう一方、還暦を迎えた者は、現役の生産活動から退いて、神事や仏事などの宗教的行為に深く関わったり、村の揉め事の調停や相談に乗ったりして、村の精神的な支えとなってきた。要するに、高齢者は知恵を持ち、老練で尊敬されるものであった。

一方、それに対し、老いをプラスの意味で捉えるのではなく、マイナスの意味で捉えることもある。その典型的な代表は「姥捨山伝説」である。60歳になった老親を背負って山に棄ててに行く息子に対し、母親は息子が帰道に迷わないようにと木の枝をぼつりぼつりと折りながら行くという話がよく知られているタイプである。今日では、家族に施設などに入れられるケースがその現代版とみなされる。そのような行為の背景に、老人の無用視が前提となっていることは考えられる。

⁸⁹ 宮田登「老いを生きる」宮田登・新谷尚紀編『往生考—日本人の生・老・死』（小学館、2000）8-11頁を参照。

⁹⁰ 同上。

そのように老いの価値が変化している中、不安や孤立感に苛まれる高齢者たちは、「人生 100 年時代」と言われる今日において、昔より遥かに長くなった老後を、いかに生きていくかを自分で模索しなければならない状況にある。巣鴨とげぬき地蔵通りはまさにその模索過程の中で「おばあちゃん原宿」となり、「おばあちゃん」に求められる安らぎの場を提供している。つまり、年寄りたちは、死を見据えて、寺院へ神仏に祈ったり、お経を読んだり、線香を上げたり、供物を供えたりして、何らかの宗教的関わりを持ちながら、長い高齢期生活を楽しんで生きていき、心の拠り所を求める姿が現在の「超高齢社会」の一つの顕著な特徴として見ることができる。さらに、限られた生を全うし、その末にある死への対応が問われるようになる。ポックリ信仰はまさにそれへの答えの一つとなる。

2 時代の産物

宮田登は、民間信仰は現在の宗教文化現象として、いわゆる民間に生命力を持って機能している、明確な教理と教団組織が存在していない呪術宗教的な儀礼と観念の総体であり、そこには古くからの伝統的信仰と外来信仰、新しい要素を伴った都市や村落などの地域社会に見られる信仰である⁹¹と指摘している。これまでの考察を通して、ポックリ信仰はそのような特徴を帯びる民間信仰であることが確認できた。Ⅱ部の第一章のポックリ信仰の諸相からわかるように、様々な信仰対象と異なる多くの宗派が関わっており、固有の阿彌陀信仰や霊神信仰などに、ポックリ要素が加わって信仰対象となったことが確認でき、また教義や教団、宗派と関係なく、個人レベルで展開する規制の緩やかな性格を持つものである。これについて、渡辺喜勝も「コロリ信仰はまさに多神教的な性格をもっている」[渡辺 1981 : 30]と同様に指摘している。また、鈴木岩弓も「ポックリ信仰は、仏壇や墓などを通じてなされるイエを通じて＜非選択的信仰＞とは異なる、＜選択的信仰＞として老人たちに意識的に採用されてきている」[鈴木 2004 : 263]と述べる。

これまでの考察を通して、高齢女性に多く見られるのがポックリ信仰の一般的特徴で、さらにその内実は、端的に言うと、「生」と「死」と関わるものであることが共通認識である。その上で、「長

⁹¹ 宮田登「現代の民間信仰」『はやり神と民衆宗教』（2006、吉川弘文館）113-114 頁を参照。

寿祈願」「健康祈願」や「安楽往生祈願」や「家族や周りの人に迷惑をかけたくない」「シモの世話にかけたくない」など祈りが具体的に細分化される。ただ、それは、固定された祈りではなく、時代とともに変化を見せることが本研究の調査で確認でき、きわめて重要な点である。先行研究で祈りの核とされてきた「長寿祈願」が色褪せる一方、「健康祈願」が増加を見せている。やはり、経済や医療技術、衛生環境の整備のおかげで、昔と比べ、より容易に手に入るようになった長寿よりも、体の健康、いかに質のよい生を全うするかが重要視されるようになった。ぼけないように、長患いしないように、老後人に迷惑をかけたくない、特にシモの世話をかけたくないなどの願いも実は健康、良い生につながる。体が健康であれば、シモの世話など要らないのが当然なわけで、いわば「良い長生き」が理想であろう。

民間信仰は常に民衆の日常生活の展開するところに超歴史的に存在してきたものであり、その表出の仕方は必ず時代性によって支えられている⁹²と宮田登が指摘しているように、現代におけるポックリ信仰の展開は時代背景と不可分と言えよう。

繰り返し述べているように、ポックリ信仰は 1970 年代頃から流行となって、盛んに行われるようになったものである。1970 年代は、高度経済成長期と初期のオイルショックを経て、経済成長と生産第一主義政策の反省、環境破壊や水俣病に代表される公害問題のクローズアップなどから、人間性の回復が叫ばれるようになり、「量から質へ」と国民の生活意識とライフスタイルに微妙な変化が生じた時代であった。それだけでなく、様々な「非合理的復権」や新々宗教と小さな神々の台頭が起った、日本の宗教界にとっても重要なターニングポイントであった⁹³と西山茂が指摘している。また、NHK放送世論調査所の『日本人の宗教意識』においても、昭和 40 年代の後半あたりから、日本人は宗教から遠ざかる傾向が逆転し、再び宗教に近づき始めるという“宗教回帰”現象が見られると指摘されている⁹⁴。

さらに、序章で述べたように、1970 年代は本研究においてももう一つ重大な時代背景があり、それは高齢化問題である。1970 年に日本は「高齢化社会」に突入し、本格的に高齢者問題が迫ってきた。

⁹² 同上、137 頁を参照。

⁹³ 西山茂「現代の宗教運動」大村英昭・西山茂編『現代人の宗教』（有斐閣、1993（1988））190-191 頁を参照。

⁹⁴ NHK 放送世論調査所『日本人の宗教意識』（日本放送出版協会、1984）74-77 頁を参照。

老人福祉現状の不十分や老人対策の遅れなど、新聞にポックリ信仰が取り上げられるたびに、深刻な高齢者問題がポックリ信仰の流行に裏付けられていると指摘されていたことから窺える。また、その流行の契機となった『恍惚の人』という小説も認知症高齢者及びその介護者を描く内容である。そのように、1970年代は日本社会において高齢者問題が顕在化し始めた時期でもある。

このように1970年代の時代性がポックリ信仰の流行化に大きな役割を果たしている。当時、本文で取り上げた吉田寺と風立寺のように、あまり注目されていなかった寺社が突然大勢の人々の参詣により活況を呈し、一種の「流行カミ」⁹⁵のようになった。また、その流行化過程に、マスコミが大いに拍車をかけたことは明らかだった。マスコミは新しい行動なり思考様式が存在を、情報として提供する。しかもそれは、同一の内容のものを大量で不特定多数の人々に向けて同時になされるため、流行の普及を促進させ、より大規模な流行現象を作り出す作用を果たすのである⁹⁶。ポックリ信仰という一見人の死を願う新奇な信仰が、高齢者問題が多くの注目を集めている中で、マスメディアにとって格好のネタと判断され、テレビや新聞、雑誌など複数のメディアによってそれに関連する情報の提供がなされた。例えば、ポックリ信仰とはいかなるものか、ポックリ寺はどこにあるかなどの情報を人に伝達し、興味をそそる役割を果たしたのである。また吉田寺においても同様に、新聞やテレビ番組などに頻繁に取り上げられ、その霊験あらたかな利益譚や年中行事、祭りなどが繰り返し紹介される。一方、寺側もマスメディアを利用し、テレビ番組や雑誌の取材に応じたりして、名が広く知られるようになり、大勢の参詣者を集めたわけである。現代は情報化社会であり、その中に存在する宗教もマスメディアと密接な関係を持たざるをえない。

3 消費される「シニア商品」

ポックリ信仰は、その特異な信仰様式から、一般に老人クラブなどの団体に対し、観光ルートに組み込まれる傾向にある⁹⁷と渡辺喜勝が指摘しているように、いわゆるポックリ寺が「聖地」から

⁹⁵ 鈴木岩弓（1992）の定義によると、現代の流行神は「ことさら霊威ある存在と観念され、以前よりも、あるいは同時代の他の神仏よりも、熱狂的な多くの人々から信仰対象として選択されている神仏」である。

⁹⁶ 川本勝『流行の社会心理』（勁草書房、1981（1988））202-208頁を参照。

⁹⁷ 渡辺喜勝「民間信仰儀礼にみる死生観の一例—米沢普門院『コロリ信仰』を中心に」『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』8（山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所、1981）33頁を参照。

旅行会社に「観光商品」、特に「シニア向けの商品」へとリパッケージされ、消費される「宗教ツーリズム」のような性格が見出される。事例にあった吉田寺は檀家を持たないにもかかわらず、大勢の参詣者を集めることができたのは、まさに旅行会社による企画された「ポックリ往生寺巡り」といったツアーが大きな功を奏したことがわかる。風立寺の場合はなおさらである。前章で述べたように、風立寺は周囲を小高い山に囲まれ、人里を離れた環境にある小さな素朴な寺であるため、個人参詣者よりも、バスツアーによる団体参詣者が多い現状である。ただし、「宗教ツーリズム」とは、参加者が部分的ないし全面的に宗教的理由に動機づけられているツーリズムである⁹⁸ように、一言で「観光商品」なり「ツアー」と言っても、決して単なる観光目的だけではないことである。表面的な振る舞いからみると、参加者は明るく冗談交じりに巡礼を楽しんでいるような印象を強く受けるが、いざ祈りの段になると熱心になる⁹⁹という中山和久の指摘のように、人々はツアーにおいて有名な観光地を巡ることは、珍しい仏堂や仏像、あるいは美景などを鑑賞するような「観光」体験を行っている一方、仏像に対して手を合わせたり、線香を上げたり、絵馬に願い事を書いたりするような「信仰」目的も間違いなく参詣者の意識の中にあるわけである。つまり、そのようなツアー参詣者の内面的メカニズムは個人的な問題や不安定さの意味や、それへの対処法を見出そうという試みに価値が置かれている¹⁰⁰のである。このような傾向は、序章で触れた近年注目を集めている「シニアビジネス」の流れと通じる部分もあると考えられる。要するに、高齢化が進んでいく中、ビジネスなり宗教なり、シニア向けのあらゆるモノが途絶えることなく作られていくことが予測できる。

高齢化が進み、成長していく今日及び未来の社会においては、「生」と「老い」と「死」は絶対に避けられるものではない。「スマートエイジング」や「スマートダイイング」といった言葉のように、生き方、老い方、死に方が問われるようになる。その意味で、ポックリ信仰はそのような問いに対する無視できない選択肢の一つになり得るし、まだまだ続くのであろう。

⁹⁸ Rinschede Gisbert, *Forms of Religions Tourism*, *Annals of Tourism Research*, 19(1):52 頁を参照。

⁹⁹ 中山和久『巡礼・遍路がわかる事典』（日本実業出版社、2005）96 頁を参照。

¹⁰⁰ リーダー・イアン「現代世界における巡礼の興隆—その意味するもの」『現代宗教2005』（東京堂出版、2005）293 頁を参照。

引用・参考文献（五十音順）

- Gisbert Rinschede, 1992, Forms of religious tourism, *Annals of Tourism Research*, 19(1)
- 荒井貢次朗、1974、「ポックリ往生寺の創建と寺務管理」東洋大学東洋学研究所編『東洋学研究』8号、東洋学研究所
- 有吉佐和子、1972、『恍惚の人』、新潮社
- 斑鳩町史編集委員会、1963、『斑鳩町史』、斑鳩町役場
- 伊勢崎市編、1989、『伊勢崎市史・民俗編』、伊勢崎市
- 伊藤唯真、1984（1988）、「阿彌陀信仰の基調と特色」『阿彌陀信仰』、雄山閣
- 井上勝也、1978、「ポックリ信仰の背景」『ジュリスト増刊総合特集 12・高齢化夜会と老人問題』、有斐閣
- 入江徳郎、1978、「ぽっくり寺」『現代用語の基礎知識』、自由国民社
- 上野千鶴子、2000、『上野千鶴子が文学を社会学する』、朝日新聞社
- 江島其磧（長谷川強校注）、1701（1989）、『けいせい色三味線 けいせい伝受紙子 世間娘気質』（新日本古典文学大系 78）、岩波書店
- 大村英昭・西山茂編、1988（1993）、『現代人の宗教』、有斐閣
- 門田岳久、2013、『巡礼ツーリズムの民族誌—消費される宗教経験』、森話社
- 河北新報社、『河北新報』、2014年11月21日
- 川添登、1986、『植木の里』、ドメス出版
- 同上、1989、『おばあちゃんの前宿 巣鴨とげぬき地蔵の考現学』、平凡社
- 川本勝、1981（1988）、『流行の社会心理』、勁草書房
- 木崎茂雄、2014、『ぶらり、ゆったり、今こそ癒しの街・巣鴨』、展望社
- 北豊島郡農会、1918、『北豊島郡誌』、北豊島郡農会
- 木村博、1979、「「安楽死」をめぐる民俗」『葬送墓制研究集成第二巻 葬送儀礼』、名著出版
- 同上、1989、『死—仏教と民俗』、名著出版
- 同上、1993、「現代人と「ポックリ」信仰」仏教民俗学大系編集委員会編『仏教民俗学大系 1 仏教

- 民俗学の諸問題』、名著出版
- 来馬規雄編、1986、『高岩寺誌』、高岩寺
- 黒田俊夫、2005、「老親扶養をめぐる」毎日新聞社人口問題調査会編『超少子化時代の家族意識—第1回人口・家族・世代世論調査報告書』、毎日新聞社
- 小谷みどり、2004、「死に対する意識と死の恐れ」『ライフデザインレポート』、第一生命経済研究所
- 同上、2014、「介護されることについての意識—主として性差の視点から—」『ライフデザインレポート』、第一生命経済研究所
- 権田保之助、1974、『娯楽業者の群』、文和書房
- 佐江衆一、1985、『老熟家族』、新潮社
- 同上、1995、『黄落』、新潮社
- 酒井昭宏、2006、「安楽死／尊厳死」大庭健ほか編『現代倫理学事典』、弘文堂
- 佐々木陽子、2011、「三つの異なる死生観：宗教的、科学的そして土俗的見地から」鹿児島国際大学大学院経済学研究科・福祉社会学研究科・国際文化研究科編『鹿児島国際大学大学院学術論集』3
- 同上、2015a、「嫁いらず信仰」から見えてくるジェンダー—信仰対象はなぜ観音と地藏に収束するのか—『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』33（4）、鹿児島国際大学福祉社会学部
- 同上、2015b、「ぽっくり信仰」に潜む介護問題—文学作品を通して考える—『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』34（1）、鹿児島国際大学福祉社会学部
- 芝崎慎悟、1974、「ぽっくり信仰の実態—奈良・当麻・阿日寺の事例を通して—」『佛教福祉』創刊号、佛教大学社会事業研究所
- 鈴木岩弓、2004、「老いと宗教」池上良正ほか編『岩波講座 宗教』7、岩波書店
- 関沢まゆみ、2000、「ぽっくり信仰」福田アジオほか編『日本民俗大辞典』、吉川弘文館
- 袖井孝子、1990、「老年文学と老人の生活」渡辺勝夫編『群像』、講談社
- 武田道生、1998、「ぽっくり信仰」佐々木宏幹ほか編『日本民俗宗教辞典』、東京堂出版
- 圭室文雄、1992、「延命地藏印行利益記」について『明治大学教養論集』243号、明治大学教養

論集刊行会

- 同上、1999、「とげぬき地蔵と治病」日本風俗史学会編『風俗史学』9号、日本風俗史学会
- 陳甜、2014、「『恍惚の人』にみるポックリ信仰の流行」東北大学大学院文学研究科宗教学研究室編『東北宗教学』10、東北大学大学院文学研究科宗教学研究室
- 同上、2014、「『吉田寺』におけるポックリ信仰の展開」『論集』41、印度学宗教学会
- 同上、2015、「東北地方におけるポックリ信仰の諸相」東北民俗の会編『東北民俗』49、東北民俗の会
- 同上、2016、「ポックリ信仰研究の序説：ポックリ信仰の諸相」東北大学大学院文学研究科東北文化研究室編『東北文化研究室紀要』57、東北大学大学院文学研究科東北文化研究室
- 同上、2017、「巢鴨とげぬき地蔵に集う高齢者たち」金子義明編『文化』81（1・2）、東北大学文学会
- 塚本哲、1964、『心の相談室—カウンセリングと人間性—』、誠信書房
- 同上、1976、『ぽっくりさん信仰』、保健同人社
- とげぬき生活館、2009、『とげぬき相談創立50周年記念誌』、とげぬき生活館
- とげぬき生活館相談所、2014、『とげぬき生活館相談所の活動報告 平成26年』、とげぬき生活館相談所
- 長崎盛輝、1990、『色・彩飾の日本史』、淡交社
- 中村幸彦ほか編、1999、「ぽっくりわうじゃう：ぽっくり往生」『角川古語大辞典』、角川書店
- 中村元、1975、『佛教語大辞典』下、東京書籍
- 中村元ほか編、1989、『仏教辞典』、岩波書店
- 中山和久、2005、『巡礼・遍路がわかる事典』、日本実業出版社
- 日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部編、2001、「ころり」『日本国語大辞典』、小学館
- 同上、2001、「ぽっくり」『日本国語大辞典』、小学館
- 同上、2001、「ぽっくりおうじょう：ぽっくり往生」『日本国語大辞典』、小学館

- 同上、2001、「ぽっくり病」『日本国語大辞典』、小学館
- NHK 放送世論調査所、1984、『日本人の宗教意識』、日本放送出版協会
- リーダー・イアン、2005、「現代世界における巡礼の興隆—その意味するもの」『現代宗教 2005』、東京堂出版
- 久武綾子ほか、1997、『家族データブック』、有斐閣
- 藤井尚子、2015、『赤の力学—色をめぐる人間と自然と社会の構造—』、風間書房
- 藤井正雄、1980、「民衆信仰と戦後仏教の歩み」現代仏教を知る大事典編集委員会編『現代仏教を知る大事典』、金花舎
- 藤田宏達、1994、『浄土仏教の思想』、講談社
- 真野さよ、1981（1990）、『黄昏記』、岩波書店
- 宮木由貴子、2009、「現代の消費者における「クチコミ」」『ライフデザインレポート』、第一生命経済研究所
- 同上、2014、「男女間コミュニケーションはなぜすれ違うのか」『ライフデザインレポート』、第一生命経済研究所
- 宮田登、1993（1997）、『「心なおし」はなぜ流行る』、小学館
- 同上、2006、『はやり神と民衆宗教』、吉川弘文館
- 宮田登・新谷尚紀、2000、『往生考—日本人の生・老・死』、小学館
- 水野洋、1973、「安楽死と人権」『ジュリスト』548号、有斐閣
- 村田裕之、2012、『シニアシフトの衝撃』、ダイヤモンド社
- 森幹郎、1982（2004）、「解説」有吉佐和子『恍惚の人』、新潮社
- 柳谷慶子、2011、『江戸時代の老いと看取り』、山川出版社
- 山形県編、1990、『日本歴史地名大系』6、平凡社
- 山口信治、1978、「ポッキリ信仰にみられる老人の孤独（二）」佛教大学学会編『佛教大学研究紀要』62号、佛教大学学会
- 山中真悦、2001、「ぽっくり寺和尚が教える『往生の心得』」『新潮 45』20（3）、新潮社

- 山中清次、1991、「那須与一の伝承と信仰」栃木県立博物館編『那須与一の歴史・民俗的調査研究』、
栃木県立博物館
- 山中弘編、2012、『宗教ソールイズム—聖なるものの変容と持続—』、世界思想社
- 湯川洋司、1996 (2001)、「生きがいと労働観」佐野賢治ほか編『現代民俗学入門』、吉川弘文館
- 米村みゆき・佐々木亜紀子、2008、『<介護小説>の風景—高齢社会と文学』、森話社
- 渡辺喜勝、1981、「民間信仰儀礼にみる死生観の一例—米沢普門院「コロリ信仰」を中心に—」『山
形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』8号、山形県立米沢女子短期大学附属生活
文化研究所
- 渡浩一、1998、「地藏信仰」佐々木宏幹ほか編『日本民俗宗教辞典』、東京堂出版
- 同上、1998、「観音信仰」佐々木宏幹ほか編『日本民俗宗教辞典』、東京堂出版
- 1987、「新興霊場 和歌山、奈良、大阪の24カ寺がつくるぼけよけ地藏の活況！伝統もなく宣伝も
せず採算も排したボケ霊場の大成功のワケは何か」『月刊住職』14、金花舎

参考サイト

- 朝日新聞データベース：<http://database.asahi.com/library2/main/top.php>
- 河北新報データベース：<http://neokd.kahoku.co.jp/home.2>
- クラブソールイズムホームページ：<http://www.club-t.com/theme/culture/kokoro/about>
- 厚生労働省人口動態統計（2016年）：<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001191145>
- 「厚生白書」（昭和45年版）http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/hakusho/kousei/1970/
- 「厚生白書」（昭和48年版）http://www.mhlw.go.jp/toukei_hakusho/kousei/1973/dl/13.pdf
- 「光明功德佛ピンピンコロリ地藏」事務所ホームページ：
<http://www.takamori.ne.jp/~pinkoro/gaiyou.htm>
- 国立社会保障・人口問題研究所「日本の世帯数の将来推計」：
<http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/HPRJ2013/t-page.asp>

統計数理研究所ホームページ：

http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_all.htm

鳥追観音如法寺ホームページ：<http://www.torioi.com/info.html>

内閣府『平成 29 年版高齢社会白書』

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/29pdf_index.html

日本衛生材料工業連合会ホームページ：<http://www.jhpia.or.jp/data/data6.html>

日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団ホームページ：<http://www.hospat.org/research-309.htm>

普門院ホームページ：<http://fumon-in-yonezawa.jp/yakushi/>

毎日新聞データベース、https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/PCU/WMAI_ipcu_menu.html

読売新聞データベース、<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>